他が弟子達にも銀を與へたりしに、彼弟子ども尙も欲心歇すして又告狀に及んと、於于今乾淨と不濟。然るに舊年又一個の道士を請來り、銀子を與へ妖怪を拿へんと爲處に、彼道士令牌を響して法術を遣ひ、妖怪と相特鬪しに、天明に到り我們ども行て見れば、計すも彼道士溪水の中に滸し殺れたり。爾今此妖怪を退治し給はゞ、我箇莊中の長者を請來り、爾と我們文書を交易し、若し妖怪を退治せば汝の要るに憑ひ、多少の銀子にても贈るべし。倘又爾妖怪に負て命を失ひたり共、外の徒弟等跡にて圖賴事なかれ、互に天命に任すべし。行者嘲笑て曰く、爾無能の人を賴み剩へ圖賴ゆすられ、夫に怕氣付て文書を求るや。我は那樣の者に非ず。早く彼長者共を呼び來れ。彼老人大いに懽喜家僕に命じて八九位の長者を請來る。個々三藏師徒に見え、妖怪を拿ふる事を聞く、衆老懽喜事限りなし。偖何れの師徒か妖怪を拿へ給ふぞ。行者進み出て老孫にて候といふ。衆位の長者是を見て不濟々々、彼妖怪神通廣大にして身體狠犺なり。汝斯の如く丈低く然も疲たり。妖怪が齒の間に挾むにも不足ならん。行者曰く、我生質疲て小分といへども秀氣自ら中に有り、那ぞ妖怪を怕んや。長者の曰く、然らば爾妖怪を退治するに怎麼の謝銀を要るや。行者聞て我們は德を積む和尙なり。怎生謝銀を要んや。唯是一器の茶一鉢の飯則ち禮謝とするに足れり。衆位の長者是を聞て俄に拜謝して懽喜ところに、忽然として一陣の狂風吹き來る。彼長者們大いに驚き、偖は妖怪來れりと戰々兢々天を地へと騷動す。主の老人急に腰門を開き、家內の男女早く來れと三藏まで呼び集め、妖怪既に來れりと叫び立る。八戒悟淨も慌得驚き逃入んと爲處を、行者急ぎ扯住め汝等逃る道理なし、我們沙門の身として怎麼內外を分ざる。爰に在て俱に奈何樣の妖精やらん伺ふべし。八戒悟淨沒奈何怕々住り居たり。斯て彼陣風過る處隱隱として半空中に兩盞の燈光顯れたり。八戒是を見て大に笑て、能慰々々此妖怪管ず有行正ものならん。悟淨聞て其故を問ば、八戒が曰く、汝聞ずや古より云る事あり。夜行以レ燭無レ燭則止と。那看一對の燈籠を以て先達て來る。必定惡き者にはあらじ。悟淨が曰く、汝過れり那は是燈籠には非ず。妖怪が兩隻の眼の光なり。八戒三寸計り縮上り、怕怖や眼斯の如くならば、口の大いさ計り知るべからず。行者が曰く、能々汝は師父を大節に守護すべし。我空中に到り得と見屆來らんとて、鐵棒を推把て空中に飛升り、汝那厮なれば爰に來り人家に災害をなすや、其名をなのれと呼はりけれども、妖怪更に答をなさず、長き鎗を振廻し行者に向ひて戰んとす。行者は兩三度聲をかくれども、妖怪さらに一言を答ず。只管鎗を閃せば、行者笑て汝は聾なるか啞なるか、好々我鐵棒を吃へとて兩個空中に在て戰ふ事半時ばかり、八戒家に在て空中を伺ひ見るに、彼妖怪遮架になる計にて、行者を責討ことをせず。八戒悟淨に向ひ、汝は爰に在て師父を守れ、我戰ひを助けて妖怪を打殺ん。怎麼手を空くして猴めに獨高名させんやと、雲を發し飛升り釘鈀を以て突てかゝれば、妖怪又一條の鎗をつかひ、兩手に二條の鎗を以て、行者と八戒に戰合。八戒是を見て此妖怪寔に鎗の妙手なりと云ば、行者が曰く、他更に言いはず未だ人道に返らずして、陰氣遲きものと見えたり。怕くは天明に到り陽氣增る時

に到らば、管ず逃走る事あらん。其時管ず遁すべからす。八戒心得たりと云て又多時戰ひけり。既に東方發白の頃に至り、妖怪頭廻して逃出しけるを、行者八戒迹に續て追行しに、忽ち惡臭人を襲ふ。是則ち七絶山稀柿衞なり。八戒は堪かねて、是奈何臭き事や、是は那里の淘毛厠なるや。行者聞て汝亂話を云ふことなかれ。鼻を塞ぎ只早く追駈よと、終に山を馳せ過る頃、妖怪忽ち本相を現したり。行者八戒是を見るに、是一條の紅鱗の大蟒なり。巨口を開き兩個を呑んと劈ひよる。行者進んで近くと見えしが、唯一口に呑れけり。八戒驚き逃走り大いに叫びて泣悲む。行者妖怪が肚の裡に在て大音に呼つて曰く、八戒々々管ず驚く事なかれ。我今這厮を船にして見すべしとて、肚の裡に在て鐵棒を把り出し、骨に押當力に任て推付れば、彼大蟒甚しく疼み苦み、頭と尾先を空になし、恰も一艘の船の形に似たり。八戒是を見て大いに安堵し、大哥々々能く船に似りと雖も、梛逢なくては風を使ふに好しからず。行者是を聞て、等々我今帆柱を造り風を使んとて、鐵棒を推取のべ背骨に押當突上れば、皮肉の間を差貫き、高く登る事五七丈なり。寔の船の梛逢の如く、大蟒疼み苦み又原の道へ擴り廻りて下りけるは、唯風帆の船を走らしむるが如く、漸々に山を下る事二十五六里、終に鳴呼て死たりける。行者鐵棒にて一方を突破り、此穴より潜り出て八戒と兩個にて尾先を取て扭拏歸る。却說駝羅莊の長者たちは彼老人が家に集り、此兩人の和尙達も又妖怪の爲に殺されたらんと案じ煩ひ居るところに、次の朝に到りて、行者と八戒大いなる蟒を扯拏て歸り來りければ、衆位の老人たちを初めとして一莊中の男女老少都て皆集り來り、彼大蟒を見て跪下て行者を拜し、當下長老此妖怪を除きて我們が輩生を安んずる事を得たり、何を以てか此大恩を報んとて、夫より只管に待管つゝ五七日留めけれども、三藏師徒堅く辭して竟に別れて立出ける。衆位の老者たち金銀を贈れども更に受ざれば、沒奈何只乾粮菓品の類を贈りて餞別とし個々遠く送り來る。終に七絶山に近づきければ、其惡臭鼻を穿て堪べからず、路徑も皆埋れて通りがたし。三藏行者を招き此山怎麼して越べけんや。行者鼻を覆ひて曰く、許若氣力を費しなば通ふ事を得べけれども、唯だ食を營むべき人あらず。衆個の老者是を聞き、我們既に大恩を蒙る、奈何程の日數を間どり給ふとも、我們食を辨すべし。何ぞ食を營む人なしと曰ふや。行者が曰く、然あらば汝等許多の乾飯、又は餅饅頭の類ひを備へ來れ、彼蟒長き和尙は足早し、彼に與へて大きなる猪となし、此道を開しめん。八戒笑て我猪となる事容易しと雖も、腹肥大にして食を費さん。若しものを喰て滿飽なば管事を齊ん。衆個の老人最安き事なりとて、追々人を走らせ個々談合せて許若の食を贈り來りければ、八戒大いに懽喜て身を變じて巨大なる猪となる。頭より其尾に到りては長き事百餘丈、蹄より背に到りては高き事千尺餘り、一莊許若の人々食を送り來る事其數を計りがたし。恰も山の如くに積上けるを、八戒是を殘りなく喰ひ盡し、上に進んで路を開く。一息に五丁八丁づつの土を搔のくる。許多の人步は走り駈りて食を送る事絶間なし。八戒彌力を盡し終夜道を開く。行者は師父を助け沙僧は行囊を擔ひ、迹に續いて進みゆく。終に三晝夜にして七絶

山を通り越え、師徒四人老者どもに別を告げ急いで西方へ進み給ふ。

朱紫國唐僧論二前世一
孫行者施二爲三折肱一

月往日來りて又夏の炎天に到り、三藏師徒四人一構の城下に到る。城の上に黃なる旗を建て、朱紫國と記したり。三藏の曰く、此處極めて一國の王城ならん。城に入つて關文を換べしとて城門に進み、街を過て會同館に到る。館を預る大使出迎へ仔細を問ふ。三藏合掌して貧僧は東土大唐より、西天に赴き佛祖を拜し經を求るの僧なり。今大國に來りて關文を換ん事を願ふ。大人よろしく國王に奏し給はるべし。大使禮を施し且先爰にて歇み給へと、四人を館中に招じ入れ、諸多の官人に命じ齋を調へて種々と接待、其後大使三藏を伴ひ國王の宮中に到り、始終を仔細奏しければ、國王懽喜で朕今身に病有るに依て、久く朝に臨ざる處、當下遠く唐僧の來る事誠に我懽喜なりと、直に三藏を殿上に召て座を給ふ。三藏國王に禮拜し關文を捧ければ、國王是を披き見終りて曰く、汝が大唐は今幾許の世を受け、君臣正しく明なるや。唐王何によつて死て又蘇生、此大願を起し汝に命じ佛を拜し經を求むるぞ。三藏曰く、我本國は往昔三皇世を治む。いはゆる大昊炎帝黃帝是なり。又五帝嗣で世を治む。少昊、顓頊、帝嚳、堯、舜、次に三王なり。禹、湯、武、此三皇五帝三王何れも聖明にして天下泰平なりしを、終に七雄覇を爭ふに到り、六國秦の爲に幷呑せられ、久しからずして天下漢の高祖に歸す。其後晋の司馬氏國家を保ち、宋、齊、梁、陳、隋の五代を經て四海皆我唐朝に歸伏し、萬國靜謐四民安樂なり。我太宗皇帝大德寛仁にして堯舜の風あり。今貧僧に命じて佛を拜し經を求しむる謂れは、斯樣かやうの仔細なりとて、龍神雨を過ちて天の罪を受け、唐王に救を求しを魏徵夢に龍を斬る、彼龍祟りをなして唐王冥途に赴く處、崔玨判官に魏徵書を贈り、再び蘇生て陽門に返り給ひ、水陸大會をなして幽冥に謝し給ひし時、觀音菩薩出現ありて、大乘の妙經西方に有る事を示し給ふ。此故に貧道勅命を蒙りて西方に來れるなりと、仔細に是を語り給ふ。國王聞て贊歎し、寔に天朝大國の風君正しく臣賢なり。我今久しく疾有ると雖も、是を救ひ助けんと思ふ臣下一人も有る事なし。三藏是を聞て國王の相貌を見奉るに、形容衰へ心神脫たり。其病根を尋參せんと思ふ處に、光祿寺の官人唐僧に齋を侑んと禀しけるにぞ、國王三藏を請じて相伴し、山海の珍羞を備へ心を盡して接待けり。却て說く行者が輩三個は、會同館に在て歇み居けるが、悟淨は飯を調へて菜を煮として、鹽醬油酢なき事をつぐ。行者八戒に向ひ、儞街に行て買來れと云ども、八戒躺椅にて動かず。行者渠を欺んと思ひ謂て曰く、彼街には燒餅、饅頭、羊羹、砂糖、餅、油食、蜜食、其外旨き物許若ありしを見ざるや。然ば吾行て是を買とゝのへ、思ふ儘に賞用すべしと、器を取て立上れば八戒口に涎をながし、哥々我も儞と俱に行て彼品々を賞用せんと、兩個打連立て出行たるが、程なく鼓樓の下に致る。爰に限りなき人群集して押合揉合わめきけるにぞ、八戒是を見て我們行く事能はず、彼群集の輩我們が醜しき形

を見ば、極めて怕れて逃走り、或は倒轉び又は踏殺しなど爲事有らば、却て我們を捉へて償命とせんと云べし、不可行々々と云て動かざれば、行者笑ひて然あらば汝は爰に止まりて待べし。我行て物を買來んと云捨て走り行き、群集の中に分入、何事にやと是を見るに、此處に一張の皇榜を張かけて有り。一邊に十一人の大監校尉札を守りて並居たり。行者近倚て是を讀む。其文に曰く、

朱紫國王諭。自レ立ニ朕業一以來四方平服。近頃國事不祥沈レ病伏レ枕淹延日久難レ痊。本國大醫院未レ能ニ調治一。今此出ニ榜文一普招ニ天下賢士一。若有ニ精レ醫者一請登ニ寶殿一療理。朕躬稍得ニ疾痊一。願將ニ社稷一平分。決不ニ虛示一。爲レ此出給張掛須ニ至レ榜者一。

行者覽畢て滿心歡喜、我今醫生となつて慰べしと思ひ、巽の方に向ひて一口の氣を噴出しければ、乍ち一陣の旋風起り、石を走らせ砂を飛ばしける程に、群集の人々驚き騷ぎ、四方に散亂して逃去りけり。行者は隱身の法を遣ひ、彼榜文を引揭して立歸り、八戒が站し處に到りけるに、只見那獸子面を垣根に押當睡り居たり。行者密にかの榜文をたゝみ、八戒が懷裡に押入、其儘に捨置て、獨り會同館に歸りけり。斯て皇榜を守る處の大監校尉、少時眼を塞て有りけるが、風靜りて後頭を擧て見る處に、彼皇榜を失ひたり。官人ども大に驚き、偖は當下の旋風に吹去しと覺えたり。疾尋ねよと爰彼處搜し求る處に、八戒が懷中より彼榜文半ば出て有りけるを見付け、官人ども立かゝり能々伺ひ看に、

彼皇榜文に疑ひなし。頓て八戒を喚覺し、汝皇榜を揭し持からは、定めて醫術に秀たる者ならん。迚早萬歳へ奏聞せん、此方へ來るべしと引立る。八戒は官人どもを見て大いに驚き怕れ、地上に跪下倒れ、我那ぞ醫術を知らんや。且皇榜を揭したる覺なし。官人の曰く、汝懷中する處の者皇榜にあらざるや。八戒頭を低て懷中を見れば誠に一枚の紙有。押開き是を讀み乍まち牙を咬で詈り、偖は彼潑猴我を害する事斯の如し。我此榜を取りて怎麼とすべきやと扯破んと爲處を官人們架住め、是は之當今國王の出し給ふ處の皇榜なり。誰か扯破る事をなすべきや。汝既に是を懷中するからは、管ず能療治するならん、疾く來つて皇帝の病を看よ。八戒が曰く、是は我揭來る處に非ず、我師兄孫悟空と云る者取來る處なり。官人聞て儞亂話事を云ものかな。既に皇榜儞が懷裡に有上は當下皇帝の尊前に連行とも、我們が誤りならず。汝速かに來るべしと扯立行かんとすれども、八戒大路に立定つて根の生たる如く更に動かず。衆位の官人ども圍繞て、只管に連行んとして爭ひ騷動したりける。此時兩個の年老たる大監進み出て、八戒に向ひて云やう、儞が相貌此國の人に非ず聲音も又別なり。我嚮に東土より來る一個の和尙在りて、朝門に入るを見たり。儞は彼和尙の徒弟ならずや。八戒聞て實に其如し我師父朝に到りて關文を換んとす。我師兄弟は會同館に歇み居れり。彼大監衆位の官人に向ひ、儞們渠と俱に會同館に到るならば、其端的を知事あらん、爭ふことは不要なりとて住めければ、尤なりとて官人ども八戒と打連立、會同館にぞ到りける。此時行者は嚮に會同館に歸り悟淨に向ひ、皇榜を揭て八戒

が懷中へ入れ置きし事を語り、兩人手を拍て笑ひ居るところに、八戒は衆位の官人どもと打連て入來り、行者を見て大にわめきて曰く、師兄儞我を欺き街に連行、皇榜を揭し來て我に難爲をさせつるは奈何。行者笑て敢て答ず、衆位の大監校尉行者に見え、一同に拜して曰く、孫老爺我國王緣有て今日天より長老を降し給ふ。極めて醫術の手徵あらん。疾々三折肱を施して我國王の病を癒し給ひなば、天下を分ちて德を與ふべし。行者が曰く、我醫術の手徵有を以て帝王の病を治すべく思ひ、皇榜を揭て我師弟に授け置、儞們を爰まで導引しめたり。若し帝王親ら爰に來りて我を請待するならば、手の到る所管ず病を除ん。大監是を聞て校尉等を館中に殘し置、趂早歸つて朝に入りて帝王に見え、此事を仔細に奏聞す。國王是を聞て大に歡喜、三藏に向ひ聖僧幾位の高徒ありて、那れの一位か善く醫をなすや。三藏の曰く、貧僧三人の徒弟有りと雖も、俱に是山野の庸才一個も醫をなす者なし。國王聞て聖僧管ず太謙し給ふ事なかれと。又文武の衆官を召て曰く、寡人親ら彼處に到り、唐僧の高弟を請待せんとは思へども、病有るによりて輦に乘事能はず、儞等一個も殘らず會同館に到り、尊長老を請ひ來り朕が病を看すべし。儞們神僧長老に見えば、君臣の禮を以て相見え管ず怠疎にすべからず。衆臣命を受て大監と俱に打連、會同館に到り行者に見え拜をなす。行者當中に座して端然として動かず。衆臣謹で曰く、國王病に依りて親ら長老を迎ふる事能はず、臣等をして神僧を請待せしむ。萬望は朝に入つて主上の病を療治し給へ。行者聞て、既如此列位前行し給へ。我俱に隨ひ行かんと衣を整へ立出れば、百官前行して、頃刻朝中に到り國王に奏しければ、國王尊籠を捲せて行者が相貌を見るより大に駭き怕れ、戰々兢々龍床の上に倒れ給ふ。許多の女官謊得忙き、急ぎ後宮に助け入れ奉つる。國王近士の人々を召て、彼和尚疾く歸らしむべし。我斯る怕怖き者に怎麼近くべけんや。近士の人々此故を行者に告る。行者曰、若し我形容を怕れ給はゞ我糸をかけて診脈せん。近士の官人又此由を國王に奏す。國王是を聞て大に歡喜、然らば其如くして疾々我病を看よ。近士の人々行者を宮中に招きければ、行者則ち寶殿に登る。三藏行者を叱て曰く、汝潑猴我に又難爲をさせんとするや。儞我に從ひてより以來、未だ一度も醫を爲し事を見ず。況んや診脈に於てをや。行者笑つて曰、師父敢て知り給はず、我種々の藥法ありて專ら大病を痊すべし。亦絲をかけて診脈する病根知らずと云ふ事なしと云つゝ、手を延して毫毛を拔、三條の金絲と變せしめ、何れも其長二丈四尺、二十四氣を象り。是を取て三藏に見せしめ、管ず煩意し給ふなとて終に後宮にぞ進みける。

三編卷之七

心主夜間修ニ藥物一
君王筵上論ニ妖邪一

話表行者は近侍に伴れて皇宮内院に入り、寢宮に到り門外に立て三條の金絲を官員に與へ、敎て是を聖躬の左の手の寸脈、關脈、尺脈、三部の上に著させ、線の頭を格子より引出させ、行者右の手に是を掣、左の三指を以て寸、關、尺の三部の脈を試み、又敎て右の手三部に是を着させ、行者左の手を用ひて件一是を試み、終に毫毛を以て我身に返し、高聲に禀しけるは、陛下の尊惱左の寸脈强にして緊なり。關脈濇にして緩、尺脈芤にして沈み、右の寸脈浮にして滑なり。關脈遲にして結、尺脈數にして牢なり。此病驚懼こと有るか、亦は愁思ふ事有りて積るが故なり。是を名付て雙鳥失群の症といふ。國王是を聞て滿心に歡喜、思はず聲を發して曰く、儞が看處誠に明なり。早く藥を進め來れ。行者徐々として殿を下れば、三藏行者を待構て君王の病を問。行者曰く、老孫國王の病を診脈し病根を悟れり。此故に國王我に藥を求め給ふ。疾く調て是を献ん。此時一個の醫官來り行者に向ひ、長老今何樣の藥種を用ひ給ふや。要に隨ひて掣來ん。行者聞て怎生一方に限らん。藥を見れば則ち

用ゆ。何程にても把來れ。醫官が曰く、藥は都て八百八味あり。一個の病に那ぞ盡く用ふる理有らん。行者聞て古人曾て云る事あり。藥不執方合宜く用ゆと。此故に全く藥品を記し然して後加減すべし。醫官再度問答に及ばず、藥品製煉の品を會同館へ送り遣しけり。國王又三藏に勅して、聖僧は殿中に在て我と閑談し給へと止め給ふ。行者師父に別れて會同館に歸り、八戒悟淨に事の始終を說談、三個晩齋を喫終りて夜半の頃に到り、行者先一兩の大黃を取て悟淨に命じ細末せしめ、亦一兩の巴豆を取て殼膜を去槌にて油毒を去せ、八戒に命じて細末なさしむ。二個製し終れば行者一箇の花磁盞を八戒に與へ、汝此器に鍋臍灰を半盞刮げ入て來るべし。八戒頓て鍋臍灰を取來る。行者又花磁盞を八戒に與へ、汝是を以て白馬の尿を半盞取來れ。八戒呆て馬の尿を怎麽するや。行者曰く、藥を丸せんと答ければ、悟淨笑て師兄病人を弄り者にして慰むや。馬溺鮮くして脾虛の個一般這を嗅時は乍ちに嘔吐せん。矧や巴豆大黃鍋臍灰の類ひを交へ用ひば、上には吐し下には瀉すべし。斯くの如して豈病の癒る有らんや。行者曰く、我白馬尋常の馬に有らず、渠は是元東海龍神の化身なり。他が便溺を用ふる時は、奈何なる病なりとも癒ざる事なし。八戒是を聞て畢に白馬の傍に至り、器を持て待伺ひ半時ばかり過せども馬更に尿をせず。沒奈何て立歸り行者に向ひ、大哥々々今帝王の療治する事を止て、白馬の療治を先へせよ。這厮乾結して一滴の尿も下さず。行者聞て獸子亂言を止よ。然らば我行て取來んと器を取て白馬の前に到り、少時の間に尿を取來り、藥種を搔交て三粒の丸藥と

なし、器に納め其夜は個々歇みけり。斯て天明るに及んで、國王衆臣を宣給ひ、儞們急ぎ孫長老が方に到り、藥を受取來るべし。衆臣命を請て會同館に到り、行者に見え拜して藥を求む。行者彼丸子を納たる器を官員輩に與へて曰く、此丸子は是烏金丸と號く。無根水を以て用ふべし。群臣曰く無根水とは奈何なる物ぞ我們是を知らず。行者曰く、地に有處の水悉く根有。只天上より降りて未だ地に落ざる處の雨水、是無根水と名く。群臣拜謝して朝に歸り、彼丸子を獻りて行者が敎を述ければ、國王卽ち當駕官を喚で雨を求むべき法を談じ給ふ。此事會同館へも告し越し給ふ。行者是を聞て急に印を結び咒語を唱ければ、忽ち東の方より一朶の烏雲一群起り、會同館の上に到り、雲中に聲有りて東海龍王敖廣大聖の宣給ふに因て來れり。抑何等の幹事ありや。行者曰く、今朱紫國王病あり依て藥を與ふるに、些の無根水を求めんと欲す。汝聊か雨を降して渠に與へて藥を腹めよ。龍神聞て曰く、大聖の呼給ふに依て那幹も辨へず參りたれば、雨を降すべき器一品も持來らず。行者が曰く、許多の雨を求むるに非ず、只些しの藥を用ふる程有ば幹足りとせん。龍神曰く、既如斯我些しの唾を吐て渠に藥を用ひしめん。行者滿心歡喜最好々々。龍王是を聞て又烏雲を起し、皇宮の上に到りて一口の唾を吐ければ、化して甘霖水となりて降下る。宮中文武の官員後宮の官女ども是を見て、手々に器を捧げ庭上に立出て、彼雨を受入ける。一時計にして都て是を一集にして、一箇の器に納るに、許多の無根水を得たり。國王歡喜で彼烏金丸を三度用ひければ、俄に腹中鳴響き瀉下する事夥し。病根殘らず下し終り、些の米飮を食し氣を養ひしに、少頃して心胸寬泰して衞營調和し脚力强健なり。龍床を立て朝服を着し殿上に出、三藏に見え身を倒して拜をなし、趁早官員に命じて行者が輩三個を宣來せ、大に酒宴を安排て師徒四個を接待、國王を初めとして文武の百官、后宮の官女都鄙の人民に到る迄、歡喜の聲止時なし。行者重て老孫昨日陛下の脉を診するに、深く病の因を疑ふ。是を審に請承事を得んや。國王曰く、家の醜は外に露すべからずと云へり。然れども神僧は我命を救ひし人なり那ぞ覆匿んや。寡人元來深く愛する處の金聖皇后と云し美人有り。三年前端陽の節我花園の裡に海榴亭と云あり。爰に皇后と俱に角黍を飡酒を呑で樂居たりしに、忽然として一陣の風吹起り、一箇の妖怪現れ出自ら名宣て曰く、我は是麒麟山の獬豸洞に居住する賽太歲大王といふ者なり。儞が金聖皇后美人なる事を聞及び、是を得んが爲來りたり。早く我に其皇后を與へよ。儻與へざる時は先儞を飡ん。其後一國の人民都て皆飡盡すべしと詈る。我其時命惜には有らざれども、罪なき一國の人民を渠が爲に亡されん事悲く、奈何とも可爲やうなく、終に金聖を亭の外へ押出たれば、彼妖怪乍ち皇后を攝將たり。我此爲に驚怖る丶事少なからず。又彼角黍の類ひ腹中に止滯り、且皇后の事を愁ひ思ひて、日夜是を忘る丶事なし。此故に深く病を得て三年に及し處に、神僧の良藥を服して忽ち病癒、當下本身に復る事、是皆唐僧の賜なり。行者聞て今金聖皇后を此國へ返し度とは思ひ給はずや。國王涙を流して、云にや及ぶ、我此事を思ふ事切にして夜と無晝となく、憧々として戀思こと絶間

なし。然れども一個として彼妖魔に敵すべき臣家なし。行者聞て我陛下の爲に此妖怪を退治し、皇后を此國に歸らしめば奈何。國王是を聞て、倘然あらば此國を儞に讓り帝王と稱し、我は臣家と成らん。行者又曰く、妖怪皇后を拉行て後一向に音耗なきや。國王曰く、他先年五月金斐皇后を拉行て、又十月に到り、兩個の宮女を皇后の宮仕に爲と求めし故、又兩個の宮女を遣したり。去年亦三月來りて二個の宮女を要行、七月重て二個を要去。今年二月亦來りて二個の宮女を要去たりと、詞も未だ終らざる處に、南の方より一陣の風吹發りければ、國王初め文武の百官驚き慌得、妖怪又來れりと呼り叫び皆後宮へ逃匿る丶。三藏は國王と俱に身を匿す。八戒悟淨も逃んとするを行者扯住め、儞等少時爰に在て妖怪を伺ひ見よと制すれば、二個は沒奈何行者と俱に立定りて、虛空を睨んで立たる處に、乍ち黑雲の間に焦面金睛の妖怪現はれたり。行者二個に向ひ、汝等爰に在て待べし。我先妖怪に對面せんと、觔斗雲に飛乘て空中にぞ升りける。

妖魔寶放二烟沙火一
悟空計盜二紫金鈴一

却說行者は鐵棒を持て空中に立つて、大聲に喝て曰く、儞何里より來れる妖怪ぞ。彼妖怪聲を勵して曰く、我は是別人ならず。乃ち麒麟山獬豸洞賽大歲大王の部下の先鋒なり。今大王の命を受て爰に來りて、宮女兩個を把行て金斐娘々に侍御せしめんとす。抑又儞は何的なれば斯妨逆を做すや。行者

悟空雲頭
討妖怪

答て曰、我は乃ち齊天大聖孫悟空なり。我師兄三藏法師西天に往て佛を拜し經を取給ふ路上、此國を過る處に、儞等が惡行を聞て片腹疼く、此國に荷擔して退治せんと思ふ處に、態々其方より來つて我に命を送る不敏なりと呼はりければ、妖怪大いに怒り有無を言ず長き鎗を取て突てかゝるを、行者は鐵棒を揚相迎へ、空中に在つて戰ふ事二三合、彼の妖怪行者が棒を架外して、長鎗を兩截に折られ、慌忙風に乘つて西方へ逃失たり。行者且て是を追はず、雲頭より下り來り叫で曰、師父請陛下と同く來り給へ。妖怪は逃去たりと呼はりければ、唐僧は君王を扶けて同く穴を出來りて見れば、滿天晴朗にして絶て妖邪の氣なし。國王大いに歡喜、また筵宴を設け自ら壺を拿金杯を把て行者に進め、神僧の妙力誠に感謝するに堪へず。行者杯を接て未だ挨拶に及ざる處に、乍ち告來る西の朝門の外に上火起れりと。行者聞より持たる金杯を酒有儘に空中に投上ければ、噹的と音して杯は地に落ちたり。國王慌忙く問て云く、大聖何ぞ杯を投給ふや。我處爲に腹立事有てか煩心なりと曰へば、行者獨り笑つて答へず、安然として在りける處に、又一個の官員來りて報じて曰、當下西の朝門の起火、俄に一場の大雨降來て盡く消滅候ふ。然るに彼大雨街中を流るゝ水都て盡く酒臭く候ふと云。此時行者曰く、是は彼妖怪西方に逃去たるを我曾て他を赶ず、依て彼妖怪火を起たるものなり。老孫國王の賜りし一杯の酒を投て卽ち妖火を滅し救たり。西の朝門の市街までも何の別條あらんや。國王十分歡喜猶百倍の敬を加へ、三藏四個を寶殿に請上らせ、萬望唐僧に國を讓りて天子と做んと云。行者

笑て曰く、未だ半々其處に到らず、彼の賽大歳大王部下の妖怪ども不多時押寄來べし。我今這方より逆寄して空中に於て擒にし來らん。不然は許多の百姓を騷せ、陛下をも驚かし奉つらん。唯這方より推罹て金聖皇后を取回し來らん。但知ず彼山洞までは行程幾計か有るやらん。國王曰く、寡人曾て那里の里數を聽に、往來五十餘日多少三千餘里あり。行者聞て八戒沙僧に向ひ、儞等師父を護持して爰にあれ。我は那地に赴んと云ば、國王扯住て神僧且寛々支度し給へ。些計の安排をも侑め、乾糧盤纒も進すべし。又快馬一疋を進せん是に跨て旅立給へ。行者笑つて曰く、陛下の命事甚巴山轉嶺歩行、三千里計の行程は燗酒を斟で不冷間に往回すべし。國王聞て大に呆れ、神僧は尊貌猴の如くなれども、怎生這般の法力あるや。行者曰く、

我身雖二是猿猴一數一　自レ幼打二開生死路一
徧訪二明師一把レ道傳　山前修煉無二朝暮一
倘レ天爲レ鼎地爲レ爐　兩般藥物圍二烏兎一
採二取陰陽水火交一　時間頓二把玄關悟一
全仗二天罡搬運功一　也憑二斗柄遷移歩一
退レ爐進レ火最依レ時　抽レ鉛添レ汞相交顧
攢二簇五行一造化生　合二和四象一分二時度一
二氣歸二於黄道間一　三家會在二金丹路一
悟二通法律一歸二四肢一　本來勦斗如二神助一
往二來霄漢一沒遮欄　一打十萬八千路

國王此詩を見て且驚き且歎び、許多うち吟じ一杯の酒を着て行者に與へ、神僧遠國へ旅立給ふ骨折を謝せん。行者一心唯妖怪を降伏せんと思ふのみにて、速かに一杯を吃し、空中に向て吻唇と一聲寂然として形は見えず、一國の君臣上下唯奇異の思ひを做ぬ。斯て行者は勦斗雲に打跨て、快くも一座の高山に到り、卽はち下て巔峰に在つて仔細を得と觀ひ、正に洞口を尋ねんと欲する處に、只見る此山の凹なる處より、烘々と火の光飛出たり。霎時に天を撲紅焰あり。又紅焰の中に一條の惡烟を冐ひ出す。此火甚だ毒火と見ゆるにぞ、大聖自ら恐懼せり。又此山中に一道の沙を迸り出して、眞に天を遮り日を蔽ふ。行者見れども一向に其故を解ず。頓て身を變じて一個の攢火的鷂子と成つて烟火の中に飛入り、驀却驀駈回り烟火沙灰を吹散し、漸々烟火開けて本像を現はし下りて見れば、只叮叮噹噹と銅鑼の聲を聽、此處は是妖怪の巣穴に非ず。銅鑼の聲は是兵を布の銅鑼、想ふに是通國大路に兵を出すこと有るならんと、猶急ぎ行きける處に、忽ち一個の小妖兒黄なる旗を立、背上に書簡を帶て銅鑼を敲ながら、走る事飛ぶが如くなり。行者又身を變じて一個の道童となり、頭は双抓髻に結身には白衲衣を着し、手に木魚を叩き口に道情詞を唱、山坡を轉て彼小妖的に行迎、稽首でいふ長官那里へ

か行給ふや。又持給ふは怎麽の公文なるや。小妖的銅鑼を打止笑て禮を返ていふ。我背上に負しは朱紫國へ送る戰書なり。行者曰く、何故に戰書を送りて鬪んとし給ふや。小妖的が曰く、我大王三年以前朱紫國に到つて金聖皇后を奪ひ來り、閨の樂に爲んと思ひしに、一個の神仙來りて一件の五彩の仙衣を皇后に與ふ。是を着給ふに總身都で針刺を生じ、我大王敢て摸ても見る事能はず。但些少も手を着れば手心疼て堪べからず。此故に三年の今日まで未だ身を汚さず。大王沒奈何又朱紫國より外の宮女二個を要來り竟に弄み殺し、其後又二個の宮女を弄み殺し、今年又要に遣しを、今般は孫行者が爲に打破れて宮女を要來らず。此故に我大王大いに怒つて、彼國を責亡さん爲に、我をして戰書を屆しめんとなり。朱紫國王若戰はずして、美人を送りて和睦せば造化なり。戰はゞ管ず利非じ。我大王烟火飛沙を以て責給はゞ、彼國王臣家を首め百姓等に到るまで、一個も活る者有べからず。其時は我大王は朱紫國の天子と爲、我們は臣下と做べし。然れば明日は合戰なり。快く戰書を屆くべしと云捨て走り行く。聞終て行者鐵棒を拿出し、小妖的が後身より唯一打に討殺し、足を把て澗へ扯下さんとする時、只聽噬的と一聲響て金を摺たる牙牌落たり。牌上に文字あり曰く、心腹小校一名有來有去五短身材屹搥臉無鬚長川懸掛無牌卽假、行者是を見て打笑ひ、此小妖的名を有來有去とよぶ。然るに今一棍に打殺されて、去有て來なしと云て牙牌を取つて腰に付け、銅鑼と旗とは草裡に藏し置、戰書を取つて袖に納、忽ち又烟火の毒を思ひ出し敢て洞門を尋ねず。有來有去が骸を鐵棒に拴り着、其儘空中に飛昇り

徑に本國に歸り、且一箇の頭切の手柄を當報べしと、吻哨と發聲して朱紫國に歸り、金鑾殿に到り彼一封の戰書を三藏の袖の裡に推入收置て、師父且國王に見せ給ふなと云終らざるに、國王殿を下りて行者を迎とり、神僧快く歸り給ひたり。偖妖怪の動搖は奈何。行者地上に指て那階下に妖精を打殺して置たりと云へば、國王是を見て是は這賽太歲に非ず。賽太歲は寡人親く認得たり。身尺凡一丈八尺計り、面金光有りて聲霹靂の如し。行者曰く、是は這一個の報事の小妖的なり。且血祭に打殺し來りて、手始の功を告げ奉つる。國王大に歡喜で、好々神僧一度出て速に功を奏し返り來る、實に神通力なり。先々酒を燗めて其功を賀禀ん。行者曰く、酒宴などは且置て、我第一に陛下に問ひ奉らん。金聖皇后と別れ給ふ時、甚麽なる表記をか取交給ひしぞ。國王表記の二字を聞よりも、心剜るゝ思ひにて堪兼て涙下り、只管泣て謂て曰く、

當年佳節慶二朱明一　太歲凶妖忽震レ聲
强奪二御妻一殊倉卒　誰留二表記一繫二離情一

是を聞て行者曰く、娘々既に表記なし、然あらば彼の君宮中に在りし時、甚麽身に換て愛し給ひし物有るべし。國王曰く、是を問ひて怎麽か爲や。行者曰く、彼妖王實に神通有りて當難し、假令能是を爲果たりとも娘々我面を認得ざれば、朱紫國の使と云とも敢て信じ給ふべからず。是に依て彼娘娘平日に心に愛し給ひし物一個を見ば、是なりとして信じ給ふべし。其爲に齎行たし。國王の曰く、

昭陽宮の裡梳粧閣上に、一雙の黃金寶串あり。是金聖常に帶る處の物なり。彼奪れたる日は端午の節會なれば、續命五色の絲を臂に懸るに依りて脫で有りたるなり。是のみ他が常に愛せし的なり。行者曰く、然らば其金串を老孫に給はり候へ。國王遂に玉聖宮に人を遣して是を取り出させ、見るより國王忽ち涙下り、最愛や娘々と幾聲泣て遂に行者に遞與給ふ。行者是を臂に懸て功賞の酒も呑ず、觔斗雲に打跨て吻哨と一聲又去て、麒麟山へぞ走到る。頓て洞府を尋るに、只人語の喧すしきを聞。竚立て睛を凝し觀看ば、原來獬豸洞門の口にて大小の頭目あり。約摸五百名餘り爰に座て保守居たり。行者是を見て頭回し、舊路に到り嚮に小妖的を打殺したる處に到り、黃なる旗と銅鑼を搜し出し卽ち身を變じて有來有去が像と做、徑に進み行き獬豸洞に到れば、猩々出ていふ、有來去儞回り來らば快く行け、大王は剝皮亭上に在て儞を等給ふ。行者又銅鑼を鳴して二の門を入り、忽ち頭を擡て一座を見れば、八の窓明かにして、亭子の中間に一張の戲金の交椅あり。椅子の上に端座する魔王あり。生得惡像なり。行者見ながら傲慢にして些の禮をも做ず、外看して只管銅鑼を敲き居る。妖王問て曰く、儞來れと云ども行者答ず。又問て有來去儞來れと云ども尙答ず。妖王堪兼て上前出扯住めて曰く、儞怎麼答ざるや。行者曰く、元來我不去と思ひしを、大王却て那里に我を遣したり。行きて見るに限なき人馬陣勢を張て我を見より推つ扯つ、遂に捉て城の內に擔込れ、彼國王我を見て則ち斬んと云しを、幸ひに兩班の謀士ありて曰、兩家相爭ふ時來使を斬ずと。遂に我を饒し戰書を收て城門の外に押出し、

三十杖鞭打れ、今放たれて還り候ふ。斯動靜にては遠からず那里より逆寄に來り戰ふべし。妖王曰く、然らば彼國多少の人馬ありや。行者曰く、我甚だ謊き昏て多少の人馬有りしか深く覺ず。唯彼國は兵器森々と羅列すること麻の生たるが如し。妖王笑て曰く、假令那程の兵器有りとも。我寶貝紫金鈴を打搖て烟沙火を飛ばし、彼國を塵に爲すべきなり。儞は今より後宮に往て、金聖娘々に報んに、言べき事あり。彼既に我彼國を責んと云を聞て、泣悲みて在るなり。儞往きて今見て來し通り、彼國人馬驍勇にして管ず此國に勝んといへ。且々一時他が心を寬むべし。行者聞て爲濟たりと思ひ、此事十分中意として則ち脚門を過、廳堂を越見れば、此邊總て大厦高堂、此前邊の模樣とは大に替れり。直に後邊の宮裡に到れば、宮門の壯麗なる是則ち金聖皇后の住處なり。裡に入て見れば、兩班の妖狐妖鹿個々都て美女の形に變じ、粧ひて左右に侍立せり。中間には金聖娘々手づから香腮を托げ、双眸滴涙果然たり。玉容寂寞 寞胭脂冷。雲鬢蓬鬆翠黛空。自レ古紅顏多薄命。慨々無レ語對二東風一。行者上前て言禀んと云ば、金聖娘々の曰く、這潑怪的十分無禮なり。思ふに我今まで這樣なる怪的を見ず。是怎麼なる野獸なるや。衆婢上前出ていふ、娘々怒りを止給へ。他は是大王爺々腹心の部下、名は有來去と喚的なり。今般朱紫國へ戰書を送り給ふ使に行きしなり。金聖些し怒りを忍び問うていふ、儞戰書を下して曾て朱紫國へ到りしや。行者曰く、老孫戰書を持て徑に金鑾殿に到り、面頭國君に見え候ふ。金聖曰く、儞國君に見えて君王何と曰ひしぞ。行者曰く、彼戰鬪の事は既に大王に報上たり。婦人に

聞え上るに及ず。唯那君王娘々的の事のみ思想、言傳の一言稟上たし。然し左右の人の聞くを奈何。金聖是を聞て兩班の妖狐妖鹿を退け、行者を近着給へば、行者前倚て本像を現はし、金聖に向て曰く、娘々我を怕れ給ふな。我は是東土大唐より、西天に往て佛に見え經を求むる和尚にて、孫悟空と呼做り。我師父儞の國中を過るに依て、關文を換んとせし處に、儞の妖王に攝來れ給ひし事を聞き、國君の央に依て一般尊躬を救ひて、國に歸し進せんとす。依て彼使者有來去と變じて爰に至り候ふといふ。金聖尙沈吟して疑しき面色なれば、行者那寳串を取出し進せければ、金聖見るより涙を發々と流し、座を下りて拜し、長老果して我を救ひ國に歸らしめ給はゞ、大恩死すとも忘るべからず。行者曰く、些しも放心有るべからず。但し此國に有處の火を放ち烟を出し沙を降す的、是怎麼の寳貝ぞ。金聖曰く、那は是三個の金鈴なり。彼一箇を持打搖ば、三百丈の火光發つて人を燒。第二を搖ば三百丈の烟光發て人を熏らす。第三を搖ば三百丈の黃沙人を迷す。烟と火は還て不打緊と雖も、唯彼黃沙最人に毒なり。倘鼻の孔に入る時は乍ち命を失ふなり。行者曰く、利害利害我曾て斯る鈴ある事を知らず。其金鈴今何處に有りや。金聖曰く、如然寳貝なれば大王常に腰に帶して行住座臥身を放たず。行者曰く、儞倘故郷へ還たく思ひ給はゞ、忍て大王の心に從ひ、欺して彼金鈴を預り給へ。我是を取匿して後儞を國に歸すべし。金聖聞て是理なり。我能彼を欺て預かるべしと歡喜て這詞に從ひ給ふ。行者は原の有來去と變じ、左右の侍婢を呼出せば、金聖態と有來去早く大王を請じ來れ、發と應て行者則ち剝皮亭に到り、妖王に向ひて曰く、大王今日は娘々萬望尊臨を願ひ給ふなり。妖王大いに懽喜で曰く、娘々常に我を罵り喚く、怎麼なれば今日斯熟懇に我を招くや。行者曰く、彼朱紫國の事を問給ふ故、我態と僞つて彼國王最早別に皇后を冊きて、寵愛盛んなりと說話候へば、娘々今は慕ふ心も沒果て、直に我に命じて大王を請じ奉つるなり。妖王是を聞て歡喜、儞は實に大功的なり。我彼國を得ば儞を以て太宰と爲すべし。行者此言に從ひて恩を謝し、夫より妖王と俱に後宮に到れば、金聖有懽顏色にて出迎へ、手を把て相攙給へば、妖王曰く、亦娘々の身に障ば、我身の疼ん事を怕るゝなりと云ば、金聖曰く怎麼這樣の事は曰ふや。且座に請給へ、我君に說話あり。大王我を愛し給ふ事久しと雖ども、未だ枕を俱にせざる其仔細は、我朱紫國に在りし時は、外國よりの貢物其外何に依らず、大王先看終て我にも看せ、我預りて收め置く事なり。此國にも三箇の紫金鈴とか云る寳物ありと聞ぬ。大王我には爲覺もし給はねば看もし給はず、況や尙預けはし給はじ。僧老の契を做我に匿給ふは、然りとては薄情し。此故に我尊意に從はず。男といふ者は疑ひ深き者なりと、恨泣て曰ひければ、妖王忽ち軟湊と成、態と大いに笑ひて曰く、娘々管ず恨る事なかれ、我寳貝は腰に着て則ち這に有、今日當に儞に收預べしと、則ち衣を揭て鈴を把出すを、行者は後邊に在て睛も轉ず看看居たり。妖王兩三層の衣服を揭起て、三箇の金鈴を取て些の木綿を以て口を塞ぎ、一個の豹の皮の包袱兒に包み、金聖に遞與て曰く、能々心を用て藏め置給へ、必ず是を搖し給ふな。金聖是を受取て、我良納處ありと

て、化粧殿の上に藏し置き、小的を呼て酒肴を安排し來らしめ、金聖は增々妖嬈なる態をなし、妖王に着精靈。行者其間に粧臺に近き彼三箇の金鈴を拿て輕々と持出し、宮門を出て剝皮亭の前なる人無處に到り、豹の皮の袱包を開き見れば、茶鍾の大きさなる金鈴三箇あり。木綿の裁布を以て其口を塞ぎたり。行者利害も知らず彼木綿の塞を三箇一齊に扯了ければ、乍ち一聲の響有て、烟沙火の三箇の的一齊に迸る。悟空急に是を收る事を知らず、亭中烘々として火起り、紅光天地に耀けば、小妖的周章大王に告來る。妖王驚き飛で來り能々見れば有來去金鈴を盜來て爰に在り。妖王大いに怒り己賤奴大膽我寶貝を盜みたり。小的ども快く拿よと呼りければ、小妖的の者共是を聞き一齊に打てかゝる。行者は金鈴を投捨て本像を現はし、金箍如意棒を掣て打て廻る。妖王は寶貝を取り收めて門々を嚴く關固遁じと取卷ければ、行者は遁れ出るに道なし。鐵棒を收め身を變じて蒼蠅兒となり、火の無處の壁上に住り、其動靜を伺ひけり。小妖的行者を見失ひ、隈々を尋ね搜せども不知。妖王是を聞いて斯門々を緊く鎖たるに、那處より逃失けるや。抑渠は那的なれば、大膽にも有來去と變じて我に朱紫國の返答を告、機に乘じて寶貝を奪たるや。既に這山の上に在りて、烟火を放ち風に吹るゝ事ならば我迚も當べからず。先鋒白文豹が曰く、必定是は孫悟空なるべく、想に必ず路上にて有來去に遇着彼を殺し銅鑼と旗とを奪ひ取り、然して有來去に變じ來り大王を欺しものならん。妖王是を聞て點頭正是正是爾が云處有理なりと、小妖們に分付て仔細と尋搜させ門々緊く保守せけり。

三編卷之八

行者假レ名降二怪孤一
觀音現レ像伏二妖王一

斯て行者は壁の上に住り居て、是等の事を聞き濟し、又輕々と飛で後宮に到り、金聖皇后の髪の上に止り、動靜を伺ひ居りける。此時金聖は行者が仕損じて生死も知ず成し事を聞て大に驚き、案の上に打伏て朱紫國の方を拜し淚を流し、君王自妾を救ん爲、神僧に命じ遣し給ふ。然れども神僧事を誤ちて生死も知ず、更に又妖怪に悟れなば、此事を恨として此上の艱難計りがたし。怎生ぞ本國に歸りて、鸞鳳鴛鴦の契を全うする事を得んやと、聲を發ちて歎き給ふ。行者是を聞て皇后歎き給ふ事なかれ、我未だ死せず。唯我性急なる生れにて、寶貝を奪てより心の裡に忍びがたく、是を開き見しに計らずも烟沙火起り、終に事を仕損じたり。皇后今一度渠を欺き連來り、酒を侑めて睡しめよ。我又別に謀計を廻し、寶貝を奪ひ取ん。金聖驚き怕れ、神僧爾那處に在りて斯の如く說話するや。行者笑て我爾の髪の上に、蒼蠅兒となりて住りたり。皇后早く身近き丁髻を一人呼出し給へ。其姿に變じて妖怪を欺くべし。皇后あやしみ疑ふと雖ども、渠が言に任せ一人の侍婢を呼出す、其名を春嬌といふ。

是れ玉面狐の妖精なり。召に應じて皇后の前に出て跪下、娘々今何幹有て召給ふや。金聖が曰く、我今大王を請じて安寐進せんと思ふなり。春嬌心得七八人の小妖的を呼出す。那も兎鹿の妖精なり。手に灯火を秉て出來る。行者皇后に敎へて立上らせ、一根の毫毛を拔て睡虫と變じさせ、春嬌が面に放ちければ、此妖怪忽ち睡くなり、一邊に倒れて臥しけるにぞ、行者は其骸を物陰に押込おき、自己春嬌が姿に變じ、許多の小妖的を引列大王の前に至り、金聖娘々大王を迎へ奉らんとて、爰まで來り給へりといふ。妖王聞て出向ひければ、皇后の曰く、當今は烟火も消て偸人も逃しと聞故、大王を迎て安寐進らせんと御迎に參しなり。妖王滿心歡喜て、皇后珍重なり。彼盜人は孫悟空なり。我部下有來去を殺し、夫に變化し來りて寶貝を奪取んと爲を、我幸ひに早く見咎め寶貝は取返したり。然れども這厮いかに尋れども跡方も見ず。此故に未だ安心する事能はず。皇后聞て悟空は神通ありとか聞けば、疾逃失しものならん。大王放心思ふ事を止て、後宮に入て安寐給へ。妖王皇后の懇に迎るを見て固く辭するに及ばず、小妖的に分付て儞等堅く要心せよと、終に皇后と打連て後宮に來ければ、皇后筵宴を設て大王に進る。行者は假に春嬌と成て酔を把て大王に酒を强て酔しむ。皇后また專ら說的是夫妻話をなし、只管酒を勸れば、妖王骨軟筋麻て只管皇后の身を任せざる事のみ悔恨いふ。皇后大王に向ひ嚮程の寶貝は曾て損じ失ざるや。今は那處に置給ひしぞ。大王聞て彼寶貝は天地開闢以前より鑄なしたる處の物なれば、奈何ぞ損ずる事有ん。我今腰に帶おきたり。行者一邊に在て聞も敢ず、

手を延して一掴の毫毛をぬき、變じて數千の虱となし、大王の身に放ちければ、衣帶の透間より潛り入り、浪亂に總身を咬ひけり。妖王痒事堪がたく、手を懷に入て痒き處を探り、手に任せて捻り出し燈火の下にて是を見れば、則ち數十の虱なり。皇后笑て大王の襯衣思ふに久しく漿洗し給はず、此虱を生せしならん。妖王大いに慙愧て、我從來此虫生じたる事なし。計ずも今宵醜を出したり。皇后笑て曰く、大王何ぞ是を愧とし給ふや。常言に曰、皇帝身上三個御虱有と、左右且脫給へ。自ら是を捉捨べし。妖王終に帶を解き、衣服を脫に悉く虱なれば、覺ず襯衣も脫捨て赤裸になりける時、腰に帶し金鈴の袱包にも虱多く着住居たり。春嬌一邊に在て是を見て、大王金鈴の上に虱多きこと計りがたし、我是を取捨進せんといふ。妖王怎生贋春嬌なる事を知らん。急ぎ金鈴を解て春嬌に遞與。行者是を受取て態と靜に虱を尋ぬ。妖王は皇后と俱に頭を低て衣帶の虱をとり捉捨居たり。行者よき間ぞと又三根の毫毛を拔取、變じて三個の金鈴となし、豹の皮の袱包まで些少も違はず變じさせ、眞の金鈴は我袖裡に匿し置き、虱に變じし毫毛を取て身に返せば、數千の虱忽ち失て殘ず拾ひ捨たる如し。大王衣帶を着しければ、春嬌贋的の金鈴を大王に捧ぐ。妖怪是を把て又腰に帶、我皇后と俱に寐ん事を思へども、那刺針にさゝるゝ事を怕る。我西宮に歸りて心安く睡るべしと、皇后に別れて西宮に赴きけり。彼春嬌が面に放ちたる瞌睡蟲を身に返し、皇后に寶貝を奪ひし事を語り、頓て本國に歸し奉んと云置て隱身の法を使ひ、解鎖の法を以て門々を開きて走り出、門外に立て高聲に呼つて曰く、賽太歲早く

金聖皇后を返せと叫ぶ。小妖的是を聞て驚き看ば、門々殘ず開きたり。慌得て門を堅く關し宮中に入て斯と報ず。宮女是を通すれども、妖王酒に醉て目覺ず。左右する間に天曉に到る。行者門外に在て只管罵り、終に鐵棒を掣て洞門を打破り入んとす。妖王此物音に睡を覺し門外に跳り出、行者を見て大に怒り、儞那厮なれば爰に來り我門を破りたるぞ。行者罵て曰く、儞潑妖怪眼大いなりと雖も我を認得ず。我は是齊天大聖孫悟空なり。金聖皇后を把返さん爲、爰に來つて儞を亡滅なり。妖王同じく罵て曰く、儞は唐僧に從ひて、西天に行き經を求ると聞つるに、怎生今朱紫國の奴となり、爰に來りて死を求るや。行者大いに怒り、說話不知の潑妖的、今朱紫國の王家我をして父母神明の如く尊む、何ぞ厮になるべきやと、鐵棒を把て打て懸る。妖王宣花斧を持て度り合、五十餘合戰ひしが、妖王不當とや思ひけん、忽ち風頭の方に飛退、呼つて曰く、孫悟空少時待て我今儞と戰はずして、金鈴を搖て見すべし。儞逃る事を止て見物せよ。行者曰く、我も又金鈴を搖て見すべし。儞逃る事を止て見物せよ。妖王曰く、儞が方にも金鈴有りや。抑那國より傳へ受けしぞ其謂れを聞ん。行者曰く、且儞が金鈴の謂れを聞ん。妖王曰く、我此金鈴は大清宮八卦爐中にして、太上老君の久く煉結、乾金を以て作り給ふ處の金鈴、最も無上の至寶なるを、故あつて我に授け給ひしなり。行者曰く、我此金鈴も儞が云處と同じ。然ども儞が金鈴は雌なり我金鈴は雄なり。妖怪曰く、是は仙家金丹の寶貝何ぞ雌雄の有べきぞ、儞且先へ搖べし。妖王嘲笑て頓て金鈴を取出し、先第一の鈴を打搖けるに更に火出る事なし。妖王驚き又第二の鈴を打搖に烟り發らず、增々慌得て第三の鈴を振搖せども、又更に黃沙起る事なし。妖王驚き怪み偖は我此金鈴寔に雌にして、雄に逢て怕れて烟火を發せざるや。怎麽せんとぞ獨言けるを、行者喝々と打笑ひ、然らば我金鈴を振て見すべしと、三個の金鈴を拿出し、三箇一齊に打振ければ、烟沙火一同に迸る。此時行者咒語を唱へて、巽の方に向ひて一口の氣を吐ば、忽然に旋風吹起り、火勢盛んに烟り渦卷黃沙滿天に飛散て、面を向べきやう非ず。妖王怕れ駭き逃んとするに道なく、狼狽騷いで苦み廻り、既に命も危き處に、只聽空中に聲有て孫悟空我來れりと呼る者あり。行者頭を回して是を見れば、是則ち南海補陀峯敎主觀世音菩薩なり。左りの御手に淨瓶を托着、右の御手に楊柳を拿、甘露に漬して火の上に洒下給へば、烟火跡なく消失て黃沙も乍ち納りぬ。行者は金鈴を取納め空中に飛升り、合掌して菩薩を拜し、當下那里へ往せ給ふや。菩薩曰く、我態々爰に來て妖怪を降伏す。他は是我跨的の金毛犼なり。他を守れる處の牧童睡睡し間に、此畜生繩を咬斷、朱紫國に到り國王の災を拂んとす。行者曰く、彼妖精朱紫國王を惱し、皇后を狂惑し害を爲す事少からず、何ぞ災を拂ふと曰ふや。菩薩又曰ふ、儞仔細事を知ず、朱紫國王當時太子たりし時、獵を好よく弓射事をなす。西天從來佛母孔雀大明王菩薩あり。生る處の雌雄兩個の孔雀あり。渠等山坡下に遊び居けるを、太子一矢放つて雄を射て疵付たり。雌の孔雀其矢を取て返り、佛母孔雀明王へ訴へたり。佛母則ち是を聞て、朱紫國の太子三年折鳳の災ひ與へ、此罪を報はしめよ

と命ありしを、時節我彼狐に乘て一邊に居合せ此詞を聞居たり。此業畜又是を心に覺居て、彼國の災を拂はんとして、終に妖怪と成て皇后を奪ひとり、三年洞の裡に隱れ住み、今年の當今數滿て儞國王の災を除き、我來て妖邪を收め歸るなり。行者聞終りて這樣の故事ならば、他が命を助け候はん。菩薩魔王を一喝し給ひ、汝業畜なほ俱に還らず、何の時を待んとするや。妖怪地の上に倒轉びて本相を現しければ、菩薩其背上に打騎給ひ、畜生三箇の金鈴は奈何せしぞ。行者聞て老孫是を奪ひ置候ひぬと、菩薩に金鈴を返し奉る。菩薩取て狐の項に繫ぎ掛け南海に回り給ふ。斯て行者は鐵棒を輪して、獬豸洞に打て入り、小妖的を塵になし、宮中に至て、金聖娘々に見え、首尾を委く語り、今より本國へ歸し進せんと云けるにぞ、皇后大いに歡喜拜謝する事盡きず。行者頓て草を束て龍の形を作り、之に皇后を跨上しめ娘々怕るゝ事なかれ。堅く眼を塞ぎて管す開給ふべからず。我暫時に本國へ送り進らすべしと、神通を以て彼草龍空中を走しむる。皇后は眼を塞ぎて唯耳に風の音を聞くのみにて、未だ半時ならざるに、忽ち朱紫國の宮中に立歸り、行者雲を排きて殿上に下り、皇后眼を開き給へと呼りける。此聲を聞て金聖兩眼を開き見給へば、思ひきや我本國の宮中なりければ、懽喜給ふ事限りなし。國王見より龍床を下り走りより、絶て久く逢ざりし思想の情を述んとて、皇后の玉手を拿抱き倚んとし給ひしが、猛然として地上に倒れふし、皇后の身に刺針生たり。我手疼みて堪がたし早く救へと叫び給ふ。行者走り依て助け起し謂て曰く、皇后妖怪に捉られ給ひし上首、一人の道士來り五色の仙衣を贈り皇后に着しむ。然るに其仙衣より刺針生て、人の近づく事能はず。此故に三年の間終に身を沾し給はずといへば、國王是を聞て且懽喜且愁ひて、此刺針を怎麼せんと歎き給ふ。此時空中に聲有て、大聖有や我來れり刺針の衣愁ることなかれ。行者頭を回して是を見るに、是眞人張紫陽なり。雲を下りて宮中に到り、行者に向ひ禮を施し、小仙三年前佛會に赴き、此國を過るに國王三年折鳳の災ある事をきく、時に妖怪皇后を攝去をみる。怕くは妖怪の爲に沾され給はん事を傷み想ひて、一件の古き棕衣を將て、變じて五色の霞裳となし、皇后に與へて着しめたり。彼刺針は棕毛にして三年の間皇后の身を守りたる物なり。當今大聖功を立て皇后を救ひて、本國に歸る事を得たり。此故に我來りて那棕衣を脫しめんとす。皇后眞仙を見て大恩を謝し禮拜す。眞人立倚て棕衣を脫しめ、自ら着し人々に向ひ辭し別れ、空中に升て歸り給ふ。國王及び皇后も天に向ひて禮拜し、夫より大いに酒宴を設け三藏師徒を接待けり。行者三藏に告て嚮に預け置し戰書を出し、國王に見しめ、其外獬豸洞にて有し事ども彼是落もなく說話ければ、國王はじめ衆位の官員輩感謝して禮拜する事絕間なし。國王は只管に此國を讓ん事を曰ひけれども、三藏行者固く辭して唯西方に赴かん事を急ぐ。國王今は沒奈何關文に印を寫し三藏に遞與ければ、師徒四人國王に辭語を告げ、城門を立出ければ、國王を首衆位の官員輩遠く送りて別れけり。

盤絲洞七情迷レ本

濯垢泉八戒忘レ形

斯て師徒四個は朱紫國を離れてより、又多少の山水を經歷し、覺ず秋去冬盡て又春光の明に値ふ。或時一座の邨莊に望む。三藏馬を下り我今此人家に往て、些の齋を要め來らん。行者笑て曰ふ、師父齋を要め給はゞ我們代りて行べし。那ぞ自親師父の行き給ふ事あらん。三藏曰く、平日に儞們那邊の遠き處にても、勞を厭すして齋を乞ひ來る。今日人家既に近く又天氣清明なり。我自ら去て乞ひ來んと、遂に鉢を取て步み行き、直に莊前に至り給へば、前に一座の石橋あり。寂々寥々として雞犬聲もなく、一個の茅屋の奥に四個の美女窓の下に在て、鸞を描き鳳を繡す。又庭上に三個の女子毬を蹋て遊び居たり。三藏便ち橋上に立て、貧僧は東土大唐より西天に至り、經を要るの僧なり。今檀府に來りて齋を乞ひ奉る。萬望は些しの齋を惠給へ。彼女子等是を聞大いに懽喜、一齊に門を出來り、長老疾此方へ上前給へと、三藏の手を扯腰を推て、茅屋の一邊なる一個の石洞の裡に押入けるにぞ、三藏驚き偖は他們我を害せんと爲ならんと、身を轉して逃出んとし給ふ。彼女子們都て武藝あり。三藏を扯倒し繩を以て洞中に串上、個々衣服を脫肘を露しけるが、忽ち臍の孔中より鸞の粗細なる白き糸を扯出し玉を飛し銀を散すがごとく、須臾の間に莊門を一遍に罩ひけり。三個の徒弟は路の一邊に歇みて在けるが、莊門忽ち雪に埋みたる如く、一片の白光と變じたるを見て三個大きに驚き、是管ず師父の妖怪に逢給ひしならん。早く行て救ふべしと駈出んと爲けるを、行者兩個を住め儞們騷ぐ事なかれ。

我去て見て來らんと、直に村莊に走り行き、彼白光を見るに、白糸を經緯に引はへ千萬層の厚さあり。手を以て是を押ば却て和かにして粘あり。行者甚麽の物なるを知ず。頓て咒語を唱て此地の土地神を呼出し、此處は何と號る地方にて、此白糸は怎麽なる物ぞと尋れば、土地神答て曰く、此前邊なる山を盤糸嶺と號け、嶺下に一箇の盤糸洞あり。洞中に七個の女怪居住せり。他等倶に蜘蛛の精にて、白糸は則ち蛛の糸なり。又此南三里に一座の濯垢泉あり。此泉天生の熱水にて他等毎日三遭づつ、那里に行て洗澡するなり。今日も頓て出來ん少時待て見屆給へ。行者是を聞て先土地神を放ち返し、一個の蒼蠅兒と變じ、草頭に住りて待ける處に、不多時白糸盡く消失て原の村莊を露し、莊門の裡より七個の女子步み出たり。行者則ち翅を延て前なる女の頭に住り、他等に從ひ行ける處に、果然南三里計り行て一座の墻門あり。十分壯麗なり。一個の女子扉門を推排けば、中に一塘の熱泉あり。五丈に一丈餘りの廣さにて、深さは纔三四尺に過ず。水は珠よりも清らかなり。池の汀には兩箇の漆塗の衣架を構へたり。行者又翅を延て衣架の上に住りて伺ひけるに、彼女子等皆一齊に衣帶を脫、我們早く洗澡し家に歸りて彼和尙を蒸て吃んと、個々雪の如き肌を露し浴地に入て笑ひさわぎ、水を躍せ波を翻へして戲れけり。行者是を見て思やう、今他等を打殺さんは何より安し。然ども常言に男不與女鬪と云ば却て我名を失ふべし。且一箇の謀計を以て他等を動さゞるやうにすべしと、忽ち一翅の老鷹と變じ衣架の上に掛たる七個の衣帶を盡く抓み取り、嶺上に飛去て原の路傍に立歸り、本相を現し八戒

沙僧に此事を說話ければ、八戒是を聞て師兄妖怪と知らば、何ぞ是を打殺さゝる。是草を斬て根を除くの謂なり。我今行て打殺し來んとて釘鈀を取て出行けり。沙僧行者に謂て曰く、今師兄の曰ふ如くならば、師父は極めて彼邨莊の裡に居給ふべし。我行て伴ひ歸んとて、頓て彼石橋の邊に走り行き、茅屋の裡に入て見れば、妖怪一個も在ず。一邊の石洞の裡を覗き見れば、爰に三藏は細縛られて御座たり。悟淨走り入て縛めを解下して、急ぎ行者が待居る路傍へ歸りければ、行者懽喜三藏に向ひ此後齋を求給はゝ、我們に任せ置給へと云ば、三藏打點頭我假令餓死するとも、此後自ら齋を要べからずとて悔けり。却說七個の女子は、衣服を鷹に取れて出る事能ず、水中に蹲り個々鷹を罵り居たり。此時八戒門を排いて入來り、是を見て打笑ひ、女菩薩我をも同く洗澡させて給るべしと、直裰を脫捨て撥的水中に飛入ければ、女怪等は大いに怒り、此和尙十分無禮なり。出家人の身として女人と同く洗澡せんとするやと、一齊に取圍んで打んと爲を、八戒原水練の達者なれば、水中に在て忽ち變じて一個の鮎魚と做り、女子等が肌を探りて狂ひ廻れば、女怪等大いに困り果、西へ追ども捉當ず東へ搜れども手を滑し、那方此邊と亂轉し、女怪們都て心倦精勞れて詮方を知ず。八戒又水中より跳り出で本相を現し直裰を着し、釘鈀を揚て罵て曰く、儞們我を鮎魚と思ふや。我は是東土大唐より西天に至り經を要る長老の徒弟、猪八戒とは我事なり。儞們我師父を捉へ蒸吃んとす。大膽なる女怪ども性命を免し難し、我釘鈀を受よとて、走り倚て突んとすれば、女怪等大いに狼狽水中に跪下、八戒を拜し我們眼有て珠なく、儞の師父を捉て家に置きたり。今より師父の性命を助て、些の盤費を送りて西天へ去しめ進せん。萬望我們が命を助給へ。八戒曰く、糖を嘗らして君子を欺く常言あり。我那ぞ其甜口を信ずべけんや。早く頭をのべて我釘鈀を吃とて、只管上前で突かゝる。女怪等慌得て耻を覆ふに暇あらず、臍下に手を押着て跳出、個々臍より彼糸を繰出し、四方八面より絲をかけ、忽ち八戒を當中に罩ひ住めたり。八戒は浮雲の中に圍れたる如く、脚を擧れば躓き倒れ、飛出んとすれば頭支へ、右に轉び左に倒れ眼昏みて唯地に臥て呻吟居たり。女怪們は八戒を罩ひ住め、個々赤裸にて村莊に歸り舊衣を出して身に纏ひ、石洞の裡を見れば唐僧在ず。偖は這厮逃失たり。我們誤て唐僧を捉へ、却て此耻を蒙りたり。先師兄の許に行て商量なさんと、七個の女怪一齊に西を指てぞ出行ける。少時ありて八戒頭を擡げ見れば、纏たる絲些しく破れたり。漸〳〵是より這出て三個の待居し處へ駈歸り、利害々々我今女怪等が絲に罩はれて、危く命を助かりたりとて、頓て又村莊に至り一把の火を放て石洞茅屋を燒盡し、師徒四個立出て西に向ひて急ぎ行ぬ。

情因二舊恨一生二災毒一
心主遭レ魔幸破レ光

原來此盤糸嶺の西六七里、大路の一邊に一座の黃花觀あり。觀中の道士は則ち彼七個の女怪と同學の兄弟にて、常に往來をなしける故、此日女怪等直に觀中に來り、道士に見えて唐僧を捉て耻を蒙りた

ることを語り、種々商議して居る處に、三藏は是を知ず西に向ひて路を急ぎ、不多時觀門の前に至り、我們少時此觀中に休足し、便宜を見て齋を要べしと徒弟等と俱に門を入ば、主の道士出迎老師父は何處より來り給へると問ふ。三藏手を拱て答て曰ふ、貧僧は東土大唐より西天に至り、佛を拜せんと爲の僧なり。當今仙宮を過るに依て、少時休足を爲んとす。道士是を聞て大いに懽び、偖は聞及びたる東土の聖僧におはし候や。小道大いに失敬をなしたりとて、四衆を正堂に請じ裡に入童子に五鍾の茶をくませ、道士手親三藏に献じ、行者は師父の後に座し形の小きを見て、是を三徒弟とや思ひけん、先八戒に茶を献じ、次に悟淨、次に行者に進め、自親一鍾を取て相陪す。行者は嚮より道士が唐僧と聞より、大に喜び兼て準備したる如く、急速に茶を進め又四鍾の茶には都て赤棗を入れ、道士が茶には却て黒棗を入たるを見て心中怪み、茶鍾を手に拿少時伺ひ居る間に、三藏、八戒、沙僧は何の心もなく都て茶を喫畢りけるが、忽ち三個一齊に呵呀と叫びて倒れけり。行者驚き怒り罵て曰く、此畜生我と儞と原來何の怨もなし。怎麽毒藥を持て我師父を害したるやと、茶鍾を嚙的と投中たり。道士袖を擧て架住め大いに怒て曰く、儞潑猴自ら禍を招き却て怨なしと云や。儞們嚮に盤糸洞に入て齋を乞ひ、濯垢泉にて洗澡を爲さずや。行者曰く、汝既に盤糸洞濯垢泉の仔細をしる、偖は彼七個の女怪は都て儞が老婆なるべし。且我一棒を試看よと、耳の中より金箍棒を把出せば、道士も急に身を回し一口の寶劔を取り、正堂に在て戰ひけり。時に忽ち奥の方より、七個の女怪一齊に出來り、個々懐裡を引開き、臍の孔中より糸を作出し、行者を罩ひ住んとす。行者嚮に八戒が說話を聞たれば、絲を掛られては不當と身を轉して空中に飛升り、霎時息を休むる間に、忽ち彼觀門殿閣も梭を穿が如く舖罩ひ、看々一片の銀世界と變じたり。行者是を見て心に驚き、利害利害我幸に早く脫れ出たり。倘一度是に罩れなば、怎生して身を動すべけんやと、霎時沈吟したりけるが、頓て又一個の計策を思ひ着、七十根の毫毛を拔き、七十個の小行者と變じさせ、金箍棒を變じて七十條の又兒棒となし、一個の小行者毎に又兒一條づつ持せ、彼舖罩ひたる絲の廻りより搔攪させければ、遂に裡より七個の蜘蛛を引出しけるに、彼蜘蛛個々二尺餘りの大さにて、俱に手脚を縮めて一團となり、命を助給へ〳〵と叫びけり。行者遂に小行者を身に返し收め、又兒棒を集めて鐵棒となし、彼蜘蛛を件一に打殺す。彼道士又劔を揚て跳り來り、行者に向ひて戰ふ事五六十合、道士漸〳〵に力勞れて些し身を退くと見えけるが、忽ち衣服を解捨て兩手を上に指擧ければ、兩邊に一千隻の眼ありて潑刺と一聲叫ぶと等く、眼中より金光迸放出て十分利害。行者此金光黄霧の中に罩ひ籠れ、大に驚き急ぎ脫れ出んとすれども、脚を動す地少く、上に向ひて飛出んとすれば、却て金光に打落され、左に廻り右に轉じ汗を流して働けども、鐵桶の裡に在るが如く脫るべきやうも無りしが、又忽ち一箇の計策を思ひ着、一般身を搖し變じて穿山甲と做、土の中に潛り入り地の下に在て二十餘里を潛り、漸にして頭を出し見れば、彼金光十餘里の裡を罩ひ、此處は光も無れば遂に地上に立出で本相は現しけれども、遙々の地下を潛りて精

心を勞かし、再度戰ふべき氣力もなく、斯ては怎麼して師父兄弟等を救ひ得んやと、泪を流して立たる處に、向邊の方より一個の婦女、身に重孝を穿手に一盞の飯を持ち泪を流して走り來りければ、行者是を見て世間又我と同く悲む人あり。彼婦人は誰爲に哭やらんと、上前倚て問て曰く、女菩薩何個を失ひて這樣に哭給ふやといへば、彼婦人涙を押て曰く、我夫黃花觀の道士と爭ひ毒藥を以て殺さる。我此一飯を墓に備へて、些少夫婦の情を露さんとす。行者是を聞て發々と涙を流し、女菩薩は丈夫の爲に一飯を備て祭り給ふ。我師父も又彼道士が毒に害せられ給へども、我是を祭るべきやうなく心の疼み堪がたし。婦人が曰く、長老は那國より來り給へる人ぞと問ふ。行者則ち東土より爰に來り觀中にて彼道士と戰ひし事、其身金光に罩圍られんと爲しを、纔に身一個遁たりとて、萬般落もなく語ければ、婦人聞終りて云ふやう、儲は長老彼道士を知り給はず。他が名は百眼魔君とも、又は多目怪とも云ふなり。他を降さんと思ふには那里に一位の聖賢あり。此聖賢管ずよく金光を破り、道士を降伏し給ふべし。行者急ぎ再拜して、女菩薩萬望は其聖賢を敎へ給へ。婦人が曰く、此南千餘里に紫雲山といふ山有り。其山中千花洞に、一位の聖賢毘藍婆菩薩といへるあり。是を請來り給ひなば、那道士を降伏せん事疑ひなしと、仔細に說敎へ、我は爰にて別れ候はんと、云かと思へば忽ち空中に飛上り、黎山老姆と現れ、我龍花會上より、儞が師父を救ん爲爰に來れり。儞紫雲山に至るとも、我敎し事を告る事なかれと西をさして飛去り給ふ。行者則ち空中を禮拜し、忽ち觔斗雲を放ちて打跨、紫雲山へと飛行けり。斯て千花洞に至りければ、更に雞犬聲もなく、靜々情々たる洞中に一個の老婦榻上に座し居たり。行者是ぞ彼毘藍婆菩薩ならんと思ひ進み入て拜しければ、菩薩榻を下りて曰く、汝は孫大聖に在ずや。今何幹ありて來り給へるぞ。行者曰く、菩薩怎麼して我を認得給ふや。菩薩曰く、儞前年天宮を鬧せし時、普天普地都て皆名を傳へ誰か儞を知ざらん。行者曰く、老孫今は佛門に歸依し、唐僧を守護して西天に至る路にて、今日黃花觀の妖怪に出遇難に逢ぬ。萬望は菩薩彼妖精を降し師父を救ひ給はるべしと云ば、菩薩曰く、我魚籃會に赴きしより以來、已に三百餘年、姓を隱し名を埋み未だ曾て門を出ず、今日誰か儞に我隱室を敎つるや。行者曰く、老孫原一個の地理鬼曾て他の敎を受ず、自ら知て參しなり。菩薩曰く、我本外に出じと思へども、儞已に經を求るの善事あれば、是を助でやは有るべからず。我今儞と俱に去べしとて、頓て雲に駕て打扮給へば、行者後に從ひて不多時黃花觀に至り、金光艶々たるを臨み、行者指差て曰く、彼金光は則ち妖精なり。菩薩今何の器械を以て他を降し給ふや。菩薩曰はく、我子昴日星官が煉たる處の綉巷針あり。是を以て降すべしと、衣領の裡より眉毛の粗細なる五六分の長短なる綉巷針を取出し、空に向ひて投上給へば、一聲の響と俱に金光忽ち消失て、彼道士身を動す事能ず、直に原身を現しければ、七尺計りの大蜈蚣なり。行者大いに喜び妙なるかな妙なるかな、早く針を尋ね候はんと云ば、菩薩掌を展て針は返りて爰に在りとて、遂に行者と觀中に進み入り、唐僧等を見に三個俱に地に倒れ、早言斷たる光景なれば、行者聲

を發ちて哭にける。菩薩住めて曰はく、大聖悲む事なかれ我懷中に解毒丹あり。儞に與へて唐僧を救しめんと、一個の破紙に包たるを取出し、紅き丸藥三粒を行者に與へ給へば、行者急ぎ三個の口を推開き、個々一丸を吹入けるに、須臾の間に三個とも嘔吐をなし、毒藥を吐出し忽ち正氣に復りけり。行者則ち師父に向ひ、有し動搖を仔細と語ければ、三藏はじめ兩徒弟も深く菩薩を拜謝しければ、菩薩も夫々答禮し、彼蜈蚣を指に掛て千花洞にぞ歸られける。八戒是を見て此媽十分利害、那樣の惡的を翫弄ぬるやと駭けば、行者曰く、先に他が小兒は彼昴日星官なるよし語れり。星官は一隻の公鷄なり。思ふに此婦人は極て一個の母鷄ならん。雞よく蜈蚣を伏すと、此故に容易他を捉へたるならんと、三個是を語つゝ且行者が辛勞を謝し大路に沿て出行けり。

三編卷之九

長庚傳二報魔頭狠一
行者施二爲變化能一

一時秋の初節に當り、一座の大山に至る。其高き事天と等く、松柏日を覆ひ巖石峙立路阻狹し。三藏心中に怕れをなし、徒弟等能々心を用ひよと曰へば、行者曰、老孫光景を見屆來るべしと、頓て虛空に飛び升り、前面遙に眺る處に、忽ち雲端に大白金星現はれ給ふ。行者急ぎ進み倚て李長庚何國に去給ふやと問ふ。金星答へて曰く、我今此山に妖魔有る事を大聖に告んと思ひ、態々爰に來れるなり。此山行程八百里獅駝嶺と號く、山中に獅駝洞と云へる有り。爰に三個の妖魔有り。他等都て神通廣大にして、部下に四萬八千の小妖あり。大聖十分心を盡して、變化の妙を施し給へ。若し些少にても怠慢あらば、管ず爰を過ぎ難からん。行者是を聞き再拜し、頓て金星に別れを告げ、雲を下りて三藏に此由を報、三藏泪を流して曰く、斯の如く艱難多く、怎麼して此地を過、何の日か西天に至り佛を拜する事を得んや。行者いはく、金星這樣に告ると雖も、管ず五六分は虛言有ん。且八戒沙僧は爰に在て師父を護りて待ち給へ。我嶺に登りて伺ひ來らんと、又雲に跨つて飛去りけり。少時有て行者雲

より下を臨見るに、忽ち山の背後に叮噹叮噹と鈴の音聞えて、一個の小妖怪一桿の令字を書たる旗を捧げ、腰に鈴を着て出來る。行者是を見て思ふやう、他管ず山廻りの小妖なるべし。我れ他を欺むきて妖魔が消息を問ふべしと、急ぎ雲より樹蔭に下り、一個の小妖と變じ、他と同じき旗を擔げ鈴を帶出來り、彼小妖に行會ければ、小妖見咎めて曰く、儞は何里より來れる的ぞ。行者笑つて曰く、儞却つて一家内の者を認得ざるや。小妖が曰く、我城中に汝を見ず怎麼認得んや。行者曰く、汝認得ざるも理なり。我今まで燒火的を勤居し故、平日に汝と會事なし。小妖頭を打ち搖て我家の燒火的に原汝を見ず。且つ我大王家法嚴く燒的は常に火を燒、山巡りは常に山を巡る。既に燒的となり亦出て山を廻る者なし。行者曰く、偖は儞未だ知ずや、大王我が怠惰なく燒火的を勤めしを見給ひ、當般陞して巡山となし給へり。小妖曰く、我們巡山的一班毎に四十名あり。十班俱に四百名、大王より個々に牌を與へて號となし給ふ。儞其牌ありや。行者曰く、我れ怎麼牌なからん。然も當般新牌を領して來れり。又儞も定めて牌有るべし。疾出して我に看よ。我も又儞に見せん。小妖就ち衣服を揭げ、一個の金漆牌兒を取り出しけるに、正面に威鎭二諸魔一と四箇の金字有りて、背に小鑽風の三箇の眞字あり。行者是を見て、偖は巡山的は都て風の字を下に附るならんと、手を腰の間に指いれ、一根の毫毛を拔金漆牌兒と變じ、背に大鑽風の三箇の文字を露はし取り出して看ければ、小妖大に驚き我等都て小鑽風と名を呼ぶに、怎麼儞一個大鑽風といふや。行者曰く、大王既に我を巡山的に陞し給ひ、此新牌を賜はり大鑽風と號て、儞們一班の四十名を司どらしめ給ふ。小妖是を聞て急ぎ拜して曰く、長官偖は新に職を蒙り給へり。我實に長官の面を知ず當下の無禮を許し給へ。我一班の鑽風等皆南嶺の下にあり、我快く去て他們に報じ候はん。長官慢々來り給へとて、嶺の那邊へ跑り去る。行者小妖が言に從ひ、南嶺の下に至れば果的一班の小鑽風、爰に在つて個々身を屈て出迎へ長官に拜謁す。行者之を見て急に巖頭に登つて座を定、衆鑽風に對して呼はつて曰く、當般大王新に我を大鑽風に陞し給ひし謂れ、今儞等に說話ん耳定に聞くべし。近頃大王東土より來る唐僧を吃んと思ひ給へども、孫悟空といへる大徒弟、神通廣大にして能く變化を作と聞き、然ば彼の悟空萬一小鑽風の像に變じ、汝等が中に交はり居て、洞中の消息を伺ひ有んも計りがたし、此故に我を大鑽風に陞し、儞等が群黨中を査勘せしめ給ふ。我今汝等に問ふ事あり。夫を答へざる的は假鑽風なり。捉へ行きて大王に訴ふべし。儞們眞の鑽風に相違なくば、兼て大王の手列は知るべし。且速に是を答へよ。此時一個の小妖進み出て曰く、我等能く大王の手列を知れり、一の大王は神通廣大にして能く變化をなし、法身を現はし、一度口を開き給へば其廣き事城門のごとく、一口に十萬天兵を呑給ふ。二大王は鼻蛟龍のごとく、假令鐵背銅身の人なりとも、一度其鼻に卷るゝ時は終に命を失ふなり。行者曰く、儞が言ふごとく相違なし。儞は眞の鑽風にして假鑽風に非ず。亦一個の小妖上前出て曰く、我も又稟すべし。其次の三大王是は却つて凡間の人に非ず、雲程萬里鵬と號し給ひ能く九萬里を飛行し、又一件の寶貝あり陰陽二

氣瓶と號く、倘此瓶中に人を裝入れば、半時の間に化盡て血水となるなり。行者是を聞て心中に思ふやう、妖魔が手列怕るゝに不足、唯此の寶貝の瓶を怖るべしと、暗に驚きながら色にも出さずして曰く、儞が言ふ處違ず、儞は假鑽風に有ず。又一個の小妖進み出て曰く、當般大王唐僧を吃んと思ひ立ち給へども、一大王二大王は却つて是を要め給はず。三大王强て彼を要め給ふなり。亦一個の小妖上前出て曰く、三大王原此地の人に有ず、五百年前此西四百里隔つ獅駝國に來り、彼國の君臣百姓盡く喰盡し、因てかの城地を奪ひ居住し給ひし處、近頃唐朝より一個の聖僧を西天に遣はし、經を求むると傳へ聞き、彼聖僧は十世修行の好人にて、其肉を喰ふ者は不老長生を得と聞、他を捉へんと思へども、他が徒弟孫行者神通廣大なりと聞て一個の力に及ばざれば、爰に來つて兩個の大王と血緣を結び、力を合せて唐僧を捉へんとし給ふなり。行者曰く、儞等が言ところ一件違はず、先づ大王に此由を報じ、亦來つて査勘を爲ん。嚮に山を廻りし鑽風我に踉ひ來れ、大王に見えさせ賞錢を賜ひ得すべし。山にて逢し嚮の小妖大いに懽喜、行者と列立一里計り過ぎ行く處に、行者忽ち鐵棒を把出し小妖を打殺す。然して此小妖が像に變じ、旗を擔げ鈴を着獅駝洞に尋ね行きけるに、果然一座の洞門あり。門前に許外の小妖的群り居て、行者が來るを見て小鑽風歸りたるか、快く入て大王に見えよといふ。行者應と一聲噫へ直ちに門內に入り前面を看やれば、堂上に三個の妖魔並び座、兩邊に幾百の小妖伺候して、個々甲冑を帶し器械を把、威風凜々として殺氣騰々たり。行者些しも怕れず堂下に走り行けば、三個の妖魔問うて曰く、儞山を廻りて唐僧が消息を伺ひたるや。行者曰く、唐僧は未だ伺ひ得ず却て孫悟空を伺ひ來れり。老魔が曰く儞怎麼して、孫行者を伺ひたるや。行者が曰く、彼東嶺の那邊に一個の和尚、澗の上に蹲りて鐵棒を磨き居たるが、其像開路神のごとく、若し身を起さば十餘丈の長有るべし。彼鐵棒も又椀程の粗細あり。彼只管口裡に獨言を聞くに、我此鐵棒久しく神通を顯はさず。今是を磨いて洞中に入り、三個の大王を打ち殺し、一大王は皮を剝、二大王は骨を剔、三大王は筋を抽、假令門を閉て防ぐとも、我蒼蠅兒と變じて門の縫裏より潛り入り、他等を捉へ殺さんと云へり。我是に依て孫行者なる事を悟り候ふ。老魔是を聞いて一身汗を流し、兩個の妖魔に對して曰く、儞等きけ我曾て孫行者が武勇を聞及びしが、果的斯の如く却つて我們を討んとす。他又蒼蠅兒に變じて來らんと云ふ。我此洞中昔より、蒼蠅を生じたる事なし。若し蠅の來るを見ば、儞等力を用ひて拿ふべし。管ず遁す事なかれ。行者是を聞て一邊に身を起退き、密に一根の毫毛を拔て蒼蠅に變じ、老魔が臉に向ひて放ち遣りければ、老魔大いに驚き偖こそ孫行者來りたれ、快く拿へよと呼はりつゝ、個々鎗を把刀を振ひ、小妖等も一齊に器械を取て跑來り、上を下へと立ち騷ぎ、蠅一隻に騷動するにぞ、行者好笑さ堪へかねて、覺えず吸々と笑ひけるが、忽ち我眞の臉を笑ひ出し、是を變じ正さんとする間に、彼三魔王目疾く是を見附け、急に行者を扯捉へ、老魔に向ひ大哥々々是を見給へ、這厮則ち孫行者なり。想ふに這厮かの小鑽風を打殺し、却つて其模樣に變じて來りし者ならん。此時兩魔を

初め衆部の小妖ども、一齊に立ちかゝり、遂に行者を引倒し他遁法を知る故に、繩を以て縛がたし。陰陽二氣瓶の中に裝入て化し殺すには如じとて、小妖等に命じ陰陽瓶を取り出ださせけるが、此瓶纔に二尺四寸の大きさなれども、三十六個を用ひざれば動かす事能はず。此故に三十六個の小妖、彼二氣瓶を搭出し、瓶の口を行者に向ふれば、瓶中に仙氣ありて搜的行者を吸入けり。三魔打倚て蓋を罩ひ、既に孫悟空を捉へたれば、唐僧は自然と我們が口裡の物なりと、急ぎ歡喜の酒宴を催しけり。

心猿鑽二透陰陽體一
魔主還二歸大道眞一

行者は瓶中に裝入られ、身を小小變じ少時蹲り居ける處に、忽然として四面都て火焰となり、三條の火龍出來りて、行者が上下に盤り遶る。行者則ち咒語を唱へ、避火訣の印を結び、氣を住て座しけれども、漸々に火勢甚だしく、孤拐の肉已に和ぎければ、行者心中に慌得て、斯の如くならば漸々に孤拐より化盡て湯と成るべし。此裡に化し死なば、師父を佐けて西天に行く事能はず。萬年の功業一旦に空しくなる口惜さよと、覺えず泪を流しけるが、忽ち前年蛇盤山にて觀音菩薩の救命毫を賜りし事を思ひ出し、腦後を搜り見れば、果然硬き毛三根あり。行者憶く遂ひに是を拔き下し、一根を鋼鑽と變じ、一根は竹片と變じ、一根は細き綿繩と變じさせ、竹を張り弓となし彼鋼鑽を以て底に向ひ穿鑽しければ、直に一箇の孔を穿透たり。火勢此孔より漏れ出て冷氣を生じ、行者大いに懽喜、三根の毛を納め頓て蟯蟯虫と變じ、此孔より潛り出で、忽ち門外に飛び行き、本相を現はし、三藏の居給ふ方へ馳返り、師父々々妖魔を伺ひ來りたりといへば、三藏曰く、儞久しく歸らず我深く愁ひたり、山中怎麼なる妖怪ありや。行者則ち小鑽風に變じたる事より、瓶の裡に裝入られ、辛うじて身を脫れ歸りし事を語り、彼三個の妖魔甚だ手强く數萬の小妖的あり、我一個他と戰ひがたし。今八戒を傾し再度那里に行くべしといへば、八戒是に從ひ兩個とも雲に跨り走りて、獅駝洞の門前に至り、行者高く呼はつて、妖魔快く出來つて、孫悟空が手列を見よと叫びければ、門を守る小妖驚いて大王に此由を報ず。三個の妖魔是を聞て大いに驚き、彼の行者當に陰陽瓶の中に裝入たれば、今の程は化盡て水と成りたらんと思ひしに、他怎麼して拔け出でけんと怪しみ、急ぎ陰陽瓶の有る處に至り、彼の瓶の蓋を把りて裡を見れば、悟空は在ず却て底に一箇の孔を穿たり。偖は悟空此孔より鑽り出でしと覺えたり。然れども這厮奈何して孔を穿、如何して此小さき孔より出でにけんと、且つ怪しみ且つ驚き、忙然として立つたる處に、行者門外に在つて萬般と罵りけるにぞ、老魔忿然として謂て曰く、我等西方路上に在ては武勇の名あり、今日孫行者に侮謾れ、他と敵する者無くんば、名を千歲の末に耻しむべし。命を捨てて戰はんに何ぞ怕る〻事有んと、刀を把て門外に跳り出で呼はつて曰く、孫行者我言を聞。我軍兵を出し儞を捉ふる事安しと雖も、然しては儞我手列を知る事能はじ。我今儞と戰ひ快く雌雄を決すべし。行者笑つて曰く、怕らくは儞一個我に對する事能はじ、管ず逃る事なかれと

兩個遂に手を交へ五六十合戰ひける時、八戒堪へかねて師兄我代つて突止んと、釘鈀を把て跑出れば、老魔二個に敵し難く、忽ち本相を現はし、一個の青獅と成り口を開いて八戒を呑んとす。八戒大に驚き頭を回して逃出す。行者は却つて眞面に上前より、鐵棒を身に收め彼獅の口の裡へ飛入りけり。八戒是を見て行者を怨み、此弼馬溫の死生知ず、却つて他が口に入るは何故ぞ、明日は管ず大恭と變じて出るならんと獨言、急いで舊路に逃返りける。三藏は沙僧と俱に兩個が歸るを待ち給ふ處へ、八戒喘呼呼的跑來れば、三藏驚いて曰く、八戒怎麽狼狽しく歸たるや、悟空は未だ歸らずや。八戒曰く、師兄は妖怪に一口に呑れ、我一個漸々脫れ歸りたり。三藏是を聞て忽ち動と地に倒れ、悟空儞よく妖精を降すと思ひしに、今日却つて妖怪の手に死り、痛むべし〳〵と聲を放つて哭給ふ。八戒師父を勸解んともせず、沙和尙快く行李を開け。悟淨が曰く、二兄行李を開いて何を出すや。八戒曰く、行李を分ち取て個々別々に去ん。儞は流沙に立ち歸れ。我は高老莊に往て我渾家の面を看、白馬を賣りて師父の棺を買て葬送の準備を爲すべし。三藏是を聞て更に心を傷り、天に哭き地に伏て只管哭きて在します。却說獅駝洞の妖魔は、行者を一口に呑終り、洞中に立歸り我孫行者を拿へ來れりと呼はりければ、二魔懽喜で曰く、長兄那處に拿置給ひしぞ。老魔曰く、我他を一口に呑み、今我腹中に有り。三魔大いに驚いて曰く、大哥大いに過ち給へり。孫行者を吃し給ふ事中からず。行者腹裏に在て曰く、我を吃する事大いに中し。我飢たれば此肚裡の臟腑を喰ん。小妖聞て不好々々、行者大王の肚裡に在て說話すと怕るれば、老魔が曰く、我手列在て他を呑む。聲を出すを那ぞ怕れん。誰か在る快く鹽湯を取り來れ、肚に灌て他を吐出し、煮熟して酒の肴とせん。小妖頓て鹽白湯を把來りて大王に捧ぐ。老魔是を取りて吃盡し、喉を開て吐けれども行者敢て出ず。老魔沒奈何て、孫行者、儞怎麽出で來らざるやと云ば、行者肚裡より答て曰く、儞甚だ不通變也。我出家人原衣服なし、今秋凉の時節我尙單の直裰を着す。此肚の裡暖かにして風を透さず、冬を過て後出づべし。衆妖是を聞て這厮大王の肚の裡にて冬を過さんといふ。怎麽して善らん。老魔が曰く、他冬を過さんとせば我座禪をなし、搬運の法を行ひ、一冬飯を喰はず弼馬溫を餓死せしむべし。行者曰く、儞猶世事を知ず、我廣東より過來り一個の摺疊と鍋とを持て入りたれば、儞が五臟腸を取り雜炊に煮て食せば、來春までは乏しからじ。老魔小妖に命じて藥酒を取り來らせ、儞等怕るゝ事なかれ。我今此藥酒を飲み這厮を苦しめ殺すべしと、一連に七八鍾を飲みけるを、行者酒香を得て、此酒を他に飲せじと、頭を喇叭の口に變じ、他が喉嚨の下に受て、酒を盡く行者が口へ吸取りける。老魔鍾子を下に置き、不正や此酒平口は纔に二鍾を飲めば、肚裡火の如くなるに、今七八鍾を飲めども、些しも醉ざるは何故ならんと、只管に怪しみける。行者原來酒量高からず、今七八鍾を連飲にしたれば忽ちに大醉し、肚の裡にて舞ひ踊り、或は鞦韆竪蜻蜓翻根頭して騷ぎけるにぞ、老魔肚中大いに疼み苦しみに堪へがたく、地の上に轉倒れ只管鳴呼て絕入たり。多時有りて行者些し醉醒、手足を止めて定まりければ、老魔漸々蘇生苦氣なる

聲にて、大慈大悲齊天大聖南無孫行者悟空菩薩、萬望我を助け給へと呼はりけり。行者曰く、儞然樣に詞を費すべからず、唯孫外公と唱ふべし。老魔是を聞き又呼はつて曰く、外公 外公 萬望は慈悲を垂れて我一命を饒し給へ。我今唐師父を送りて此山を過えさしめ、活命の恩を報じ奉らん。行者曰く、我儞が命を饒さば、儞怎麼して師父を送るや。老魔曰く、我原金銀珠玉の贈るべきなし。我等兄弟三個一乘の轎兒を擔て師父を駕て送り候はん。行者 打笑ひ轎兒を以て師父を送らば、金銀を贈るより尙勝れり。儞口を開け我出で去んといへば、老魔急ぎ口を開きける。此の時三魔走りより、老魔が耳に口を倚悄悄的て曰く、他が出る時齒を咬合せて這厮を咬殺給へといふ。行者肚の裡にて忽ち悟り、先づ金箍棒を出して試みけるに、老魔果して咬合せ、鐵棒に喳的て却つて門牙を碎きけり。

心神居レ舍魔歸レ性
木母同降レ怪體レ眞

其時行者怒つて曰く、儞我を欺むきて咬殺さんとす。我れ再度出すとて鐵棒を抽回ける。老魔三魔を怨んで曰く、是却つて儞が過なり、今怎麼して他を出さんや。三魔曰く、長兄怨み給ふ事なかれ、我れ計り事有りとて高聲に呼はつて曰く、孫行者耳定に聞け、儞が名を聞くこと雷の轟く如く南天門にて威を現はし、靈霄殿にて勢ひを震ひ、今又西方路上に有て妖を降し怪を拿ふ。古今無双の英雄と思ひしに却つて一個の小輩の猴兒なり。行者曰く、儞何を以て我を小輩といふや。三魔曰く、儞若し出で來りて我と賭鬪を爲ば眞の英雄と稱すべし。那ぞ人の肚の裡に潛隱れ、我們を怕れて出で來らず、小輩ならずして抑何ぞや。行者是を聞て思ふやう、他が言も理なり、我若し出でず在らば、實に名を失ふべしと思ひ答へて曰く、儞既に我と賭鬪を求めんとす、我れ今出で行くべし。唯洞内窄く器械を遣ふに不宜、廣き處に出て我が出るを待べし。三魔則ち許若の小妖的を領し門外に陣を列ね、二魔は老魔を佐けて門を出で、孫行者出來れ、此處場廣し快く勝負を決せよと呼はりければ、行者又思ふやう、他亦反覆計りがたし。左右計略をもつて他を苦しめ、快く師父を送らしむるに如じと、數十根の毫毛を拔き、四十丈計りの大繩と變じ、妖精が心の臟に緊ぎかけ、繩の尾を手に取て咽下に至り亦思ふやう、若し口より出でなば、此繩を咬斷れんも計り難し、齒のなき處より出づべしと、上腭より鼻の孔に潛り出れば、老魔忽ち一聲噴嚏をなし、行者は遂に迸奔出づ。則ち一手に彼繩を扯、一手に鐵棒を取り、急に雲に飛び升り、力を極めて繩を扯ば老魔又初めて疼を覺え、天に向ひて釣揚らる。行者又地に下り横に繩を引ば、老魔風車の輪る若く空中より滾び落ち、行者に從ひて率れ行く。二魔三魔是を見て大いに驚き、一齊に繩に縋り落下いて曰く、大聖爺々は海量の神仙と思ひしに、却つて這樣に巧欺給ふや。行者笑つて曰く、這潑怪ども十分無禮なり、前に我を欺むきて咬殺さんとし、今又我を欺むきて幾萬の怪兵を以て我一個を圍まんと計る。是何の道理ぞ。妖魔一齊に拜して曰く、嚮の事は都て皆我們が罪過なり、今慈悲を以て命を饒し給はゞ、管ず老師父を送り奉らん。行者然ら

ば儞等刀を拿て繩を割て歸りされ。老魔が曰く、外の繩は割と雖も心中に殘り住りたる處怎麼せん。行者曰く、儞們既に師父を送らんと云ふ、其言僞り無きや。老魔曰く、繩を解て給はらば則ち送り奉らん、更に僞り稟べからず。行者頓て身を搖かして毛を收むれば、有りし繩忽ち消て老魔初めて疼みを脫れ、衆妖大家拜禮し大聖且歸り給へ。我等頓て轎兒を以て御迎へに參るべしとて、兵を收めて洞中に歸りけり。行者も身を回して急ぎ師父の許に歸りける。三藏は尙地に倒れ只管哭て在しける。沙僧身邊に在りて佐け居るが、忽ち行者が來るを見て、三藏八戒を怨喝て曰く、儞專ら能く人を怕す、悟空曾て死ざるを儞却つて死りといふ。那里より來る者は誰ぞや。八戒曰く、我明かに他が妖精に呑れたるを見たり。思ふに他師父に念を殘し、魂を回し來る幽靈ならん。此時行者廻り着是事を聞き、八戒が顏を打て曰く、我怎麼幽靈ならんや。向に妖魔我を呑し時、我妖怪が腸を扯五臟を抓み、他疼に苦しみ再三命を饒されん事を乞ふ。是に依て他を饒し、當今轎兒を以て師父を送り此山を過しめんとす。三藏是を聞て且つ驚き且つ歡喜、悟空大いに儞を勞したり。我今再生の心地せりとて手を拍て愴び給ふ。却說那妖精等は既に洞中に歸り、二魔老魔に對して曰く、我本孫行者を九頭八臂三身の大漢ならんと思ひしに、却て五尺に足ぬ小猴なり。我此洞中幾萬の部下、唾を吐ても他一個は溺し殺すべし。當下長兄の命を救はん爲、他を欺むき歸すと雖も、眞實他を送るべけんや。長兄我に三千の軍兵を與へ給はゝ、管す行者を捉へ來るべし。老魔是を聞て如何も儞が心に任すべしと云ば、二魔大いに歡喜、急ぎ三千の小妖を點じ遥に洞門を出て山を下り、大路に添て陣を列ね、一個の小妖前み出で我二大王爰に在り、孫行者快く出て雌雄を決せよと呼はりけり。八戒是を見て大いに笑ひ、師兄妖魔を降し轎兒を以て師父を送ると云ふに、却て亦戰ひを求むるは那ぞや。行者曰く、老魔既に我に戒められ敢て出こず、定めて彼二魔が我等を送る事を願はず、また來つて戰ひを要むるならん。我思ふに此妖精兄弟三個這樣に義氣あり、我們も亦兄弟三個、我既に老魔を降す、儞も亦二魔を降し來るべし。八戒曰く、我那ぞ他を怕れんや。且他を拿へ來らんと釘鈀を取つて山崖に跑登り、潑妖怪疾く出で來て我手列を見よと呼はりければ、二魔大いに怒り、鎗を掣て跑來り兩個崖上に在つて相戰ひ、未だ十合に至らざるに、八戒既に力疲れ身を轉じて逃んとするを、二魔快く鼻を伸て捲住む。衆妖擡と鯨波あげて洞中へ扯回けり。三藏遙に是を見て、悟空快く他を救へと曰ひければ、行者笑つて曰く、師父も甚だ偏心なり、我擒られたる時は、些しも念に懸給はず、他一度捉へらるれば、却つて這樣に慌て得給ふは何事ぞや。三藏曰く、儞が擒られしを我何んぞ念に懸ざらんや。思ふに儞は能く變化をなし管す身を破るに至らず。他は生得愚なれば妖精が手を脫るゝの智なし。儞快く救ひ來れ。行者則ち雲に駕空中を赶りつゝ思ふやう、彼の獸子我を死たりと咀ひたり。且渠に苦しみをさせて、然して後救はんと一個の蟭蟟蟲と變じ、洞裡に飛び行けば、不便や八戒手脚を拴縛、後園の池の中へ浸し置れたり。行者是を見て前日沙僧が說話に、他私房銀を潛し持てりと云ひしが、不知那處に匿し置きたる

や。且他を一嚇し驚て取り出ださせんと、則ち八戒が耳の際に飛び行き、怕醜氣なる聲を作り、猪悟能猪悟能と呼ければ、八戒怪しみて曰く、我法名を呼ぶは誰なるや。行者曰く、我は冥途の使ひなり。五閻王の命を受け儞を迎へに來りたり。八戒大いに驚いて曰く、長官且歸りて五閻王に奏させ給へ。五閻王は我師兄孫悟空と甚だ好敵なり。師兄の面に愛て一兩日を待つて給はるべし。頓て妖精等が師父を捉へ來りし時、師父と一同に往き候はん。行者曰く、五閻王已に儞を三更死と住定め置き給へども、我方便を以て一日を延引すべし。但し我今より外の處に往て、儞が代りの別人を伴ひ歸らんと思へども、盤纏を持ち來らず。今腹中餓たり儞定めて盤纏有るべし。些し我に與ふべし。八戒曰く、我は是出家人怎麽盤纏有んや。別人に問て要め給へ。行者曰く、汝已に盤纏なし我外に行く事能はず。然らば儞に繩を掛て扯歸るべし。八戒慌得て長官且繩を出し給ふな。長官の索は追命繩とか云て、是を掛れば則ち息絶ると聞けり。我此幾年上積來置きたる覩錢四五錢、耳の裡に有り。我今綑られて手を動す事能はず。長官親手取り出し給へ。行者則ち他が耳の裡を搜れば、果而四五錢の銀子あり。行者是を取り出し堪へかねて哈々と笑ひ出し、本相を現はしければ、八戒是を見て天殺的の弼馬溫、今此困苦の場處にて、人の銀子を僞り奪ふやと牙を咬で罵りけり。行者打笑ひ財は是小事なり、我且儞が命を救はんとて、鐵棒を掣て他を池より挑げ出し、縛めを解放てば、八戒歡喜行者と俱に洞門に跑り出で、門の一邊に熊鈀の捨て有りけるを、尋ね取て門を出んとする處を、許多の小妖是を見附遁さじと追ひ來る。兩個釘鈀を廻し棒を震ひ當るを僥倖打ち殺し、遂に門外に走り出でたり。二魔是を聞て大いに怒り、鎗を掣て門外まで追ひ來り、行者と少時戰ひけるが、忽ち本相を現はして鼻を伸て、行者を捲んと前み寄を、行者は双手に棒を横たへ、却て他に腰を捲せ鐵棒を鼻の孔へ突入ければ、二魔慌得大いに驚き、鼻を伸て退かんとするを、行者遂に鼻柱を掴み、前に向ひて扯下れば、二魔疼み甚だしく行者に跟ひ牽かれ行く。八戒は後より釘鈀の柄を以て他を打ち、兩個の象奴を見るごとく、師父の處に牽歸る。三藏是を見て徒弟等且他を傷る事なかれ。他若我等を送りて山を過なば、命を饒して歸せよと曰へば、二魔地に跪下いて曰く、唐聖僧若しわが命を饒し給はゝ、管す轎兒を以て山を過さしめ奉ん、更に變改致すべからず。行者曰、我們師徒は俱に慈悲を最專とす。然れば儞が言に從ひて命を饒し返すべし。這般倘變改なさば再度命を饒しがたしと、遂に放ちて歸しける。二魔は師徒に向ひて拜謝し、急ぎ洞中に跑り歸り、有りし事ども仔細語り怎麽はせんと議しけれども、衆妖個々默然と一言を出す者もなし。其時三魔上前出て我一個の謀計あり。管す唐僧を捉ふべし。謀計の次第は這樣這樣と仔細に示教ければ、老魔二魔大いに懽怡、急ぎ衆妖に命じ一頂の轎兒を擔げさせ、三個の妖魔つき添て、三藏の處に到り當下送り奉るべしと、個々跪下いて云ひけるにぞ、三藏は謀計とは夢にも知ず、遂に轎兒に座し給ひ、行者、八戒、沙僧等は後に附添、三箇の妖魔先に上前崖上に登りて、急ぎつゝ一日一夜に四百餘里の道を過ぎ、已に獅駝國の城地に至りける時、三魔忽ち方天戟を擧て孫

行者を刺んとす。行者急に身を轉じ、鐵棒を振つて相戰ふ。老魔八戒に砍て懸り、二魔沙僧に打つてかゝる。八戒沙僧釘鈀を舉寶杖を廻し、個々勇を震つて戰ひける。兼て計りし事なれば、轎兒を擔たる小妖ども、飛ぶが如くに城門に至り、門を排けと呼はりければ、門を開いて許多の少妖群り出で、三藏を城中へ迎へ入れ、其餘の小妖等は白馬を牽行李を擔ひ、個々城中へ入りにけり。三個の徒弟等是を知らず、只管戰ひ居たりけるが、八戒早く力疲れ身を回して逃んとするを、老魔直ちに口を開き八戒を咬止め、城中に飛び入り、小妖等を呼で綑縛させ置き、又出來りて二魔を援けて戰ひ、終に沙僧を捉へ城中へ扯回けり。行者は兩個の師弟が捉へられたるを見て、急に雲に駕て脱れけるを、三魔本相を現はし、翅を伸て赶上たる。原來行者が觔斗雲は一度放つて十萬八千里を去ると雖も、此三魔が翅は、一度搧ば九萬里を飛ぶ、二度搧は十八萬里を去。此故に忽ち空中に在て追及、終に行者を掻抓み飛び回つて城中に入りにけり。

三編卷之十

群魔欺二本性一
一體拜二眞如一

三個の妖魔城中に歸り入、唐僧四衆を捉へたれば、是を蒸熟して吃ふべしと、小妖等に命じて庭上に大いなる鍋籠を居、其中に水を汲入上に鐵籠を重ね、且八戒を下の一隔に裝入、沙僧を第二隔に入れ、行者を第三隔に裝、上の第四隔に三藏を裝入、乾柴を運び火を燒せ湯を湧せて蒸殺さんとしたりける。其時行者鐵籠の中に在て、一根の毫を拔假に行者に變じさせ鐵籠の裡に住め置、我身は隱身の法を以て密に空中に飛登り、雲端に在て遙に小妖等が立騷て火を燒を見て、若湯の湧滾たる時は、師父は乍ち命を失ひ給ふべし。且快く是を救んと咒語を念て北海龍王を呼出し、此一條を仔細語り唐僧を守護し給はれと賴みければ、龍王謹んで承諾り頓て身を一陣の冷風と變じ、鍋籠の下に飛入り火氣を押て昇らしめず。斯とは知ず老魔十個の小妖を呼て、儞們輪流に火を燒て些しも怠慢る事なかれ。我等是より略々安歇で明朝蒸熟したる時、鹽醋を調へて空心へ受用すべしと、三個の妖魔は個々寢宮に退きけり。行者空中に在て是を見屆け、頓て十根の毫毛を拔瞌睡蟲と變じさせ投げ下し、十個の小

妖の面に一隻づつ住せければ、十個の小妖忽ち座睡前後を知ず倒れ臥しぬ。行者則ら鍋籠の一邊に飛下り、鐵籠を開いて師徒三個を救ひ出す。三藏はじめ八戒沙僧も大に驚き且惟怡、偖は悟空が眞身は外に在けるかと、增々行者が神通を感じ、頓て白馬と行李を尋出し、前後の門は小妖等が護居て脫れがたからん。我等師父を援けて牆頭を越て脫るゝに如じと、行者且牆に登り上より師父を扯上る。八戒沙僧は下より推上んとしけるが、三藏災星未だ除かず、此時三個の妖魔忽ち睡を覺し、火燒の小妖を呼けるに、一個も答せざりければ、怪みて鍋籠の邊に立ち出で見れば、小妖等前後も知ず熟睡し、鍋籠の下に火の氣もなく、却て鐵籠みな打反り、唐僧等も在らざりければ、妖魔大いに驚き慌得、偖は唐僧を逃したり、快く來つて捉よと呼りけり。許多の小妖一齊に起出來り、火把を取り燈籠を照し城中都て白晝の如く、四面に別れて查勘廻る。老魔終に三藏を見着忿然として牆の下に走り至り、二魔三魔も續て來り、再度三藏八戒沙僧を生擒、許多の小妖是を扯立裡に入て、八戒沙僧は兩處の柱に細縛つけ、三藏は皇宮の後邊なる錦香亭の裡に匿し置、堅く鎖して守らせけり。行者は己に牆の上に在し故、急に雲に乘て身を遁れ、妖精等が都て裡に入り、城中些し靜りたるを見て、又雲を下り城中に入、又小妖の像に變じ、師父の在する處を查勘に、唯八戒沙僧は柱に縛められて在り、師父は却つて見え給はず。行者頓て一個の小妖を呼て、嚮に大王の捉給ひし唐僧は奈何なりしやと尋れば、小妖答て我も是を知ず、嚮に近士の說話を聞に、大王又孫行者が來り奪ひ行ん事を怕れ、交生食し給ひし由

なり。行者是を聞又雲に駕城外に出で、只管泪を流しけるが、密に思やう、此事都て如來の爲業なり、他極樂世界に居住し、暇に任せて三藏に經を遣んと作言す。若し實に東土へ經を傳へんと思はゞ、他方より送り遣すべき事なるを、却つて我們に來り要めさせ、千山萬水の艱難を歷、今日爰に至つて終に命を失ひたり。我今如來の處に行て、師父既に失給ひし事を告、我頭の金箍を外し故鄕花果山に歸るべしと、忽ち觔斗雲に打跨りて西方に向ひて飛行、須臾の間に靈山に至り寶蓮臺に近着、如來を拜し泪を瀧の如く流し、唐僧の妖精に吃れたる事、其外の事ども仔細に語り、萬望は大慈悲を以て我頭の金箍を拔せ給はるべしと、涙に咽びて訴へければ、如來笑つて曰く、儞心を惱ます事なかれ、彼妖精神通廣大なり。我惠眼を以て彼妖精を見るに、老魔二魔ともに皆主人有り。彼三魔は却て我と些しの親あり。行者曰く、其親みといふは如來の父黨なるや母黨なるや。如來曰く、天地開初りし時萬物盡く生ず。其中に獸の類あり禽の類あり、獸は麒麟を以て長とし禽は鳳凰を以て長とす。鳳凰又交合の氣有て孔雀大鵬を生ず。此孔雀出世の時人を喰ふ事甚しく、四十五里の間の人民を一口に吸入たり。我其時雪山に在て丈六の金身と成し時、又他が肚の裡に吸ひ入られ肛門より出でては、我金身を汚ん事を怕れ、依て他が背上を割て鑽り出で靈山に登り、他が命を傷んと思ひしかども、諸佛來りて會し孔雀を傷る事、我母を傷るに等しと勸解仕る故、遂に他を靈山に住置き、佛母孔雀大明王菩薩と號したり。今獅駝國の三魔は彼大鵬にて孔雀と一母なり。此故に我些しの親みあり。行者笑つて

曰く、如來曰ふごとくならば、如來は却て妖精が甥に有ずや。如來曰く、我妖精に親因あれば我自ら往て他を降伏すべしとて、阿難迦葉に命じて五臺山の文殊菩薩、峨眉山の普賢菩薩を宣給ひ、此二尊を從へて獅駝國に向つて出で給へば、行者も同く雲に駕後に從ひ赶りける。不多時獅駝國の城地に至りければ、行者且雲より下り城門に立て高く呼つて曰く、業畜早く出て孫悟空が棒を領よと罵りけり。三個の妖魔是を聞て個々器械を取て一齊に跑來る。行者三個を對敵にして少時戰ひ、頓て戰ひ負て空中に逃升りて、如來の金光の裡へ隱れける。三個の妖魔も雲に乘て赶上來りけるが、忽ち三尊の佛菩薩の空中に立給ふを見て、老魔二魔大いに驚き、彼潑猴怎麽して我們が主公を請じ來りしやと、急ぎ逃んとする處を、文珠普賢の二尊御聲高く、畜生怎麽歸り歸らざるぞと喝り給へば、兩個の妖魔器械を投捨身を搖すと見えけるが、忽ち本相を現し老魔は青獅二魔は白象と成りにけり。彼三魔は是をも怕れず、行者を捉んと近着けるを、如來手を擧げて指ざし給へば、他も終に本相現はれ一個の大鵬金翅鵲となり。一線の縷を翅に掛られ、再度遠く飛事能はず。行者其時金光の裡より立ち出で、如來を拜して曰く、佛爺々今妖精を降伏し給ふ事懽喜しと雖も、已に師父を妖精等に吃れ、我れ今怎麽とも爲事なし。大鵬牙を咬で怒て曰く、儞潑猴這樣の狠人を請ひ來り、我們を困苦却つて我們に師父を喰れたりと僞るや。儞が老和尚現に今錦香亭の裏に在、誰か敢て他を吃ひたるや。行者是を聞て大いに懽喜、急ぎ如來に拜謝すれば、如來遂に二菩薩と倶に三個の妖魔を引領、紫雲を放つて西天に飛去給ふ。行者は直ちに城中に飛下りけるに、小妖等は三個の妖魔降伏せられしを見て、大家四方に逃散失て一個も止住居者なし。行者遂に八戒沙僧が索を解て、三個とも後宮に入、錦香亭に至り鎖を穿て裡を見れば、果して三藏此處に居給ひけり。三個走り入て細縛を解て助け出し、四個個々懽怡にたへず。行者仔細に如來の妖精を降伏し給ひし由を語り、多時城中に在て休息し、飯を安排て個々吃し、然して亦城を出西方に向つて急がれたり。

比丘憐レ子　遣二陰神一
金殿識レ魔　談二道德一

三藏師徒は獅駝國の難を遁れ、數月を經て又一座の城地に至る。市街最も賑しき中に、家々の門毎に都て一個の甕籠あり。皆五色の絹を以て上を遮幔たり。三藏是を見て怎麽やらんと怪み給へば、行者我今見屆來るべしと、忽ち蜜蜂兒と變じ彼絹の裡に飛び入りて、列ねて八九家を窺ひけるに、盡く五六歳計りの孩兒を甕籠の裡に入れ置きたり。行者頓て飛び歸り來り、師父に此由語りけれども、是又何とも分たず。師徒四人彌怪み行く處に、遂に金亭驛館にいたる。三藏驛丞に見えて、朝に入て關文を換ん事を求め給へば、驛丞曰く、今日已に晩に及んで朝に入り給ふ事能はず。明日を待て入朝し給へ。今宵は此街門に宿し給ふべしとて、客房に入れて歇ませけり。三藏深く拜謝して其後驛丞に問て曰く、此城中に見れば門毎に小兒を籠に入れ置きたり。彼は何の爲なるや。驛丞低言きて曰く、長老

是を問ひ給ふ事なかれ、明朝急いで西に赴むき給へ。三藏是を聞て彌怪しみ再三仔細を問ひ給へば、驛丞則ち人を避け怕々悄々て語つて曰く、此國は原比丘國と號し候ふを、近比民間の謠言によつて小子城とよぶなり。此三年前一個の老者一個の美女を伴ひ來り國王に獻ず。國王此美女を深く寵愛し給ひ、遂に彼老者を國丈と稱し彼女子を美公と號け給ふ。是より國王晝夜歡樂を貪り酒色に溺れ、近き頃は精神疲れ苦しみ、大醫院の良法を進むれども更に驗なし。彼國丈我れ海上の仙方ありとて、十洲三島に去て藥を求め來り、其藥引に千百十一個の小兒の心肝を用ひ、是を煎じて藥を服すれば、千年不老の功有りと國丈が敎へに任せ、國中へ命を傳へ五六歲の孩兒を求め給ふ。彼籠の裡なる小兒は則ち藥引に用ひん爲なり。人家の父母は王法に懼て、表面に悲み歎ずと雖ども、內心想計り給ふべし。依て此城を小子城と號け候ふ。是國王無道の事なれば、長老明日入朝し給ふとも管ず漏し給ふ事なかれと、仔細と告終りて驛丞は退きけり。三藏是を聞て、此國王怎麼這樣に無道なる。許多の小兒の生命を斷て、其身一個の壽を延んとするやと、只管淚を流し給へば、沙僧勸解て曰く、師父悲み給ふ事なかれ。極めて彼國丈一個の妖邪にて人の心肝を飡はんと思ひ、法を設けて國王を欺むきたらんも計りがたし。行者曰く、悟淨が言大いに理あり。我明日像を變じ師父に跟て朝に入り彼國丈を窺ひ、若し妖邪ならば他を捉へて國王に示し、小兒等が命を救ふべし。三藏曰く、倘若し此小兒們が命を救ひ得ば、天大の功德なるべし。唯怕くは國王理非を察せず、却つて我を罪せば奈何。行者曰く、我自ら爲法あり。今宵且此小兒を外に匿し置き、明日其理の宜しきに從ひ事を計ふべしと、行者直ちに半空に飛升り、一聲の唵淨法界を唱へ、城隍土地神幷びに揭諦功曾等の諸神を呼び集め、此比丘國王許多の小兒の心肝を取て藥引と爲んとす。我師父此小兒等を救はん事を思ひ給ふ。萬望は列位彼小兒等を山林に匿し、一兩日食を與へて守護なし給はるべし。國王を正果に勸解て後個々返し給はるべしと央ければ、衆位の神輩都て許諾し、忽ち一陣の陰風を發し、淙々として城中に降り、彼小兒們を籠と俱に盡く攝去、行方も知ず成りにけり。行者則ち雲を降り師父に斯と告げければ、三藏大いに懼怡、再三行者を賞謝しけり。其夜は個々安寢し天曉に至り、三藏衣を整へて朝に入り給ふ。行者は蟭螟虫と變じ師父の毘盧帽子の上に住り居り、三藏朝門外にて黃門官に見え、貧僧は東土大唐より西天に至り經を取るの僧なり。今關文を換へん爲王城に至れりとて、仔細に來歷を述給へば、黃門官入て斯と報ず。國王旨を傳へて唐僧を殿上に宣登らせ、關文を見終り寶印を用ひて三藏に返し與へ給ふ。時に忽ち當駕官上前出て、國丈爺々來り給へりと奏すれば、國王急ぎ龍床を下り身を躬めて出で迎ふ。三藏則ち一邊に座を避て、密に國王を見給ふに、相貌疲衰へ精神倦怠りて纔に骸骨を住めたる形狀なり。不多時國丈殿上に至り國王に禮をも爲ず、端然として繡墩の上に座し、頭を回して三藏を看、此僧那國より來れるやと問ふ。國王答へて曰く、是は東土大唐より西天に至り經を求むるの僧なり。關文を換へん爲今爰に來たれるなり。國丈笑つて曰く、西方の道何の好處有て那國に赴くや、自古來唯道

獨稱尊と云り。他が佛門寂滅の如きは唯用なき功を費すのみ。三藏是を聞き給へども、敢て一句の應答も爲し給はず、國王に拜謝し階下に歩み下り給へば、行者則ち師父の耳に飛入悄々に告て曰く、師父彼國丈は妖怪なり。師父は且館驛に返り給へ。我爰に住り居て渠が消息を見るべしと云ひ捨て、亦殿上に飛歸り翡翠屏の上に住り居。三藏は直ちに朝門を出館驛に歸りて待ち給ふ。其時五城兵馬司慌忙しく入朝し、國王の前に奏して曰く、昨宵一陣の冷風吹來り、家々の小兒籠と倶に刮去、一向に踪跡知候はずと告しける。國王大いに驚き今日午の刻に彼小兒が心肝を取り、國丈が仙藥を服さんと思ひしに、計らずも冷風に刮去る丶事、是れ天より朕を滅し給ふ處なり。國丈笑つて曰く、是天より陛下を滅するに非ず、却つて長生を與へ給ふ處なり。我今日一個の絶妙の藥引を見る。千百十一個の小兒の心肝より勝れる事萬々なり。陛下此引子を以て仙藥を服し給はゞ、壽を延る事天地と同じからん。國王是を聞て其故を問ひ給へば、國丈答へて曰く、當今來りし東土の唐僧は十世修行の眞體、元陽の氣未だ漏す。小兒の心肝に比ぶれば萬倍の功あり。他今歸つて館驛の裡に在るべし。陛下快く羽林衞官軍を遣はし彼唐僧を捉へ、心肝を要め給へ。必ず脫し給ふべからず。國王滿心懽喜遂に是に從ひ、急ぎ旨を傳へ羽林官を召給ひ此事を命じ給ふ。行者是を聞濟し急に殿上より飛び出で、館驛に飛び歸り本相を現はし、師父亦禍發りたりとて、今聞きたる動靜を件一に語りければ、三藏聞て大いに驚き戰々兢々として魂を失ひたる如く、呆々掙々ぞ居たりける。行者曰く、此難を脫んと爲には、師父を徒弟となし徒弟を師父と爲さば管す何の患か有ん。三藏曰く、儞果而我を救はゞ何ぞ儞が徒弟と爲るを恨みんや。行者曰、然らば快く準備を爲べしと、且八戒に快く泥を些し取り來れと云ひければ、八戒心得たりと釘鈀を取て庭の土を突崩し、尿に交て和げ持ち來りける。行者心中不平と雖も、急卒の間なれば、沒奈何この泥を將て自己の面を撲作、一個の猿の臉を印し下、夫を亦三藏の臉に撲ひ管す辭を出し給ふ事勿れと眞言を念へ、一口の仙氣を吹罹ければ、三藏忽ち行者が像と變じたり。行者又其身を搖して三藏の模樣と變じ、纔に準備整ひける時、卒然に近邊騷がしく三千の羽林軍早くも館驛を取り圍み、驛丞が指引にて一個の錦衣官客房に入り來り、唐長老我國王の請待し給ふ。疾々來れと呼はりけり。此時行者の假唐僧出で迎ひ、錦衣大人最畏なくも降臨し給ふ。貧僧何の德か有て陛下の請待に逢事、懽喜何ぞ此上有ん。今大人と倶に入朝し、陛下を拜し奉らんと直ちに客房を立ち出づれば、羽林軍士等前後左右に圍繞して、急いで朝中に還りけり。

尋レ洞求レ妖逢二老壽一
當レ朝正レ主救二嬰兒一

羽林軍士等假唐僧を扯把て朝中に歸り、殿前に至りければ、假唐僧階下に立て高く呼つて曰く、比丘王貧僧を請ひ給ふは、怎麽の要め給ふ事あるや。國王笑つて曰く、朕偶一病を得て久しく癒す。僥倖に國丈朕に一方を賜ひ、今長老の心肝を要めて引子となし、此藥を服せんと欲す。長老敢て是を賜

はらば、長老の爲に祠堂を建立し、永く香華を國に傳ふべし。假唐僧曰く、是甚だ易事なり。貧僧原幾個の心肝あり。不知國王今何色の心肝を要め給ふや。國丈一邊より指定して曰く、我只儞が胸中の黑心を要む。假唐僧曰く、然らば早く刀を取り來り給へ。我今胸を割開き若し黑心有らば謹んで奉らん。國王是を聞て當駕官に命じ、一把の短刀を取り來らせ唐僧に與へける。假唐僧刀を手に把衣服を解開き、刀を胸に剛的突立肚の皮割開き、五臟を掴んで扯出す。國王はじめ衆位の官人是を見て、個個色を失ひ膽を冷し面を背けて居たりける。假唐僧臟腑の中より幾個の心肝を取り出し、衆官を呼で點檢せしむるに、只是紅心、白心、利名心、嫉妬心、我慢心抔は有れども更に一個の黑心なし。假唐僧其心肝を取て原の如く肚の裡に收め、忽ち本相を現はし庭上に立て呼つて曰く、陛下全く眼有て珠なし、彼國丈一個の黑心あり。何ぞ他が心肝を要めて藥引と爲し給はざるや。國丈行者が本相を看て大いに驚き、儞は天宮を鬧がせし孫悟空ならずやと、云ふかと思へば忽ち殿上より走り出、內院に飛入彼美公と諸俱に、一道の寒光と化して那里ともなく消失けり。國王群臣是を見て、偖は國丈は一個の妖精にて、却つて此長老は眞の神僧にて有りけりとて、急ぎ行者を殿上に請登らせ、國王問て曰く、長老怎麼這樣に像を改め給ふや。行者笑て曰く、今朝來りしは則ち我師父、唐朝の御弟三藏法師、我は其徒弟孫悟空と云ふ者なり。尙兩個の徒弟猪悟能沙悟淨師父と俱に館驛中にあり。嚮に陛下妖邪が言を信じ給ひ、吾師父の心肝を要め給ふ。此故に我師父の像に變じ來りて妖精を退けたり。國王是を聞き急ぎ衆位の官人に命じ、唐僧を請じ來らせ給ふ。衆官各々驛館に至り師徒三個を迎へ來る。行者急ぎ殿を下り、師父の面に一口の仙氣を吹噴ければ、三藏忽ち眞の像に返り、師徒都て殿上に登り國王に相見ゆ。行者國王に向ひ彼妖精が巢穴を知給はずや。國王答へて曰く、始め他が來りし時其住處を問ひたるに、此南七十里に一座の柳林坡あり。其裡の清花莊に住すと云り。朕不才にして深く他に狂惑され、今日亦他に欺むかれて罪を法師老佛に得たり。萬望は神僧大法力を顯はし、後日の患を除き彼妖怪を降伏し給はゝ、生々世々大恩を忘却べからず。行者笑て曰く、我寔に陛下に告べし。彼鵝籠の裡の小兒は、我師父の慈悲を以て我に匿さしめ給ひしなり。陛下且師父と俱に少時爰に待ち給へ。我八戒と俱に那里に去、妖精を捉へ來るべしと、直ちに雲を發して空中に飛び去りければ、八戒も引續いて雲に駕南を指て飛び行きけり。國王群臣是を見て、我們都て唐僧輩を異形の長老なりと怪みたりしが、偖は眞佛臨凡なりと、一齊に空に向ひて拜しけり。行者八戒は七十里餘り赶り行き、雲を下りて見れば一股の清溪あり。澗の一邊に千萬株の楊柳崖を挾みて排列し、却つて清花莊は何處に在るを見ず。行者則ち唵字眞言を唱へ、當方の土地神を呼出し、清花莊は那里に有りやと尋ねければ、土地神答て曰く、當方に清花莊と云ふなし、唯一個の清花洞あり。行者曰く、其清花洞は何里に有りや。土地神曰く、大聖南の岸に九叉頭に分れたる一顆の楊樹あり、其楊の下を左に三遍右に三遍轉りて、兩手を以て樹を撲て門を開けと、三聲高く呼び給はゝ、則ち清花洞現れ出づべし。

行者是れを聞て且土地神を歸し、八戒と俱に南岸に尋ね至れば、果的一顆の楊樹九條に分れたる有り。行者土地神の敎へしごとく、左りに三遍右に三遍轉りて、手を以て彼楊樹を拍て門を開けと呼はりければ、忽ち一聲の响ありて兩扉の門現はれ、門内の石屏の上に清花仙府と四個の大字あり。行者徑に門を開いて石屏の後に至れば、彼妖精一個の美女を抱て裡に座し居るが、行者を見て大いに怒り、急に蟠龍枴杖を取て行者を打んとす。行者鐵棒を以て架住、兩個洞外に跳り出で、千變萬化して相戰ふ。八戒彼の九叉の楊樹を押倒し、釘鈀を擧て築碎きければ、鮮血滾々と迸り嚶々として聲を發す。妖怪は行者と戰ひしが、終に力疲れ敵する事能はず、身を搖して一道の寒光と變じ、東に向ひて逃去んとす。時に忽ち空中に南極老人現はれ給ひ、彼の寒光を推住め、大聖少時待ち給へ、天逢赶事を休よ。八戒笑つて曰く、肉頭兒寒光を罩住めたるぞ、極めて妖怪を捉へたらん。南極壽星曰く、妖怪已に爰り在り。萬望は兩公他が命を饒し給へ。行者曰く、南極壽星と相親しむは怎麽なる譯ぞ。壽星笑て曰く、他は原我家の白鹿なり。前日東華帝君我家に來り給ひ、我と碁を圍みて戲れしが、其間他を園中に放ち置きしに、他間を窺ひ爰り來りて妖怪となれり。他出てより歸らざる事既に三日を過。天上の三日は下界の三年、我今漸々に尋ね得たり。行者曰く、已に壽星の物ならば我等敢て他を傷じ、快く領て歸り給へ。壽星是を聞て兩個に拜謝し、寒光を放ち一聲を喝し給へば、遂に一隻の白鹿となる。壽星則ち此鹿に打ち跨り歸らんとし給ふを、行者扯住めて曰く、今比丘國王此妖精に欺むかれ病

南極寿星収妖怪飯天上かる

を得て癒す、萬望は彼國王が壽を延給へ。壽星曰く、我鹿を尋ねに出し故丹藥を持ち來らず、唯懷中に三個の棗兒あり。是を儞に贈るべし。國王に與へて疾病を癒せよとて、取り出して與へ給へば、行者是を受け收め遂に壽星に扯別れ、八戒と俱に又清花洞に歸り入れば、彼美人戰々競々外面に逃出んとするを、八戒跑り倚て一突につき殺せば、忽ち本相現はれて白面の狐と成りにけり。行者是を見て是國王の愛したる美后なれば、拿歸りて他に見べしとて、死狐を手に扯着て、八戒と俱に頓て比丘國に飛び歸り、殿上に至り國王三藏等に見え、壽星と妖精を收め給ひし事を語り、彼の國丈は一個の白鹿にて、此狐は則ち美后なりとて見せければ、國王は大いに耻入且懽喜、衆位の官人等感歎に不堪、忽ち東閣を開いて素宴を安排し、國王手親杯を捧げて三藏師徒に進め、妖怪を降し小兒を救ふの恩を謝し給ふ。行者又壽星より給はりし棗兒を國王に贈り與へければ、國王大いに懽喜、直ちに是を服し給へば、病立地に癒て、精神健固に成りけるにぞ、增々深く恩を謝し只管四個を接待けり。斯て三藏は國王に辭語を告げて西方へ進まん事を曰へば、國王止む事を得ず唐僧を龍車に座せしめ、君臣后妃盡く城門を送り出でける時、忽ち空中に聲有りて、大聖前日央みに倚て小兒等を預りおきたり。今日大聖功成つて妖怪を平らぐ、依て今返し送るなりと、云ふかと思へば破破落落と千百十一個の小兒を、蹩籠と俱に城門の前に落しける。三個の徒弟是を見て、城中の百姓ども、早く來つて小兒を受取よと呼はりたり。城中の百姓等此事を聞くよりも、皆我先にと群り來り個々我兒を尋ね取り、只管

に懽喜騒ぎ笑ふも有れば舞も有り。是れ都て唐僧爺爺の恩德なりと、三藏の車を扯回し、亦徒弟等が異形なる姿をも怕れず、八戒を肩に駕、沙僧を手車に座せしめ、行者を頭に頂、一個に二十人三十人づつ取着、馬を牽荷を擔ひ城中に歸り入る、其形勢言語に絶す。國王も是を制する事能はず。三藏師徒沒奈何再度城中に廻り入り、家々の供養を受け一月餘り逗留し、再三に辭退しつ漸々に別れを告、遂に西方に進み給ふ。

四編序

四大奇書者小說之冠冕也。水滸西廂最善摸寫人情。西遊之一書雖事涉怪誕熟讀來亦深有味。然世多有荔支龍眼連殼呑者。予有見於此採先輩未譯者續試譯之。如何原不覃象胥之學。加才短思不贍心有得筆不能言。數回譯來皆隔靴搔痒不甚中窾會。倦而自棄長擱篋底。書肆某夙知之竊挑出以附欹劖。嗚呼我猶未甘心。看客可不堪閲。間挿繡像欲喜兒輩耳。

天保六星秋八月　　浪華中島寓居多聞亭中誌之

岳亭五岳

四編卷之一

蛇女育レ陽求二配偶一
心猿守レ主識二妖邪一

話表三藏師徒は只管西に進みける處に、一時一派の黑松大林の中に入て、半日餘り行ども未だ林を出る路を見ず。三藏則ち馬を止めて曰く、此林中僥倖に閑雅なり我少時馬を憩べし。儞等齋を求めて來れ。行者領承ぬと應て、且師父を馬より下し、松陰の下に座せしめ、自ら鉢盂を取て雲に打跨空中に飛行けり。八戒沙僧も馬を繫ぎ擔兒を下し、林中を徘徊して其處爰遊び步行けり。三藏は獨樹下に在りて多心經を念て居給ひしが、忽ち聽彼處に人の叫ぶ聲して、助け給へ〳〵と呼はる事頻なり。三藏大に怪しみ、斯る深林の中に何人か在つて斯樣に叫びぬるや。是管ず虎狼の類に出遇たる者ならんと、彼聲を視的に尋行給へば、果して一株の大樹の下に一個の美貌女子、上半身を葛藤を以て松樹に細縛、下半身を土裡に埋め置たり。三藏是を看て大に歎て曰く、女菩薩何事有りて斯細縛られ給ふや。彼女子泪を流し答て曰く、我家は爰を去事二百餘里貧婆國と云る處なり。此程清明の時節なれば我父母諸人と俱に野に出て遊びしに、乍ち一夥の强偸現はれ來り鎗刀を取て斬て廻る。我父母を上首諸人

我前にと逃去りぬ。我幼に依りて狼狽て地に倒れ、遂に强盗に捉られ此山中に扯來り、他等個々我を妻にせんと云て亦爭ひを做發し、因て我を斯林中に捨置、四散に別れ去て往方を知らず。我爰に在る事已に五日五夜なり。萬望は老師父大慈悲を垂給、我一命を救ひ給はゞ、九泉の下に在ても更に大恩を忘れ候はじ。三藏是を聞て覺ず泪を流し、徒弟等那處に在ると呼給へば、八戒沙僧是を聞着急ぎ師父の許に跑來る。三藏則ち八戒に命じて、彼女子が細縛を解放たしめんと爲給ふ處に、行者空中より是を看て、急ぎ林中に飛で下、早く八戒が耳を取て扯倒しければ、八戒驚き罵詈て曰く、師父今我に命じて這女兒を救はしめ給ふを、儞怎麽我を引倒すや。行者曰く、師父此女子を解事なかれ。他は是一個の妖精にて、我們を欺ん爲に來れるなり。三藏是を聞て悟空が云言生平に齟齬ず、既に其如くならば、我も亦是れを不顧とて畢に八戒を止めて立去給へば、行者大いに懽喜、急ぎ師父を扶て馬に跨せ四個一齊に西を指て進みけり。原來這女兒行者が言に違ず一個の妖精なりけるが、牙を咬で行者を恨み、此幾年孫行者が神通を聞傳しが果然虛ならず、彼唐僧は童身より修行し、一點の元陽を泄さず、他を拿て配合を做、太乙金仙と成らんと思ひしに、不期這猴猻に識破られたり。我再び法を設けて他を呼返さんと思ひ、唐師父那ぞ人の一命を救はざるぞ。這樣の薄情意を持ながら、却て佛を拜せんと思ふは何事ぞやと、風に隨ひて兩三聲呼はりけり。三藏遙に是を聞て馬を住め、悟空儞彼女子が云言を聞、他がいふ處大いに理あり。人の一命を救ふ事七級の浮屠を造るより勝るとかや。我再び

返りて彼女兒を救ふべしと、亦馬を轉廻給へば行者打笑ひ、師父亦例の慈悲を發し給ふ。我も亦師父を治べきの良藥なし。若し强て是を住めば師父亦我を怒り給はん。唯心に任せ給へとて個々原の處に立歸り、三藏八戒に命じて、遂に彼女子が細縛を解とらせ、釘鈀を取て他が半身を穿出せば、彼女子大いに懽喜立上りて衣裳を整へ三藏を禮拜しけり。三藏は此女子を同伴て、亦西に向ひて林中を步行出給ひける時、悟空は唯管に笑て止まず。三藏の曰く、這潑猴怎生斯の若く笑ふや。行者が曰く、師父今佳人に逢給ふ今宵は好樂あらん。三藏是を聞て怒つて曰く、儞亂說を云事なかれと。此時天色漸晩に及び松林の盡る處に、一座の殿閣現れけるにぞ、三藏徒弟們を呼で那里は管ず一座の寺院と見えたり。我且那里に往きて宿を要むべし。儞們女菩薩を介抱して靜に來れと、三藏一個前に進み山門に立入り、少時彷徨居給ふ時、寺中より色黑く筋骨露れ出たる道人走り出で、怪氣に三藏を顧居たり。三藏是を看て暗に怕れ、儞は妖精に有らずや、我は尋常の僧にあらず、東土大唐より爰に來れり。我手下に降龍伏虎の徒弟あり。我を過ち拿て却て儞が一命を亡ふ事なかれと曰へば、彼道人跪下て曰く、老爺々我は管ず妖精にあらず。此寺は鎭海禪林寺と號し、我は則ち寺中の香華道人なり。爺々既に遠方より來り給ふ。且這方へ入せ給へとて、二層の門內へ導引入ける時、亦一個の喇嘛僧走り出、三藏の威儀堂々たるを看て大いに懽喜たる光景にて、三藏の鼻を撫耳を扯肩を按背を撫て、手を携て方丈に伴ひ入けり。是は喇嘛僧の人を親む禮なりとかや。三藏已に座に着、東土大唐より西天に到り經を

求むるの縁由を仔細語り、今夜爰に一宿を過したき由を述給へば、喇嘛僧笑ひて曰く、老師父僞りを云ふ事なかれ、東土より西天に至るに幾萬里の山川を經、亦妖精邪鬼到る處都て多し。老師父一人怎生能爰に到り給はんや。三藏の曰く、我元來三個の徒弟あり。他等よく路を開き水を渡り、我を守護て爰に來り、唯今俱に門外に在り。貧僧一個怎麼爰に到る事を得ん。喇嘛僧大いに驚き、我此所虎狼妖精多くして、夜に入りては絶て人の往來なし。徒弟們快く唐長老の高徒を呼來れと云ば、兩個の小喇嘛兒急いで門外に出けるが、乍ち驚き跑り歸りて曰、唐長老の高徒は門外に居給はず、却て三個の妖精一疋の白馬を牽、亦一個の女子一邊に在り。思ふに高徒は已に妖怪に吃れ給ふならん。三藏打笑ひ、其三個は則ち我徒弟なり、管しも妖怪にあらず。一個の女子は松林中にて一命を救ひ來れる者なり。他們都て怕るべき者に有らず。快く呼來り給へと曰へば、小喇嘛漸に心を定め、又門外に立出不多時三個の徒弟と彼女子を導引て方丈に入來りけり。

鎭海寺心猿知レ怪
黑松林三衆尋レ師

鎭海寺の衆僧等東土より聖僧の來れる由を聞、都て方丈に集り來りて三藏に相見え、急ぎ師徒に齋を進め、彼女子を一邊に座せしめて相倍させつ。衆僧們一つには三藏の說話を聞き、二つには彼女子を暗に窺ひ、亦女子を救ひ來れる事などを聞、已に三更の頃に及びて、彼女子は別に天王殿に臥しめ三藏師徒は其儘方丈に安寢せおき、衆僧個々退きけり。明旦に至りて徒弟們已に馬を備へ、行李を收め師父の起給ふを待けれども、三藏只管沈睡して起出給はねば、行者則ち師父の枕を搖し、兩三聲呼醒しけるとき、三藏僅に頭を擡げ、我何故といふ事を知らず、頭重く身中疼み一向に一身動し難しと曰へば、八戒急ぎ手を伸て師父の身上を摸て曰く、我能此病を知れり。是昨宵錢費ざる飯と見て、餘りに幾碗食過して傷食をし給ひたり。行者曰く、儞慢に亂說を吐事なかれ。師父既に不快ならば且爰に住り居て、平復を待つて路に出給ふべしとて、遂に此寺に滯留し不期も兩三日を過しぬ。一日三藏頭を擡て悟空を呼で曰く、此兩日我病に困苦て曾て問はざりし、彼松林にて救ひ來りし女菩薩に食を送る者有るやと問ひ給へば、行者曰く、師父自己の病を愼み給へ。他が事を憂ひ給ふ事なかれ。三藏曰く、儞少時我を扶け起して、紙筆を取出して我に與へよ。行者曰く、師父紙筆を要て何にし給ふや。三藏泪を流して曰く、我今斯る病を得て管ず爰に身を終るべし。今一封の書を寫て此旨を大唐皇帝に奏し、別に亦人を擇で西天に到らしめんと欲す。儞我爲に長安に登りて、皇帝に我書を獻るべし。行者是を聞て大いに笑ひて曰く、師父今少しの病あり、忽ち這樣の旺弱き事を曰ふや。假令十分に疾重くとも、老孫冥府に打入り十大閻王を捉住て究問せば、誰か師父の命を要る的有ん。八戒曰く、師兄斯の若く曰へども、人の性命は計り難し。我等且送葬の准備を爲ば可らん。行者曰く、獃子亂話を云事なかれ、儞原故を知らず。師父は如來第二個の徒弟金禪長老の轉世にて、師父前世のと

き如來の會下に在て座睡をし、左の足にて一粒の米を踏給へり。此罪に因て今生にて三日の疾病あり。今日過ば管ず快氣し給はん。三藏曰く、誠に我病昨日に比すれば、同じからず。今日は口裡渴きを生じ、凉水を得ん事を思ふ。行者曰く、師父水を思ひ給はば、病已に除きたるなり。我快く水を取て進せんと、鉢盂を取て寺中の香積厨に入りけるが、爰に衆僧都て一處に在り、個々涙を流して居たりけるにぞ、行者怪みて曰く、儞等何を歎くや。我輩が幾日爰に滯留米薪を費すを憂るにはあらずや。衆僧曰く、更に這樣の事に有らず、那里よりか妖怪來りて前夜二個の小和尚を取られ、只衣服と骸骨後園に有り。次の夜亦二個の和尚を吃れ、昨宵又二個を失ひたり。此三日已に六個の和尚を失ふ。儞の師父今病有るに因りて敢て是を告ず。我們此故に只管心を痛め歎くにて候ふなり。行者是を聞て曰く、是妖怪の處爲に疑ひなし。我原妖を降し怪しみを取るの術あり。儞等が爲に今宵彼妖怪を捉ゆべし。管ず放心事なかれ。衆僧此言を聞て思へらく、他已に唐僧を守護し、幾萬里を經て爰に來る。極めて降龍伏虎の手列あらんと思ひ、長老此地方の爲に妖怪を除き給はらば、我輩が爲の再生の僥倖ならんと云ば、彼喇嘛僧が曰く、儞等且其言を住れ、今唐師父病あり、長老若し妖精と戰ひ給はゞ、或は唐師父の憂ひを成さん。行者曰く、院主の言理なり且師火に告て商議を做べしと、頓て水を取て方丈に行き、師父に贈り與ふれば、三藏只一飲に吃終り忽ち神氣暢達し、亦兩碗の粥を進め病勢頓に七分を減じけり。行者是を見て大いに歡喜、夜に入りて師父の病いよ〳〵快氣に見えければ、則ち此寺中に妖怪あり。我們爰に滯留事既に三日、其間に六個の小和尚を捉れしとなり。我今宵他輩が爲に妖精を捉んと思ひ候ふなりと告ければ、三藏大いに驚き、妖精已に寺內の僧を吃ひ殺す。我們も亦僧なり、兎死すれば狐歎むの道理なり。儞能心を用ひて妖精を拿へ來れと曰へば、行者懽喜唯一個佛殿に至り、十四五歲の小和尚と變じ、木魚を敲き經を念へ妖精が來るを待居たり。已に三更の頃に至り殘月僅に影さす頃、忽ち一陣の風颯と發り、蘭麝の香り鼻を穿ち一個の美貌女子忽然と現はれ來り、佛殿に上り行者が手を取て曰く、小長老何の經を念給ふや。少時後園に來り我と共に交觀して樂みを成し給へと、行者が手を扯去んとす。是を見て行者心中に想ふやう、偖は幾個の愚僧們色慾に欺れて性命を失ひたると覺えたり。我今他を遁さんやと、急に彼女子が手を扯住め、本相を現はし鐵棒を把て打たんとす。妖精大いに驚き、急ぎ身を退き兩口の劍を拔出し、佛殿の前に在て兩個多時戰ひけるが、妖精忽ち身を轉じて左の脚の鞋を脫、咒語を念て本身の模樣と變じさせ、兩口の劍を使ひて行者と戰はせ置、眞の身は一陣の清風と化し、方丈に飛入三藏を攝將て何地ともなく飛去けり。行者は是に心着ず、只管彼女子と相戰ひ遂に妖精を打倒し、亦一棒に打たんと爲時、却て是一隻の鞋と變じけるにぞ、行者是を見て首て覺り、偖は他が計策に陷入しか口惜さよと、急ぎ方丈に歸り入て看ば、師父は既に居給はず、八戒と沙僧と二個茫々然てぞ居たりける。行者曰く、師父は何處へ去給ひしぞ。八戒沙僧答て曰く、今一陣の風至ると思ひしに、忽然師父は見え給はず。是管ず妖怪の爲に捉れ給ひし

ならん。行者是を聞て大いに怒り、儞等守護して在りながら、何ぞ空然と妖怪に師父を奪れたるや。且儞們を打殺さんと鐵棒を出しければ、八戒慌得驚き頭を抱へて身を縮め動き得ず。沙僧は却て捲簾大將の臨凡にて、事に馴たる者なれば些しも騒がず、行者が前に跪下師兄少時待給へ、今我們二個を打殺さんとし給ふは、再び師父を救はず、華果山に歸り去んと思ひ給ふならん。行者罵て曰く、我那ぞ水簾洞に歸らんや、唐僧を守護して西天に至るなり。沙僧が曰く、師兄誤ち給へり。若し我れ兩個無くんば誰か能馬を牽、誰か荷を擔ひ誰か又食を造り薪菜を拾はんや。師兄且怒を止て我們を免し明朝三個同じく力を合せて、師父を尋ねば亦却て益有ん。行者是を聞て理なりと怒を收め心を歸し、然らば明日儞們と同く力を盡して師父を尋ねて救ふべしと云けるにぞ、八戒大いに懽悦、此般の事は都て我身に懸りたる事なり。唯我們に任せ置給へとて、其夜は三個ともに方丈に夜を明し、翌旦個々急ぎ起出て、衆僧を呼て昨宵の事を語り、又前日携來りし女子を尋ぬるに、已に去方を知らざれば、偖は這女子妖怪にて師父を奪ひ去りたるに疑ひなしと云ければ、衆僧等大いに驚き、我等却て老師父の煩勞を做たりとて、且三個に齋を侑めける。行者が輩三個は遂に馬を牽擔を荷ひ、此妖精は前日彼女子の居たりし松林中に往て尋ねば、速に知るべしとて亦東に向ひて轉廻し、彼松林中に至り行者則ち咒語を念て此地方の土地神を呼出し、此地に妖精在りやと尋ぬれば、土地神答ていふ、曾て妖精なし。然れども此正南千里計り陷空山無底洞と云處あり、這洞中に一個の妖精住り。他昨宵一陣の陰風と做て此地方を過りたり。極て他洞中に廻りしならん。行者是を聞て旦土地神を歸し去らしめ、八戒沙僧と諸俱に白馬を牽て一齊に雲に打跨、少時の間に南方千里に飛行至り、一座の大山頭に住り、且八戒に分付て洞府の有地方を尋ねけり。

四編卷之二

妖女求陽
元神護道

八戒は山を下り一條の小徑を求め、五六里餘り上前往ける處に、忽ち兩個の女怪あり。井の邊に水を汲居たり。八戒是を看て聲を發て、女怪々々と喚ければ、彼兩個大いに怒り、這和尚甚不禮なり怎生我們を妖怪と喚やとて、釣桶の掉を把延て八戒が頭を連打に打ちたりける。八戒大に驚き頭を抱て山上に走り返り、長兄此地方の妖精果して勇猛なり。彼山下に兩個の女怪あり。我一兩聲妖精々々と喚たれば、他便ち棹を把て我を打たり。行者是を聞て笑て曰く、儞已に妖精と呼ば他が怒るは理なり。儞今像を變じ再び他等を伺ひ來れ。八戒曰く、我今像を變じ行くとも亦他們に打るべし。行者曰く、儞他們を妖精と呼事なかれ。他輩若し我等と同じ年記ならば姑娘と呼び、若し老たらば奶奶と呼ぶべし。然らば那ぞ打るゝ事有らんや。八戒是を聞て我早く是を知らば他們に打れざりしをとて、遂に一個の黑胖和尚と變じ、再び山の坡下に走り往、かの女怪が水汲在ところに到り、禮を施して姑娘這樣に水を汲で何にし給ふやと云ば、兩個の女怪笑つて曰く、長老來歷を知り給はず、我家の老夫人昨宵一個

の唐僧を帶歸り給ひ、我們に命じて陰陽交媾の好水を汲せ、筵宴を安排て唐僧と親俚を做ん要なり。八戒這事を聞畢り、急に又山上に跑返り、師父は既に妖精と親俚を做給ふ。沙僧疾く行囊を出せ個々是を取分ちて、古鄉に歸るべしと云ば、行者曰く、獸子亦亂說を做は那ぞや。然らば我們快く其女妖が後に從ひ往て、他が洞中に至り事の動靜を伺ひ來るべしとて、夫より三個一齊に山を下りて遙に見れば、彼兩個の女怪は水を汲終りて、南に向ひて步行ゆく。行者が輩三個も後に連きて行けるが、一片の崖の邊にて彼女怪を看失ひけり。三個急ぎ那里に至り崖の前に轉り出れば、果然一座の樓門有り。樓上に陷空山無底洞と云る六個の大字を彫附たり。門內却て房宇なく、一塊の大石十餘里に跨る石の正中に一箇の洞あり、底の深淺計り知るべからず。行者是を見て是管ず妖精が巢穴なり。儞等少時爰に在て俟べし。我且裡に入りて動靜を伺ひ來らんとて、身を搖して洞中に飛入けり。斯て行者洞の裡に入て看れば、却て明々朗々として唯是一個の世界に出たる如く、日色風聲花草竹木人間世界に異ならず。行々て見れば亦爰に樓臺房舍許多あり。行者忽ち一隻の蒼蠅と變じ、奧深く飛至り見れば、一箇の草亭の裡に彼妖精絕色の美女と變じ、數多の女妖的等を會へ、筵宴の準備を做居たり。行者亦東の廊下へ飛行看れば、三藏は一室の格子の鎖たる裡に座て、忙然として在したり。行者格子の裡に飛いり、三藏の頭の上に住り、師父と一聲呼ければ、三藏行者が聲を聞つけ、悟空儞來れるか疾く我を救ひ吳よ。行者曰く、妖精當今筵宴の準備を做、師父と親事を做んとす。我思ふに師父は他と夫

婦に成り、或は一男半女を生下給はゞ、却て師父の子孫を住め和尚と成るに勝るべし。三藏牙を咬で曰く、儞這場に至りて尙我を欺んと爲や。我大唐を出しより以來一毫の妄念を生せず、若し此妖精に因つて眞陽を亡はゞ、永世輪迴に墮入て生々身を歸する事能はず。行者笑て曰く、師父恨み給ふ事なかれ、我計策を設けて救ふべし。今妖精酒を備て師父に進せんとす。師父少時堪て他が一鍾を喫、師父又急に他に一鍾を斟、鍾中に一箇の喜花を斟記て他に送り給へ。我其時蟭蟟虫と變じ、喜花の下に飛入、他が肚の裡に呑下したる時、肚の裡に入りて心の儘に他を困苦降伏せしめ候はん。三藏是を聞て大いに懽喜、我其如く做べきなりと曰ふ處へ、妖精快東廊に進み來り鎖を開きて裡に入り、唐長老這邊へ來り、一鍾を飲で樂み給へと、三藏の手を携て扯立る。三藏沒何女怪と倶に草亭の裡に出給へば、女怪且鍾子を擧て一杯を吃し、三藏に與へける。三藏止事を得ず鍾子を手に取揚、少時躊躇おはします。行者師父の耳の中に飛入り、此酒は葡萄酒なり、一杯を吃給ふとも苦しからずと低語ば、三藏遂に此一鍾を喫終り、向の計策の如く親手一鍾の酒を斟杯中に喜花を斟起し給ふ時、行者早く蟭蟟虫と變じ、喜花の下に飛入りて妖精が飲乾を待居たり。三藏則ち鍾子を妖精に送り給へば、女怪大いに懽喜、急ぎ手を取て三藏を拜し却つて酒を飲ず、且鍾子を下に指置て幾句の情話を訴つ。少時して鍾子を取揚ける時、彼喜花已に消果て彼蟭蟟虫現はれ見えければ、女怪小指を以て虫を挑げとり、地上に彈き捨たりける。行者謀計の成らざるを見て口惜く思ひ、卽時一隻の大鷹と變じ、翅を掀爪を輪開し、酒肴卓席盤碟の類ひを、盡く打摔碎きて外面に向ひて飛去けり。女怪是を見て大いに驚き、這洞中に原這樣なる畜生なし。思ふに今日親事を做に善ざる日にて、天より此災ひ下せるならん。我又更に良辰を擇、改めて唐長老と親俚を做べしとて、亦三藏を東廊の裡に送り推籠おき、小妖的を呼で筵宴の傢伙を收めさせけり。却說行者は草亭を飛出、草花の裡に隱れて少時潛み居たりけるが、忽ち後邊の方より、散亂と香の烟り飄り出けるにぞ、行者不審思ひ身を轉して打探看に、一座の石壇の上に一張の卓子を備け、卓子頭に香を焚上面に兩個の大金字の牌子あり。是を讀むに一個は尊父李天王之位、また一個は尊兄那吒三太子之位と寫看たり。行者是を看て滿心懽喜、遂に彼牌子と香爐とを取て、直に洞外に出で、八戒沙僧等が待居たる處へ飛歸り、唏々哈々として笑ひ居たり。八戒沙僧是を見て問て曰く、長兄這樣に懽喜給ふは、師父を救ひ出し給ふにや。然れども師父の見え給はざる事は奈何。行者彼牌位と香爐を地に指置て曰く、我們師父を救ふに及ばず。此牌位を以て玉帝に訴へ奉つらば、師父は自然助かり給はん。沙僧が曰く、此牌子那里に有しや。行者曰く、此牌子則ち彼女妖怪が供養する所の牌子なり。想ふに彼妖精は李天王の女兒にして、三太子の姊なり。他凡氣を發して下界に到り、妖邪と成つて我師父を拿しものならん。我今より天上に昇り、此牌位香爐を證據と做玉帝に奏し奉つり、李天王父子を呼下りて我師父を救はしむべし。八戒が曰く、玉帝に奏聞せんには告文なくては協ふべからず。行者曰く、我則ち告文を主張べしとて、頓て行李を開き師父の紙筆を取

出し、一張の狀子を認め、是を袖裡に推納て、牌子香爐を手に取て觔斗雲に打駕て急ぎ天上に昇りけり。

心猿識二得丹頭一
蛇女還二歸本性一

行者直に南天門の裡通明殿に到り、四大師を迎へ禮を作て仔細を賴み、靈霄殿の下に入り、頓て玉帝を拜し牌位と香爐を取出し、彼紙狀兒を呈上ければ、玉帝是を取揚て讀み下し給ふ。其文に曰く、

告狀人孫悟空年甲在牒。係二東土唐朝取レ經僧唐三藏一徒弟告爲二假妖一攝二陷人一。口事彼有二托搭天王李靖同男哪吒太子一。閨門不レ謹走出親女一在二下方陷空山無底洞一。變二化妖邪一迷二害多命一。今將二師身一攝二陷曲邃之所一。渺無二踪跡一。切思伊父子不仁故。縱二女氏一成レ精害レ衆。伏乞憐二難行一拘二至案一。收レ邪救レ師明正二其罪一深爲レ恩。便有二此上告一

玉帝是を看畢て驚き給ひ、是全く李天王が過失たるべしと、急ぎ狀子に批を居、太白金星を宣て命じ給ひ、行者と同く狀子を持たせて、托搭天王の住する處の雲樓宮に使し給ふ。金星旨を領し行者を引將て、李天王の宮宅に到れば、天王急ぎ出迎へ禮畢て後、彼狀子を受取讀みも終ず大に怒つて曰く、這猴猻我を誤ち告たり。我怎生這樣の事有らんや。金星曰く、天王怒りを住給へ。今牌位香爐御前に有りて證見とす。天王曰く、我唯三個の男子一個の女兒あり。大兒の名は金吒と呼、今如來に侍奉て前部護法となる。二兒の名は木吒、南海に在て觀音菩薩の徒弟と爲り。三兒は哪吒常に我身邊に在て朝に隨ひて駕を護る。一女の名は貞英と呼て今星纔に七歲、人事も尙知らず怎生妖精と成らんや。這猴猻實に惡むべし。譬ば下界の小民すら、誣告の罪は三等を加ふるの法あり。況や我は天上の元勛なり。且斬て後奏るの職を受く、我且他を斬て後入朝せんと、魚肚藥叉の諸將を呼遂に行者を細縛ければ、金星の曰く、我御前に在つて他と同く旨を領す。怎生他を縛め給ふや。天王曰く、他が如きの反人寔に免し難し。金星少時座し給へ。我且他を斬つて後同く朝に入るべしと、砍妖刀を取出し已に斬らんと爲處に、忽ち一室に聲有て父王少時待給へと呼はつて、哪吒三太子所出給ふ。天王是を看て儞何の故に我を住るや。三太子の曰く、父王忘れ給へる事あり。實に女兒下界に在り。天王曰く、我唯儞們四個の兄弟のみなり。怎生又外に女兒あらんや。太子の曰く、彼女兒は原一個の妖精にて、三百年以前靈山に在りて、如來の香花寶燭を偸み食ふ。如來我等に命じて他を捉しめ給ふ。當時父王如來に乞て他が命を救ひ給へり。他其恩を思ひて遂に父王を拜して父と唱へ、我を拜して兄と做、後心を改めて下界に在りて牌位を設けて、香花を備ふと聞けり。他不期も又妖精と成つて唐僧を陷害却て孫行者に我們を告らる。他は則ち結拜の恩女にて同胞の親妹にあらず。天王驚いて曰く、我實に是を忘れたり。他が名は何とか云しぞ。太子の曰く、他三個の名あり。上首金鼻白毛老鼠精と云へり。寶燭を

偸を以て改めて半截觀音と號け、後下界に在つて亦地湧夫人と做く。天王當下初めて省悟し、親手行者が繩を解かんとするに、行者却つて身を轉廻し、誰か我繩を解かんとするや。我此儘に玉帝に見えて事の始末を奏すべし。金星疾く我を列て歸り給へ。李天王と御前に於て折辨せんと、口に任せて襲ぎけり。天王沒奈何金星を央て方便を求む。金星再三行者を和め、漸〳〵に細めの繩を解き下し殿上に座せしめ、金星又行者に對ひ謂て曰く、今大聖御狀を告て妖精は天王の女兒なりと云、天王は我女兒に有らずと云て、兩個御前に在て只管折辨し、理非速かに不分ときは管ず兩三日を過すべし。天上の一日は下界の一年なれば、彼妖精强て師父と親俚を做ば、忽ち一個の小和尙を生じ、遂に師父を洞中に住め置かば、却て儞が心一箇にて一大事を過つに有らずや。今唯玉帝へ解狀を呈上て李天王父子と俱に下界に至り、儞の師父を救ふに如じ。行者是を聞て打底頭、老官兒の言實に理なり。我然らば儞の面に愛て此官事を任すべしと、遂に一張の解狀を寫め、金星と俱に靈霄殿に到り、玉帝へ回奏したりける。天王父子大きに懽喜、急ぎ天兵を引領て行者と俱に南天門を立出て、少時の間に下界に降り陷空山無底洞にぞ至りける。兼て待たる八戒沙僧、天王父子の來り給ふを看て急ぎ禮を做て相見え、事の仔細を語りあひ、皆一齊に洞口に至り、且行者と太子と天兵を領て洞中に下りいる。彼女妖精は此日亦筵宴を設け、三藏を草亭の裡に携へ出、已に親事を做んと欲する處に、乍ち許多の人音聞えけるにぞ、頓て外面に跳り出、行者を見て大に怒り、忽ち兩口の劍を打振て伐て掛り、看々後邊に哪吒太子の居給ふを見て、大いに驚き怕れを做、俄に地上に拜伏し倒れ臥ければ、太子則ち衆位の天兵に命じ、縛妖索を以て女妖精を細めさせ、其外洞中の小妖們を盡く細め取り、洞門外に引出しければ、行者は跡より師父を尋ねて助け出し、洞を出て來りければ、八戒沙僧等大いに懽喜、師徒四個天王父子に拜謝すれば、天王父子は妖精を率領て天上に歸り去り給ふ。三個の徒弟們は三藏を扶けて又西方大路に出たりけり。

難滅伽持圓二大覺一
法王成レ正體二天然一

話說三藏師徒は又西に向ひて進みけるに、時正に仲夏梅雨の節に當り、雨に沾ひ日に晒し只管急ぎ行ける處に、忽ち前面に善財童子現れ出で、空中より高く叫で曰く、唐僧靜に來り給へ、此西五六里は則ち滅法國と呼る土地にして、彼國王此三年前より羅天大愿を立、一萬個の和尙を殺さんと誓ひ、這兩年に已に九千九百九十六個の僧を殺し、今四個の和尙を要め殺して一萬の數を滿んとす。唐僧城に入給はゞ宜くその防ぎを做給へ。我今菩薩の旨を領して是を告ん爲に來れるなりとて、南を差して飛去けり。三藏是を聞て空に向ひて禮拜し、戰々兢々として行者を呼、怎麼して此國を過やと曰へば、行者曰く、師父憂ひ給ふ事なかれ。今天色既に晚んとす。若し鄉民城に歸る者有つて我們を見ば惡かりなん。少時僻靜なる所に身を潛め、商議を做て行べしと、大路を避て一個の坑坎の中に至り、行者、八

戒悟淨に向ひ、儞們爰に在て能師父を保守、老孫先動靜を打探來るべしとて、身を聳して城中に飛行、また一個の撲燈蛾兒と變じ街上に飛下り、六街三市の人家を伺ひ、簷を廻りて行に、此時早黃昏を過たれば家毎に燈光を點じ、家裡の光景明かに見えわたる。爰に一簷の飯店あり、裡に入て看れば八九個の旅人、大家々々衣服頭巾を脫捨て酒に醉て打臥居たり。行者是を見て一個の計策を思ひ付、家裡を飛廻つて燈光を盡く打消、本相を現し彼の四五個の衣服頭巾を集に抓取、悄々に外面に跑り出、又雲に飛駕て師父の居給ふ處に歸り來り、三藏に向ひて曰く、師父此處を過んと思ひ給はゞ、和尙の模樣にては協ひ難し。我今飯店にて幾件の衣服頭巾を借來れり、我們今是を着て俗人に打扮、城に入り賈人なりと云て、飯店に一宿を要め、明朝五更の時打立て城を出ば、假令我們を見る者有りとも、和尙と悟る的あらんやと云ば、三個是を聞て都て理なりと是に同じ、夫より個々俗人の衣服頭巾を着し、袈裟法衣の類ひは皆行李の裡に收め、行者又商議を定て列位是一夜師父徒弟の字を云出だす事なかれ。師父を指て唐大官と呼べし。八戒を猪三官、悟淨を沙四官と呼び、老孫は孫二官と呼べし。店中に至らば列位都て口を開くべからず。只何幹も老孫一個に任せ置き給へ。飯店の主人何の賣買ぞと問ば、此馬を牽て樣子を做我們馬を賣て活業とす、十個の兄弟を夥伴り。我們四個且前へ來りて爰に一宿を要む。六個の兄弟們は一群の馬を牽て明日爰に來るべしと云ば、店の主人管ず懷喜款待べしと云ければ、三個も是を聞て此謀策上計なりと一齊に愔び、個々准備整ひければ、遂に白馬を牽て大路に出、不多時城門に到りける。此時泰平の境外いまだ城門を關ず。四個直に城中に入り、街上に添て急ぎけるが、嚮に行者が衣服を偸たる飯店の前に至れば、彼旅人等家裡に在て或は衣服見えずと云者も有り、或は頭巾を失ひたりと云者も有りて、聲々に喚き嘆ぎ居たり。行者心中含笑然ども夜の事なれば、不知體にて疾足に過往、頓て一軒の飯店を見當、行者前み依て門を敲き、這裡に宿すべき處や有ると呼はれば、一個の婦人裡より答て、官人達且這方へ入らせ給へと云ふ。又一個の漢子出來て馬を牽入れ、急ぎ四個を樓上に導引いる。四個燈籠の後の火陰處より、大家樓上に登る。一個の婢婦又一個の燈籠を携へ登るを行者曰く、今宵月亮たれば燈光を用ふるに及ばずとて、火を吹滅總に座定まりける時、二個の漢婦は樓を下りける。此家の主人五十有餘の婦人、一個の丫鬟に四碗の茶を齎せて樓上に登り、三藏們四個に向ひ、偖も列位は那里より來り給ふや、亦甚の賣買を做給ふやと問ひけるにぞ、行者曰く我們は北方より來れる的なり、馬を賣て活業となす。婦人曰く、官人の尊姓は何と唱し候ふや。行者曰く這一位は唐大官、彼は猪三官、這は沙四官、老孫は孫二官といふなり。婦人笑て曰く、何れも異なる尊姓なり。行者曰く、世間に不多姓名なり。我們十個の兄弟を夥伴り、六個は尙城外に在り、明日一群の馬を牽て此處へ來るべし。婦人曰く、一群に多少の馬を牽給ふや。行者曰く、大小百十疋餘り都て皆我牽たる馬の如し。唯毛片は箇々不一。婦人曰く、孫大官人は寔に大人の賈人なり。僥倖我家に宿り給ふ。若し別人の家ならば、管ず官人達を住る事能はず。我が家房室濶くして飼草料も又乏

しからず、幾百疋の馬を牽給ふとも都て皆能養ひ得べし。我家爰に住する事多年、我夫は趙氏なりしが不幸にして早く世を去、我今寡婦にて此家を存つ、此故に世人我を呼で趙寡婦と稱做り。我家原來上中下三樣に客人を管待、今小人を先にし君子を後にす、且房錢を定め候はん。行者曰く、常言に貨に高低三等の價有り、客は遠近一般に看事無といへり。府上怎生三樣に客を管待や、且是を語り給へ。趙寡婦が曰く、彼上中下三樣とは且上樣は五果五菜、小娘兒を請で陪歌を爲しむ、一位毎銀五錢なり。中樣は三果三菜、小娘兒を請ず一位毎銀二錢なり。下樣は尊客に告ぐるに及ばず、唯便ち飯を用ひ幾文の飯錢を得るのみ。行者曰く、我江湖上に在て那里五錢の銀を出さゝらんや。然らば上樣を安排來れ。趙寡婦是を聞て滿心歡喜樓上を下んと做とき、三藏行者に低語て曰く、他猪羊の類ひを用ふるに有らずやと曰へば、行者是を聞て急ぎ趙寡婦を呼て曰く、我們今白齋戒日なり。鮮を用ふる事なかれ。趙寡婦訝りて曰く、官人達は長齋を做給ふや、月齋を做給ふや。行者曰く、我們庚申齋を做なり、今日卽ち庚申なり。今宵且素食を安排給へ。飯錢は上樣に依て奉上すべし。趙寡婦是を聞て萬千歡喜、遂に樓上を下りけり。些時有つて許多の素飯を安排來りけるにぞ、師徒四個大いに喜び、個々是を喫しけるが、食し終る時に至て、趙寡婦又樓上へ登り來り、行者に對ひ娘小兒は幾個呼べきやと問ける。行者曰く、我們既に齋戒日なり。又六個の兄弟們未だ來らず。明日他們が來りし時個々一會に呼で樂むべし。趙寡婦が曰く、然らば明日十人を請で待候はんとて、了鬟を喚で家伙を收めさせて下りけり。

三藏また行者に悄々我忒だ辛苦的なり。我們若し熟睡して頭巾を落し、家人們に頭を見られば、大いなる誤ちならずや、一室の黑き處を要めて睡ば可らん。行者聞て是理なりと點頭、急に又趙寡婦を呼で曰く、此猪三官濕氣あり。沙四官は疝氣有りて風を怕る。唐大官は黑き處に睡毛病あり。我も又差明を好ます。一室の黑輕處あらば我們を睡しむべし。趙寡婦少時沈吟して曰く、我家眺望を專にして造たれば、黑き處一室もなく、亦涼きを好みて作たれば風は殊に透すなり。風を忌ひ黑きを好み給はば、下室に一張の大櫃の侍ふが、裡に四五個睡べき程の寬さあり。此裡風を通さず亮を透さず。爰に入て睡給はば奈何。行者曰く、甚好我們其櫃の裡に入りて睡べし。快く前行せよと云ひければ、趙寡婦大いに打笑ひ、然らば這方へ來り給へとて、前に立て樓上を下る。三藏師徒は行囊を取て跡に連きて樓上を下り、後房の一邊なる大櫃の裡に入り、行囊まで揵ぎ入れ一齊に成て睡たりける。趙寡婦上より蓋を鎖し、其身も臥房に退きけり。憐べし這四個仲夏暑氣の時節と云ひ、大櫃の裡に氣を閉られ、些少の風さへ透ざれば、個々鬱氣に堪難く彼方へ推這邊へ押れ、三更過る時刻に、終に睡に着にけり。行者は獨却て眠らず、故意と搗鬼を云て曰く、我們が本身五千兩、前日の馬三千兩、今兩塔聯裡に四千兩あり。這一群の馬を賣らば又三千兩は有るべし。利足も又許多んと獨細言居たりけり。

四編卷之三

前章の下

行者は寔の賈人と思はせ、和尚と悟られぬ爲に斯云しを、豈計らんや這家の裡に偸賊在りて、今暗に行者が說言を聞き、急ぎ門外に走り出、二十餘個の强偸を引率れ來り、門扉を破り一齊に動と打入ければ、家內の男女叫び競き、四方に散つて逃迷ふ。彼の强偸們却つて家裡の財寶を奪はず、個々後房の一邊なる大櫃の處に至り、彼櫃を繩にて堅く結び住め、八九個の偸賊是を擔ひ、亦一個の偸夫白馬を牽出し、一齊に此家を走り出、直に城東に向ひて跑行、守門の軍兵を斬殺し、城門を出でんと做處へ、巡城總兵官と東城兵馬司と人馬を領し、城を巡りてかへり來かゝり、偸賊と見よりも、夫遁すなと指揮しけるにぞ、偸賊們は大いに驚き多勢に敵する事能はず、四散に成つて逃去けり。官兵們は偸賊們が捨置きて去たる彼の大櫃を見て、是何等の物なるを知らず、且明旦朝に奏聞して後に此櫃を開くべしと、兵士輩に分付て白馬を牽せ、大櫃を總兵府の裡に擡ぎ入れさせ置、其夜は大家安歇けり。此時三藏櫃の裡に在つて是を聞大いに驚き、悄々に行者に云けるは、明旦官兵們此大櫃を擔ひて國王の前に至り是を開かば、我們都て僧の身なり、管ずしも一萬の數に加へて殺さるべし。今怎麽して是を

遁んやと悲み給へば、行者師父を諫て曰く、師父放心し給ふな。我一個の計策有とて、頓て耳の裡より金箍棒を把出し變じて綱鑽と做、彼の大櫃の底に孔を穿、身を搖かして蟻と變じ、這孔より爬出て總兵府の戶の透間より外面に出で、本相を現はし雲に駕て飛び行き、皇宮殿の裡に下り大分身普會神法を使ひ、左りの臂上の毫を盡く拔き下し、口より仙氣を吹蒐幾千の蟭睡虫と變じさせ、唵字眞言を念へ、當方の土地神を呼び出だし、這般師父の難を語り、儞們我助力せよと、彼の瞌睡虫を殿中に放たしむ。土地神命を受て行者と俱に彼の瞌睡虫を皇宮、內院、五府、六部、各衞門、大小官員の宅內都て品職在る者の顏に盡く一隻づつ放たしむ。原來夜陰の事と云ひ、彼の瞌睡虫顏に住りたる者ども、前後も知ず熟睡して、奈何なる事をも覺えずあり。行者又右の臂上の毫を若干拔き取り、數千の小行者と變じさせ、鐵棒を出だし幾千口の刺頭刀と變じさせ、一個の小行者每に刺頭刀一口づつ持たせ、皇宮、內院、五府、六部各臥室に入りて、國王を上首后妃宮女大小の官員們の髮を盡く剃落さしむ。數千の小行者數千人の髮を剃落し、殿中若干の比丘尼と和尚を作做おき、行者忽ち身を搖つて小行者も瞌睡虫も皆原の毫に返し、左右の臂上に收め、刺刀兒を原の鐵棒と做耳の中に藏し納、土地神を返し雲に駕て總兵府に飛びかへり、又螻蟻と變じ扉の縫兒より裡に入り、彼の大櫃の底の穴より這入て、師父に此の由を說話、八戒沙僧も是を聞いて暗に笑ひ居たりけり。却說翌旦に至り內院の宮妃睡を覺まし、平生よりは頭冷く覺えけるにぞ、手を轉て頭上を撫て見れば、是れ奈何忽ち髮を失なひ、

一個の比丘尼と成居たりけるにぞ、大に驚き哭き、急に丫鬟を呼ければ、阿と應て出で來たる丫鬟を見れば、是れも同じく毛髮を亡なひ、圓き頭を抱へ涙ながらに出で來たる。偖はと驚き又外の丫鬟を呼に、是も猶ほ髮を亡なひ出で來たる。是唯妖怪狐狸の處爲ならんと、外の宮女輩を問ひ聞くに、那個も皆髮なくて、來で來るも出で來るも殘らず尼僧の姿なり。大家驚き且悲み、急に官員們を呼ければ、出で來たる官員又是れ禿子なり。是はと怕き外のを呼べば、那個も〳〵皆禿子看々皇宮、內院、五府、六部の裡の男女一個として毛髮有はなく、都て皆な和尚と成けるにぞ、許多の官員驚き狼狽、抑奈何なる妖怪の處爲ならん。快く君王に奏聞すべしと、個々急ぎ入朝しけるが、國王未だ起出給はず。衆官寢宮に近づき呼醒し奉れば、國王驚き何幹にやと出御あれば、是れ亦一個の和尚皇帝なり。衆官是を看て增々呆果唯涓を流し、都て五府五部各衞門大小の官員們、俱に皆表章を奉り、昨宵殿裡の男女總て皆髮を亡なひたる由を奏聞すれば、國王又自己の頭上を撫で更に恐悸を做給ひ、少時兩手を拱き頭を低れ嘆息して曰ふやう、是れ朕當時許多の僧を殺したる報ひにて、天より我を戒め給ふなるべし。朕此後不都に和尚を殺す事を停止べし。能く此旨を國中へ觸下すべしと命じ給ひける。衆官此旨を領承し已に退朝せんと爲處に、巡城總兵官と東城兵馬司と連忙しく入朝し、昨宵城東にて許多の偷賊に出遇し一五一十仔細奏聞し、彼の白馬と大櫃を朝廷に牽居ける。國王是を逐一に聽き給ひ、衆官に命じて彼の大櫃を開かしめ給へば、裡より四個の和尚現れ出たり。國王はじめ衆位の官員輩行者八戒等が異形なる形勢を見て心中深く怕れをなし、抑和尚們は那國より來れる的ぞと問ひければ、三藏合掌して曰く、貧僧は東土大唐王の旨を奉じ、西天大雷音寺に至り佛を拜し經を求むるの僧なり。昨宵玉城に到りし處に、國王一萬個の和尚を殺し給ふの由を承解、斯の如く俗人の模樣に打扮て飯店に宿り、大櫃の裡に隱れ睡候ふを、計らずも偷賊の爲に大櫃を盜み出され、官兵士の手に度り、今又庭上に至る事を得たり。萬望は君王我們四個を免して、西方に赴かしめ給はゞ大恩ならん。國王是を聞いて俄に衆官に命じて、三藏を殿上に登しめ、龍床を下りて三藏を拜し、偖も老師父は天明上國の高僧なり。朕却て失迎の罪あり。曾て此國の和尚朕が行政を誹謗たるを以て、朕就ち誓を發し、一萬僧を殺さん事を要め、既に九千九百九十六個の和尚を殺したり。不期も昨宵宮中の后妃君臣皆盡く髮を亡なひ、僧形となれり。是れ則ち天より朕が罪を咎め給ふ處なりと首て悟り、當下佛門に歸依せんと爲の處なり。萬望は老師父朕君臣們を門下と做給はゞ、國中の財寶を以て獻じ奉ん。行者曰く、我們は德を積の僧なり。些一も財寶を要す唯處持するの關文あり。萬望は陛下是を倒換寶印を用ひ給ひ、我們を西方に送り出だし給はらば、管す其德に依りて國家安全萬民快樂を保ち侍はん。唯此國滅法國と唱る事甚不祥なり。今より欽法國と號し給ひなば可ならん。國王是を聞て大いに懽喜、急ぎ衆位の官員們に命じ國中に令を下し、欽法國とぞ改ため給ひける。三藏師徒も少時殿を辭し下り、別室に入て法衣を更ため、行者私に一根の毛を拔、一個の行者と變じさせ、三藏の身邊に置き、

本身は昨夜取り來たりし彼の旅客們が、衣服頭巾を搔抱き、隱身の法を使ひ空中を飛び行き、昨宵の飯店の簷端に衣服頭巾を投落し、又殿中に飛び返り、一根の毛を身に返し師父と俱にぞ居たりける。國王は三藏師徒を兩日住め、萬般の素筵を設け、丁寧に是れを管待、遂に關文を倒換て欽法國の印を用ひ、君臣個々列を正し、唐僧四衆を城外に送り出だし七八里を過て別れけり。

心猿妬ニ木母一
魔王計レ呑レ禪

三藏師徒は欽法國を跡になし、西に向ひて急ぎける。一時亦一座の高山に登り、前面遙に臨み給へば、忽ち山崖の間より一陣の風登り、怪みて看る處に、亦一陣の霧を發し、直に半空を罩ひ昇る。行者是を看て且師父を少時待たせ置き、雲に駕りて空中に立て、山崖の間を打探看るに、一個の妖精石上に座し、左右に三四十個の小妖圍繞せり。行者心裡に思ふやう、我れ今是を師父に告げば、師父亦た管ず怕れ給はん。且八戒を欺きて那里へ遣はし、彼の妖精們と戰はせ、他們怎麼計の手段あるや見るべしと、頓て雲を下り三藏の前に至り、打笑つて曰く、我れ生平は能く千里の間を打探見ると雖も、今日却て大いに看錯りたり。彼の風霧は是れ妖精にあらず、這の前面に一村里あり。鄉中の人家善根を好み、一家一家に乾飯を蒸て、僧に施こすにて候ふ。霧と見えしは人家の蒸桶の湯氣なり。八戒是れを聞き秘に行者を一邊に引き往き、長兄今那里の人家に至り、齋を喫ひて來りしやと低語問ふ。行者曰く、我今日時を喫て來りたり。那菜蔬太はだ鹹くして多く喫難し。偏去きて喫ん事を思ふや。八戒曰く、我既に飢たり快く去て彼の日時を喫せんと思ふなり。長兄師父に云ふ事なかれ。行者曰く、我れ師父に云ば、偏一個怎麼して去や。八戒曰く、我れ些一主張ありと云ひて、頓て三藏の前に到り、師兄今前村の人家、齋を就て僧に施すと云ふ。我們那里に去きて齋を領んと思へども、此馬却て草料を要め、人家の墻を打攪さば可からず。僥倖に今風霧霽れたれば、大家まづ爰に在つて待ち給へ、我去つて些の嫩草を取り來たり馬に飼て後ち、一齊に人家に去つて齋を喫し候はん。三藏大いに懽愔で曰く、偏生平と替りて今日能く心を用ふ。快く草を把來たれ。飼畢りて後那里に行べし。八戒是を聞て計成たりと愔び、釘鈀を腰に揵て山の凹に跑り行き、一個の矮胖和尚と變じ、他原經を念ふる事を知ざれば、口の裡に上大人を細言、木魚を敲き前み行く。爰に彼妖怪は小妖們に命じて、大路に出でて往來の人を待たせける處へ、不多時八戒前面より來たりけるにぞ、小妖們是を見て一齊に把圍み、衣を扯き腰を推し山崖に扯き去かんとす。八戒其の手を捻て曰く、偏們扯き往に及ばず、今我れ偏們が家に去きて、個々の齋を領せんと欲す。小妖們が曰く、我が大王偏を拿へて蒸熟して喫んとし給ふに、偏却て齋を領せんと云ふや。八戒是を聞て大いに驚き、偖は他等は一夥の妖精にて有りけるを、彼の弼馬溫我を欺むき、齋を施こす家有りと僞りて爰に遣したりと、心裡頗る怒を生じ、忽ち本相を現はし、腰より釘鈀を把り出し、散々に突き立ければ、小妖們狼狽廻り後をも不顧して

逃げ返り、老妖大王に斯くと報ず。老妖怒て急ぎ一條の鐵杵を取つて跑け來たり、八戒を見て喝つて曰く、儞何的なれば爰に來たり、我が小妖的を惱すや、速かに姓氏を名乗れと呼はりけり。八戒答て曰く、我は是東土大唐より西天に至り、經を取る唐三藏の徒弟猪八戒と云ふ者なり。儞却て我を知らざるや。老妖是を聞き答て曰く、偖は儞は唐僧の徒弟なるか、我れ這の處に在つて儞們を待つ事久し。怎麼饒し返さんやと、鐵杵を擧て打て係る。八戒釘鈀を輪して是に當たり、兩個勇を奮ひて戰ひけり。此の時行者は師父の後邊に在つて、乍ち吸々と笑ひければ、沙僧問うて曰く、長兄何を思ひて獨り笑ふや。行者低語て曰く、八戒は眞に獸子なり、我に欺むかれて那里に行き、未だ歸り來らざるは、極て妖精們と戰ひて在るならん。我れ快く往きて看來るべし。師父に告る事なかれと、一根の毫毛を拔き一個の假行者と變じ做し、沙僧と並ばせ置き、眞身は空中に飛び昇り山崖の一邊に到り看れば、八戒は許多の妖怪に圍繞れ、前に防ぎ後ろに支へ、沒命的と戰ひ居たり。行者是を看て聲を勵し、八戒不要忙なかれ、老孫來れりと叫りければ、八戒大いに力を得、又更に勇を奮ひて働きける程に、遂に妖精を盡く赶散しけり。行者是を得と見屆け、急ぎ原の處に飛び歸り、假行者を身に收め、不然體にて師父の後邊に座し居たり。不多時く八戒一身に汗を流し、喘氣喘的跑回ければ、三藏驚きて曰く、儞飼料草は要めず、怎生這樣に連忙だしく回り來りしぞ。八戒身を振はして曰く、師父に是を語るは甚だ面目なき事ながら、我が師兄に哄欺かれ、假に馬飼料を要むるを名とし、那里に去きて齋を喫せ

んと思ひしに、却つて一夥の妖怪に圍繞まれ、命も危うかりしを、亦師兄の助力を得て漸〻に脫れ歸りたりといふ。三藏大いに怪みて、悟空向より爰に在りて那里にも出ず、怎生儞に助力せんや。行者大いに打笑ひ、遂に以實に仔細を語りければ、三藏も沙僧も大いに笑ひを催しけり。行者亦曰く、八戒儞今開路將軍と做りて、師父を保守て爰を過ぎば、此の地第一の大功と做べしと云ば、八戒聞てさきに妖精が手段は知りたり。遂に是を領掌し、然らば我れ師父を保守て、此地方を過るべしと、さきに進みて山中に分入けり。却說彼の老妖大王は洞中に立歸り、默然として不言座し居たり。洞中の小妖們問て曰く、大王生平に那里より歸り給へば懽びの色あり。今日怎生這樣に樂み給はざるぞ。老妖曰く、我れ久しく東土より來る唐僧の肉を喫ふ者は長生を得と聞き、日毎那里に出て待受けたるに、不期も今日他が徒弟八戒と云る者に出で遇ひ、斯くの如く敗陣して逃げ還れり。他が麾下已に這樣の徒弟あり、我唐僧の肉を喫はん事協はず、今是を憂るなりと。當下一個の妖怪前み出でて曰く、我向きに獅駝洞大王の處に在りし故、他等が事を能く知れり。他が麾下に三個の徒弟あり。一の徒弟を孫行者と呼び、三の徒弟は沙和尙といふ。彼の八戒は二徒弟なり。唯怕るべきは彼の孫行者なり。他神通廣大にして能く變化を做す。五百年前大に天宮を鬧せし時も、普天の神他を降す事能はず。大王唯他們を無異に過し給ふに如じ。若し唐僧を拿んとせば、怕くは却て害を引き出し給ふべし。老妖大王是を聞て大いに驚き、彼の猪八戒すら今日の手段あり。若し孫行者に遇ば奈何にして是を防んやと、

愈〻色を失なひける。當下亦一妖前み出て曰く、大王那んぞ這樣に怕れ給ふや、我れ一個の計策を設けて管ず唐僧を拿候はん。老妖曰く、儞怎麼なる計策を用ひて唐僧を拿るや。彼一妖の曰く、且生平に變化に能く熟たる小妖を三個擇び出だし、皆倶に老大王の模樣に變じさせ、三處に埋伏させ置き、一個は孫行者と戰はせ、一個は猪八戒と戰はせ、一個は沙和尚と戰はせ置き、其間に大王空中より手を伸して唐僧を捉給はゞ、囊裡を探つて物を取るが若ならん。是を號て分辨梅花の謀計とは云なり。老妖是を聞て滿心歡喜、頓て變化に熟たる小妖を三個見出し三人の假大王を執做、山路の一邊に出張て唐僧の來るを待ち居たり。三藏那ぞ是を知ん、馬を前て山深く入給ふ處に、忽ち路傍の樹間より一個の妖精現れ出で三藏を捉んとす。八戒是を看て怒つて曰く、儞嚮の手段にも尚懲ずやと、釘鈀を擧て突て蒐る。妖怪は鐵杵を把て是に當り、兩個大いに戰ひながら、麓の方へ下りけり。亦も那邊の樹陰より一個の妖精現はれ出、行者を眼的て打つて懸る。行者心得たりと鐵棒を把て是を支へ、只管に戰ひながら遙か那里へ隔たりけり。亦一個の老妖怪木立の茂みを跳り出で、悟淨を白眼的打つて係る。沙和尚寶杖を把つて相敵し、三個三方に離散て沒命的と戰ひ居たり。眞の老妖大王は半空より是を打探、三藏一個馬上に在すを看定まし、頓て虛空より手を伸し、唐僧を扯抓み飛が如くに洞中に歸りけり。

木母助レ威 征二怪物一

金公施レ法 滅二妖邪一

三個の徒弟們は遂に妖精を赶退け、三方より立歸り來たり、師父を尋れども見え給はず。行者大いに嘆息して曰く、是管ず他が分辨梅花の謀計に中りたるならん。我們快く師父を尋ねて救ふべしと、三個一齊に走りけるに、這方の山の溪挾に果然一座の洞府あり。石門の上に陰霧山折岳連環洞と云へる八個の大字を記したり。行者是を見て是妖精が巢穴なり。師父管ず這の裡に在すべしと云へば、八戒急に釘鈀を擧て力に儘せて突き破りければ、彼石門に一個の大窟窿を開きたり。守門的の小妖此窟より外面を覗き、行者を見て忽ち赶り入つて大王に報ず。老妖大いに驚き、他今爰に追ひ來る怎麼して是を防んや。先鋒の小妖曰く、我亦一個の計策を設けて他を哄欺還すべし。他等若歸り去らば、寛寛と唐僧を蒸熟し受用し給へとて、兼て拿吃ひし人の死骸の中より、似合しき頭を一個尋ね出し、髮を刺落し和尚の頭と做、顏に鮮血を塗汚し盤に盛りて、門口に持行高く嚙つて曰く、大聖爺々怒を止めて、我が告す幹を聞き給へ。我が大王唐師父を帶歸り給ひし處に、洞中の小妖們何の道理も辨へず、互に是を奪ひ合て、儞一口吾一口と遂に唐師父を喰盡し、唯一個の頭を吃餘したり。今大聖に是を歸し奉る。取還りて葬送りを活業給へと、八戒が突破りたる石門の窟の中より、彼の頭を投げ出しければ、行者是を看るよりも、偖は師父已に亡び給ひしかと、聲を放ちて哭きければ、八戒沙僧も一齊に哭倒れ、少時前後も知らざりけるが、八戒涙を著て曰く、長兄我們且師父の頭を埋み供養を做、然

して後哭すべし。行者曰く、儞賢くも說得たり、然も那里にか葬らん。八戒曰く、我れに儘せ給へと
て穢汚をも嫌はず、彼の頭を懷裡に抱き山崖に跑け登り、釘鈀を把て坑を穿ち、師父の頭を埋み上に
一個の塚を築き、幾條の楊柳を折て墳塚の左右に挿し、亦幾塊の印石を拾ひて塚の前に積み、此柳を
權の松柏と做、師父の墳の頂を遮り覆ひ、此印石を權に點心と做て供養を爲べしと、亦雨々と哭居た
り。行者曰く、哭くは却て小事なり。沙僧は爰に在つて墳と行李と白馬を看守よ。我と八戒と今より
洞府を打破り、妖精を拿て屍を裂き師父の讐を報ずべしと、兩個一齊に洞門に跑り到る。守門的の小
妖們是を看て大王に斯と報ず。老妖是を聞て急ぎ許多の小妖們を引領、喊の聲を發て打出けるを、行
者は鐵棒を輪し、八戒は釘鈀を揮ひ些少も猶豫ず、直ちに群妖の中へ跑け入り、四角八面に打て廻る。
許多の小妖們少時は拒み戰ひけれども、兩個が必死の勇猛に何かは以て敵し難く、打殺さるゝ的數を
知らず。遂に四方に散亂して、老妖を上首として去方知らず逃げ散たり。行者八戒尙も洞門に進み
けるに、偖も這石門彌が上に、大石を疊重ね入るべき透間も有ざりければ、行者曰く、偖は他們今戰
ひ在りし間に、斯まで石を積にけん、一且墳の處に歸りて商議を做べきなりと、兩個打ち列れ悟淨が
待ち居る處に立歸りしが、行者亦云やう、他們前門を塞ぎながら、那里へか逃げ散たるは、極めて
後門有て洞中に入たるに疑ひなし。儞們兩個爰に在て少時俟べし。我れ且洞の後邊を打探來らんと、
頓て身を轉じて赶り去山の後邊に輪り過れば、果然一帶の澗水滔々と流れて、澗の岸邊に一座の門有

り。門の一邊に一個の暗溝あり。溝の中より紅の水流れ出たり。行者則ち一個の水鼠と變じ、溝中に
潛り入り、裡の消息を打探けるに、爰に幾個の小妖們人の肉を斬て晒居たり。這故に血流れて紅の水
となれり。行者是を見て彼肉の中には、我が師父も居給ふならんと、漫に涙を催しつゝ、亦身を變じ
て飛蟻となり、中堂に飛び去きければ、彼の老妖床の上に座し默然として在けるが、乍ち一個の小妖
入來り跪下て曰く、大王千萬の懽喜あり必ず憂ひ給ふ事なかれ。老妖曰く、懽喜とは怎麼なる事ぞ。
小妖曰く、我れ當今後門の外の澗の一邊にて、人の哭聲を聞き急に山上に登りて打探看に、唐僧の徒
弟們一個の墳の前に拜して痛哭して居たり。想ふに他們向きの頭を眞の唐僧と思ひ、是を埋て墳を築
きたる者ならん。行者是を聞て思ふやう、今小妖が云ふ處を思へば、嚮のは正しく假首にて師父は還
て這洞中に匿し置きて、未だ吃ざると覺えたり。我且師父を尋ねて見んと、中堂を飛び出で爰那處尋
ね廻れば、爰に一個の小門あり。緊しく關して隱々たり。行者則ち透間より潛り入つて飛び行ば、一
叢の大樹の下に兩個の人を細縛置たり。一個は果的唐僧なり。行者是を看て懽嬉の餘り、忽ち本相を
現はし師父と一聲呼ければ、三藏夢の醒たる如く悟空快く我を救へと曰ふを、行者住めて曰く、師父
聲を潛め給へ身邊に人あり。若し這の消息を漏さば、或は師父を救ひ難からん。三藏曰く、苦しから
ず這の人は此山下の樵夫なり。唯母と娘と他三個住すと云へり。他我より向に妖精に捉られて爰に在
り。儞他をも一齊に救ふべし。行者曰く、師父少時待ち給へ。我再び妖精が動靜を打探來るべしと、

亦飛蟻と變じて中堂に飛びいたり打探ければ、此時許多の小妖輩紛々嚷々として堂上に在り。或は唐僧を煮んと云もあり、亦蒸熟して吃んと云もあり、或は鹽に醃んと云も有りて、萬般と商談最中なり。行者是を聞いて心裡に怒り、我が師父他們と何の仇もなし。怎麽這樣に師父を吃んと爲やと、頓て堂中に飛び入り暗かに一把の毛を拔き、許多の瞌睡虫と變じさせ、妖精輩が面に放ち遣れば、許多の小妖乍ち一齊に睡を催ほし、眼を摺り欠を做し、個々座睡倒れける。行者又一個の瞌睡虫を老妖が臉に放ち遣れば、不多時老妖も亦臥倒れ、鼾を發し前後も知らず熟睡たり。行者急ぎ師父の處に飛び行き、本相を現はし開鎖の法を行ひて小門を排き、三藏の細縛を解きて援け下し、彼の樵夫も俱に繩を脫き下し、悄悄に後門へ導引出で、山を轉りて舊の處に歸りければ、八戒驚いて曰く、沙僧偏看よ師父魂を現はし、迷ひて我們を尋ね來たり給へり。行者曰く、獃子亂說を云ふ事なかれ。師父曾て死し給はず。那ぞ魂を現はし給はん。沙僧急ぎ師父の前に跪下て曰く、師父那里に捉らはれて居給ひしや。長兄怎麽して救ひ來りたるぞ。行者則ち洞中の動靜、亦樵夫が事まで仔細說話ければ、八戒聞きも敢へず立ち上り、釘鈀を取て彼の墳を突崩し、頭を穿り出し微塵に碎きて捨てけり。行者則ち師父を安座おき、我れ亦去きて妖精を拿へ來らんとて、頓て亦後門に轉り到り、直ちに中堂に入けるに、妖怪一個も眼覺し的なく、皆な熟睡して居たりけり。行者一條の繩を要め、老妖を細縛鐵棒に扯き掛けて肩に負て石崖の下に歸りける。八戒見より飛び蒐り散々に突き殺す。老妖纔に目は開けども、手足を綁れ身を搖かす事能はず、遂に八戒に殺されて、一個の豹子精と成にけり。行者亦彼の樵夫に分付て、數束の柴を取り來らせ、八戒に命じて後門を埋み塞ぎ、行者身を搖揮て瞌睡虫を毛に返し、身の裡に收め火を放つて柴を焚き立れば、一齊に燃昇り、洞中の小妖們睡を醒し脫れ出んとするに、前門は石にて埋み有り、後門は猛火盛んに燃え立ち、一個も脫るゝ的なく不殘叫びて死たりける。三藏は再三徒弟們が苦辛を謝し、馬に乘て出で給へば、彼樵夫前行し且我が矮屋に導引入れ、老母を呼んで這の故由を話談、此四位の老佛菩薩は我が爲の再生の父なりと云ければ、老嫗も娘兒も立ち出て個々四衆を禮拜し、是より西天極界まで千里の遠きに過す、少時茆舍に足を安歇て往き給ふべしと懇懃に介抱し、素飯を安排て管待然して後四衆を大路に開路し、五六十里送り來り泪を押へて別れ去りぬ。

四編卷之四

鳳仙郡冒レ天致レ旱
孫大聖勸レ善施レ霖

斯て三藏師徒は亦西に向ひて行く事數日にして、爰に一座の城地あり。城中の光景忌だ冷落して、前面の房の簷の下に許多冠帶の人集り居て、這徒弟們が模樣を見て個々驚き、抑是は妖精なるか人なるかと太怪氣に眺居たり。三藏則ち進み倚て衆人に對ひ、貧道は東土大唐王の旨を奉じ、大雷音寺に至り佛を拜し經を求むるの僧なり。貴方の開路を不知列公に無禮を犯したり。萬望は罪を免恕給へと云ひければ、一個の官人身を躬て曰く、此處は天竺の外國鳳仙郡と號す處なり。近來連年亢旱に因て五穀不實、郡侯爰に榜文を出して明僧を得て、雨を祈らしめんとし給ふ。我們は其榜札を保守官人にて侍へば、敢て長老を咎るに非ず。三藏是を聞て一邊を顧給へば、一張の榜札あり。其文に曰く、

大天竺國鳳仙郡郡侯上官　爲レ榜。聘二明師一招二求大法事一。茲因二連年亢旱一田畝無レ收。富室聊以偷レ生。窮民難二以活一命。斗粟百金之價束薪五兩之資十歲女易二米三升一。五歲男隨レ人帶去。城中懼レ法典レ衣當レ物以存レ身。鄉下欺レ公打劫喫レ人而顧レ命。爲此出二給榜文一。仰望十方賢哲祈レ雨救レ民。願以二千金一奉謝。決不二虛言一須二至レ榜者一。

三藏行者を顧て曰く、儞常に能く雨を祈る。今此處の爲に一場の雨を要め、民を救ひ國安んぜば豈萬善の事ならずや。行者答て曰く、雨を喚風を招くの如きは那ぞ難き事か有ん。衆官行者が言を聞き大いに懽喜、人を馳て郡侯に這由を報じければ、郡侯上官是を聞て滿心歡び、急ぎ衣冠を整へ街上に出で來り、三藏四衆を禮拜し親自開路して四個を府中に導引往、正堂に請じ入れ衆官大家禮畢りて後、郡侯三藏に對ひて曰く、下官這郡を司どりてより以來、一連三載の乾荒に遇ひ、草木枯盡し五穀實ず、大小の人民盡く餓死に到らんとす。僥倖に今神僧爰に來り給ふ。若一場の雨を賜ひ、衆民を救ひ給はゞ、千金を以て德に報い奉らん。三藏行者を指て答て曰く、我大徒弟孫悟空常に能く雨を要む。萬望は他に央給へ。行者笑て曰く、若し千金を以て報はんと有らば、却て半點の雨も得べからず。但功を積德を累ば自然と甘雨降るべし。我今一場の雨を要めて儞に送り侍はんと、頓て堂下に立て眞言を念動ければ、即時東方より一朶の烏雲現はれ、漸々に落し來り雲頭に聲有て曰く、東海龍王敖廣來れり。今孫大聖老龍を呼び給ふ何の命令有るや。行者曰く、別に甚き事に非ず。此處鳳仙郡の地連年の旱荒に依て五穀實ず。我今龍王を央み雨を施し民を濟ん爲なり。龍王の曰く、大聖の央み止事なしと雖も、我等原玉帝の命を請ざれば、漫りに行雨神將を動す事能はず。大聖已に民を拔濟の心あ

らば、當下より快く天宮に到りて、此旨を准奏し給ひ、既に玉帝の命あらば、老龍卽時に水官行雨神將を呼で一道の雨を降し侍はん。行者是を聞て然らば爾且歸り去れ、我玉帝に奏聞べしと、且龍王を歸らしめ、直ちに雲に打ち跨て空中に飛び去りけり。郡侯衆官是を見て驚き、十分恭敬を加へ急ぎ滿城に令を傳へ、家々に香を焚せ天を向ひて拜せしめ、俄に素莚を安排して、三藏們三個を管待けり。斯て行者は雲を縱ちて一直に西天門に到り、護國天王に見えて是を央み、鳳仙郡のために雨を要めたき由を奏しければ、玉帝是を聞宣て、則ち行者を殿前に宣せ給ひ、爾今雨を要めん事を願ふ。三年前十二月二十五日、朕出行して、萬天を浮遊し、三界を監觀と思ふ時、彼鳳仙郡の郡侯齋天の供物を推倒し、狗に喂せ穢言を出して詈り罪を犯したり。這故に他に三等の罪を與へ、三事を立て今披香殿の裡に有り。若し三事已に滿ば卽時に雨を與ふべし。三事未だ終らずんば、爾も速に立ち去るべしと曰ひて、頓て四大天師に命じ給ひ、行者を領て披香殿に入れて彼の三事を見せしめ給ふ。行者急ぎ四大天師に從ひ、披香殿裡に至れば、殿內に一座の米山十丈計りの高さ有り。亦一座の麪山二十丈の高さあり。一隻の小鷄ありて彼の米の山を啄み、亦一隻の小狗在りて麪の山を吃ひ居り。亦一邊に一座の鐵架あり。架の上に一盞の燈光を點し、其上に長さ一尺四五寸、粗さ指程の金の鎖を掛て燈火の上に垂たり。行者何の故と云ふ事を知らず、四大天師に是を問へば、天師の曰く、那郡侯上天に罪を犯したる科に因て、玉帝此三の事を立て給ひ、鷄米の山を啄盡し、狗麪の山を餂盡し、燈火金鎖を燒斷たる時、始めて彼地に雨を降すべしとの旨なり。行者是を聞て呆鑌呆、此金鎖何の時にか燒斷ん。此米麪何の世にか吃盡さんやと滿面憂ひの色を含み、鬱々として殿を退んとす。天師笑て曰く、大聖憂ひ給ふ事なかれ。這事唯一念の善慈を做ば卽時赦すべし。大聖今より下界に下り、他を諫めて一念の善慈を行はせ給へ。卽時吾們米山麪山を推倒し、金鎖も俱に燒斷て三事滿れりと奏聞せば、雨自然降るべし。行者是を聞て大いに懽喜、遂に天師に別れを告て下界に下り、鳳仙郡の城中に飛び歸り、郡侯に見え大いに喝て曰く、爾三年前十二月二十五日、齋天の供物を推倒し怎生狗に喂せたるや。這故に天地を犯し衆民を苦しましむ。爾實を以て懺悔すべし。郡侯是を聞て大いに驚き拜伏して曰く、三年前十二月二十五日、我妻の不賢に因て惡言を出して爭ひ詈り、一時の怒に堪ず實に其事を做たる覺えあり。不期も今上天より罪せらるゝ事斯の如し。萬望ば老師是を救ひ給へ。行者則ち玉帝三事を立て給ひし事、米山の雞、麪山の狗、燈上の金鎖の事など仔細說語り、爾若心を歸し善に向ひ、念佛看經して佛天に歸依し、一箇の善慈を行なば、卽時に罪を免すべし。若し心を改むる事能はざれば、久しからずして一命を亡ふべし。郡侯再拜して曰く、我今より急に其事を行ふべしとて、夫より本處の衆僧道人們を殘りなく請て、三藏を首と做て大いに道場を開き、倉中の金銀を投げうちて小民に施し、城中城外に令を傳へ、大小の人家都て香を焚て念佛せしめ、郡侯首め衆官等親自香を薰じ、天地を拜し一片の眞心到る處に充滿たり。斯て未だ三日ならざるに、忽ち一天烏雲を發し、電轟き電閃き大

雨淙々として降り、池塘井溝盡く綠波を現はし、五栽草木勃然として色を生じければ、郡中の官民百姓女童に到るまで、手を拍て皆舞躍り萬歲を諷ひ、歡喜の聲天に振ひ地を搖す。郡侯懽喜に不堪都て國中の萬民を城裡に入れしめ、唐僧四衆を拜せしめ、大いに筵宴を排いて三藏師徒を管待けり。三藏は佛を拜せん事を急ぎ、翌鳥は袖を別つて立ち出で給ふ。郡侯郡官等は員人をして鼓樂を奏し、旌幢を飜し三十餘里を送りて別れけり。然して後郡侯は郡中に一座の寺院を建立し、甘霖普濟寺と號け師徒四個の肖像を造り、祠堂の裡に安置し、連年四時の祭祠を做永世香火を傳へけり。

禪到玉華施法會
心猿木土授門人

話說唐僧は喜々歡々として郡侯に別れ、馬を向前て數里の路を過り、亦一座の城地に到り、忽ち一個の老者に出で遇ふ。三藏急ぎ馬を下り、當方は何と云る地方ぞと問ひ給へば、老者答て曰、此土地は天竺國の下郡玉華州と呼べり。城中の主王は則ち天竺皇帝の宗室なり。此玉華王は忒だ賢德の人なり。僧道を尊敬し黎民を愛し給ふ。老禪師城裡に入り給はゞ、管ず尊敬を受け給はん。三藏是を聞て老者に謝し別れ、徒弟輩を帶し城中に上前入り客館に到り、三個の徒弟を館中に住め置き、關文を把て王府に到り引禮官に見え、東土より西天大雷音寺に至りて經を求むるの由緣を仔細に語り、關文を換ん事を央みければ、引禮官此由を聞て朝に入て斯と報ず。當城の主王是を聞て急に旨を傳へて唐僧を宣、殿上に座を賜ひ禮を行ひ、關文に花字を押ひ畢り、然して後問て曰く、國師長老大唐より爰に到る、幾許の年月を經給ひたるや。三藏答て曰く、貧僧路に在る事已に久し。十四遍の寒暑を經たり。玉華王笑て曰く、然らば十四年なり。想ふに途中に躭閣有りし成ん。三藏曰く、途中の事一言に盡し難し、千萬の艱難を受け纔に今這上郡に到れり。玉華王十分懽喜、已に遠方より來り給ふに、一個の高徒も在らざるや。三藏曰く、貧僧三個の小徒弟あり。客館中に住め置き敢て府中へ帶來らず。玉華王是を聞て急ぎ當殿官を呼び、唐僧の徒弟們を宣長老と同じく齋を進めよと命じ給ひければ、當殿官急ぎ客館に到り、行者輩三個を導引て殿前に歸り來る。玉華王は他們が異形なる像を見て大いに驚き、色を失ひ立んと爲を、三藏上前出住めて曰く、千歲爺々怕れ給ふ事なかれ。他們貌は醜しと雖も心は却て忠良なり。都て山野の出生なれば禮を行ふ事を不會、萬望は不敬を赦し給へ。是を聞て主王纔に心を定め、頓て典膳官を呼びて四衆を暴紗亭に送りて、齋を賜ひて萬般と管待けり。元來這玉華王に三個の王子あり。皆俱に武藝を好み、大王子は一條の齋眉棍を使ひ、二王子は一杷の九齒釘鈀を使ひ、三王子は一根の烏油黑棒を使ひけるが、今日異形なる和尙們大雷音寺に到り、經を求むる由にて此に來り、父王是を見て驚き怕れ給ひし事を聞て、他們極めて妖精の人に粧て來れる成るべし。我們他を捉へて虛實を糺し、若し妖精ならば打殺さんと、個々兵器を扯提て暴紗亭に跑來り、師徒四衆を見て呼はつて曰く、儞們は人か妖精か實を以て來歷を語り、我輩が手を動すを脫れよと罵りければ、

三藏飯碗を去下身を躬て答て曰く、貧僧は唐朝より來れる者にて實に妖精にあらず。大王子の曰く、儞則ち人に似たり。彼三個は極めて妖精に疑ひあらじ。行者沙僧頭を擧て曰く、我輩都て貌は妖精に似たりと雖も、心は却て良善なり。儞三個何人なれば這樣に吾輩を詈るや。典膳官一邊に在て是を看て曰く、長老惱み給ふ事なかれ。是這三位は卽ち我國王の小殿下なり。八戒は只管齋を食して在りけるが、此時漸々吃畢り這方を顧て曰く、小殿下個々兵器を把給ふは、吾們と手段を爭はんと思ひ給ふにやと云へば、二王子是を聞て則ち釘鈀を打ち振て勢ひを見せ給へば、八戒嘻々と笑ひ出し、偖は小殿下も釘鈀を使ひ給ふ。我も亦同じき釘鈀を持り。今儞に見せ侍はんと腰より小さき釘鈀を取り出し、一振りふれば忽ちに大太となり、金光爛漫として萬道を輝し瑞氣千條にあり。二王子大いに怕れを做不期後邊へ退きけり。行者も亦大王子が齋眉棍を拿たるを見て、耳の裡より金箍棒を取出し、一振り打ち搖て椀ほどの粗細、一丈二三尺の長さと做し、地上に突立て我這一棍小殿下に献進らんと云ひければ、大王子卽ち跑り倚て是を拿んと爲に、分毫も動す事能はず。大王子且つ驚き且つ惱れ臉を紅染て退きけり。三王子は原來揷起莽性なれば、是を看て憤怒に堪へず、烏油棒を廻して沙僧を打んとす。沙僧手を以て打ち開き、亦降妖杖を取り出せば、忽ち瑞光艶々として滿城を照し、霞光紛々として亭中を輝かす。衆位の典膳官是を看て個々呆呆掙掙て詞なし。三個の王子輩も是を看て遂に心を歸し、一齊に拜して曰く、我等凡眼にして神師の降臨を識す、不敬の罪を赦し給へ。萬望は一場の武藝を使

悟空ハ三個ノ
空間ニ在て
武藝を展る

ひて我輩に好拜せさせ給へ。行者是を聞て就ち鐵棒を拿將て、這處窄狹して手を展るに好しからず。空中に在て一場の武藝を見せ候はんと、忽ち五色の祥雲を縱ち、吻唷と一聲乍ちに半空に飛び昇り、金箍棒を打ち振て一上一下右に廻り左に轉じ、黃龍轉身の勢ひを使ひ、初めは人與棒と錦上に花を添るが如く、後には人の影を見ず、唯一天棒のみ働く若くなり。八戒沙僧下に在りて少時望み居たりけるが、堪へかねて兩個とも亦空中に飛び昇り、釘鈀を使ひ寶杖を輪し、上三下四左五右六前七後八丹鳳朝陽餓虎撲食の勢ひを做し、滿天中に瑞氣氤氳と飜り、金光縹緲と靉靆て諸天神兵一時に武を演るかと疑ふ。此時王府の主王を首め、大小の官員滿城中の人民們、都て遙に虛空を拜し大家奇異の思ひを做ぬ。悟空們三個漸多時有て空中より飛び下り、俱に師父を拜して座しければ、三個の王子等急ぎ宮裡に跑歸り、父王の前に跪下、我們首め他們三個を妖精と疑ひしに、却つて是寔の神僧にて我們忒だ紅顏たり。今より他們を師と做て武藝を學ばん事を要む。萬望は父王是を免し給へ。玉華王是を聞て曰く、儞們既に他を師と爲事を要めば、我親自往て是を迎へ央むべしと、遂に皇宮を立ち出で、鳳車に座せず微蓋を張す、父子四個步行して暴沙亭に來り、三藏四衆を大座に正し老王座を辭て曰く、唐老師父に孤一事の要めあり。三位の高徒是を容給はんや。三藏答拜して曰く、千歲の尊命小徒等何の異議か在ん、速に是を命じ給へ。玉華王曰く、朕肉眼凡胎にして向には許多の不敬を做たり。當下三位の高徒空中に在て旋展を現はし給ふを見て、初て仙佛の臨凡を知りぬ。孤三個の犬子在り。個々武藝を

學ばん事を要む。萬望は老師開天地の心傳を小兒們に度給はらば、傾城の資を以て謝し奉らん。行者笑て曰く、我們出家人快く幾個の徒弟に傳へん事を要む。小殿下既に這心あらば、分毫も財利の事を云ふべからず。唯眞を以て學ば足り。玉華王是を聞て十分懽喜、四衆を亭中に欵留せしめ、翌鳥三個の王子悟空輩三個を拜し師弟の禮を做、他等が兵器を要めて看るに、原來他輩が兵器は造化自然の寶貝なれば、凡體の力にて一毫も動搖事能はず。行者是を見て且儞等に神力を授けて後、武藝を敎示べしと、三個の王子を一個の靜室に座せしめ、眼を瞑せ眞言を念て仙氣を腹中に噴入れば、三個忽ち精神俄に百倍し進退常と大いに替れり。三個の王子大いに懽喜、頓て立出て彼兵器を取擧見に、心の儘に運し用ふ。然ども此兵器は悟空們隨身の寶貝といひ、且斤數重くして些少手に餘る處あれば、此三個の兵器を式樣と做個々斤數を減じて造らしむるに如じと、俄に許多の鐵匠を宣入て、王府內院に一箇の蓬殿を構へ、大王子は悟空が鐵棒を式樣とし、二王子は八戒が釘鈀を模し、三王子は悟淨が寶杖を鑄ける。鐵匠は王子の命を受て、蓬殿の裡に悟空們が鐵棒、釘鈀、寶杖を住置、是を見て晝夜精神を籠て鑄造けり。却說此玉華城より北七十里に豹頭山と云る山あり。山中に虎口洞と號る處あり。這虎口洞中に三個の妖怪住り。這妖精一夜洞門に出て見るに、玉華城の方に當り一道の金光赫然と發り、天を遮り地を罩ふ。妖怪是を見て怪しみ雲に駕て空中を飛行き、玉華城に到り打探看に、一箇の蓬殿の裡に三般の兵器あり。一箇は鐵棒、一箇は釘鈀、一箇は寶杖、這三般の兵器金光を縱つにぞ

有りける。妖精是を見て大いに驚き且つ喜び、是何人の寶貝なるを不知。然れども當今我眼に中りたるは、我に緣有る寶貝なりとて、遂に三般の兵器を奪ひ取り、又雲に打ち駕て豹頭山に歸りけり。

黃獅精虛設釘鈀會
金木土計鬧豹頭山

却說幾個の鐵匠の輩、連日の苦辛に因て前後も覺ず熟睡し、天明に及で起出で、蓬下に入て看ば、彼三般の兵器を見ず。個々驚き慌得斯と王子に報じければ、三個の王子も亦驚き出で來りて、彼處爰尋ぬれども亦更に有る事なし。萬一師父達の收取給ふには有らずやと、急ぎ人を遣て問せければ、悟空們三個も同じく驚き、諸俱に出で來れば、父王も是を聞て急ぎ立ち出で給ひ、都て皆蓬下に集りて曰く、原來凡人の能く動すべき兵器にあらず。殊に這內院外人の入り來る處に有ず。怎麼夜中に失ひたるならんと、區々に議論して果ず。行者少時沈吟して曰く、偖は這近き一邊に妖怪の住む處ありと覺えたり。殿下此議怎何。玉華王曰く、神師の問ひ甚だ妙なり。原此洲城の北に豹頭山と云へる山あり。山中に虎口洞あり。洞中に一個の神仙、亦虎狼妖怪有りと云ひ傳へたり。孤是を訪ざれば未だ何者なる事を知ず。行者曰く、然らば彼兵器は其妖怪が偸たるに疑ひなし。我今去て其消息を打探來るべしと、云ふかと思へば忽ちに半空に飛び上り、形影は見ず成りにけり。斯て行者は北に向ひて七十里餘り飛び行き、一座の山頭に住り四方を望居る處に、忽ち山の後邊より兩個の狼頭妖怪たち出て、說話

をしつゝ跑りける。行者是を看て急に身を胡蝶と變じ、翩々翩々と飛び行き、一個の妖精が頭に住り、他們が行くに從ひけるに、彼妖精只管說話して曰く、昨夜大王の得給ひし三件の兵器は、世間無類の寶貝なり。明旦釘鈀會を做給ふなれば、我輩も管ず受用あらん。我輩今這二十兩の銀子を兩三兩分ち取り、且幾杯の酒を買ひ、また一件の衣服を買ひて、我們が得と做、其後猪羊を買ひ、花帳を作りて歸るべしと、列笑大路を上りて急ぎける。行者要子を聽得し、偖は洞中の妖精が偸たるに極りたりたりと心裡暗に惟喜、今這兩個の妖精を打ち殺さんと欲要共、鐵棒を偸れたれば手に物なし。遂に飛び下りて本相を現はし、妖精に向ひて一口の唾を噴下、定身の眞言を念ければ、兩個の妖精身を搖す事能はず、手脚を直定て站住けり。行者則ち他を扯倒し、衣服を揭げ看ば、果的二十兩の銀子あり。亦腰に粉き牌兒を掛けたり。一個は刁鑽古怪、一個は古怪刁鑽と寫着たり。行者遂に銀子と牌兒とを奪ひ取り、急ぎ雲に駕て玉華洲に飛び歸り王府に到り、主老王亦三個の王子に見え、動靜を仔細語り、今八戒沙僧を同伴、再度那里に到り寶貝を拿返し來るべし。附ては許多の猪羊を買ひ要めたしと告ければ、玉華王是を聞て急ぎ下官に命じて、幾件の猪羊を買ひ得め行者に遞與ければ、行者是を手に把て八戒沙僧と諸俱に、再び雲に打ち乘りて空中に飛び去りけり。斯て三個北に向ひ豹頭山に飛び行き、轉に定身に做置ける兩個の妖怪の處に到り、八戒に這妖怪が像を看せ、則ち刁鑽古怪に變じさせ、行者は古怪刁鑽に變じ、彼牌兒を腰に着、沙僧は商客に變じさせ、山の後邊に到り凹なる處に出でけるに、亦一個の青臉紅毛の小妖手に書匣を携へ、東南に向ひて出で來り、行者を看て古怪刁鑽歸りたるか、儞幾口の猪羊を買ひ來りたるや。行者曰く、猪羊合せて十五口あり儞は那里に去や。小妖曰く、我竹節山に行て老大王を請て明日の釘鈀會に赴かしめんず。行者曰く、儞其の請帖を我に看よと、扯拿て書匣を開きて、看ば一張の紙に寫着て曰く、

明晨敬治二餚酌慶釘鈀嘉會一屈二尊車從一過山一叙幸勿レ外至感。

右啓二

祖翁九靈元聖老大人尊前一　門下孫黃獅頓首百拜

行者看畢て仍ち小妖に遞與ければ、小妖急ぎ受け把て竹節山に赴きけり。行者兩個に謂て曰く、黃獅は管ず金毛の獅なるべし。彼九靈元聖とは何者ならんと語りつゝ、只管大路を行く處に、不多時一箇の洞門を看、是則ち虎口洞なり。大小の小妖們刁鑽兩個が歸り來るを見て門を排く。行者輩三個前み入れば、亦一個の小妖是れを見て大王に斯と報ずれば、妖王出で來り刁鑽兩個歸りたるか、儞多少の猪羊を要め來りしぞ。亦那處に帶來りしは何的なるぞ。行者曰く、猪八口羊七口、猪の價十六兩羊の銀九兩なり。向の銀子二十兩を遞與則ち五兩の不足あり。這個は是れ則ち猪羊を賣りたる客人なり。彼銀子を乞はん爲、且つ大王の得給ひし寶貝を拜看のために來りたり。妖王是を聞て罵て曰く、彼寶貝は玉華州城中より得たる兵器なれば、若し這商客彼城中に到り人に語らば惡かりなん。儞無要の事

を語りたる。行者曰く、這商客原他郷の個決して彼城裡に到る事なし。大王且他を許して裏に入れしめ、銀子と飯を與へて歸し給へ。妖王曰く、既に斯の如くんば酒飯を與へて歸らせよと、遂に三個を堂中に入れしめけり。悟空們三個堂上に登りて兩邊を打控見れば、一個の廳上に彼釘鈀を置き、鐵棒と寶杖を兩邊に倚掛たり。八戒是を見るより直ちに本相を現はし、跑入て釘鈀を取る。爰に及んで行者沙僧も本相を現はし、彼廳上に飛び上り鐵棒と寶杖を推把展、一齊に外面に討て出る。妖王是を看て大いに驚き、儞們是甚麽的なれば、我寶貝を偷むやと罵しりければ、行者怒て曰く、儞賊毛團我輩を知らざるや。我は是東土の聖僧唐三藏の徒弟輩なり。玉華州の三個の王子我們を師として武藝を學び、我們が寶貝を模樣と做、他輩が兵器を造鑄しめんと、內院蓬殿に放在たるを、儞夜陰に偷把却て我們を虛頭騙と云ふや。儞今我們が兵器を試看と、三個一齊に打て掛れば、妖王是を看て四明鏟を打ち振て跳り出で、少時支へ戰ひけれども、那ぞ三個に敵すべけんや、遂に力衰へ東南に向ひて風を發して逃去りけり。三個更に是を追ず洞中を跑廻り、小的の妖精們を盡く打ち殺し、火を放て洞を燒拂ひ、遂に三個雲に打ち乘り玉華城に飛び歸り、三件の兵器を三個の王子に遞與ければ、王子の輩を上首として、衆部の官員們大いに懽喜、虎口洞の光景を逐件に問ひ聞き、悟空們三個が神通を稱しけり。然れども玉華王一個大いに憂ひの色有て曰く、彼妖精逃去て今往方を知ず、怕らくは再般來つて讐を做んか。行者是を聞て曰く、殿下管ず愁ひ給ふ事勿れ、我明旦他們を降伏し候はん。玉華

王是を聞て心安堵、筵宴を開いて只管に管待、師徒四個遂に其日は園中に安歇けり。却說那妖王は東南を指て飛去り、其夜遂に竹節山九曲盤垣洞に到り、洞中に跑入て祖翁老妖に見え、昨宵玉華州にて三般の兵器を拿返り、今日亦東土唐僧の徒弟と云る輩の爲に、大いに洞中を鬧せ今敗北して逃來れる由を語り、萬望は祖翁援兵を請ひて、讐を報せん事を要め侍ふと云ひければ、老妖是を聞て曰く、偖は儞他輩が事を知ず錯惹て他を犯したり。彼輩們は是原尋常の個にあらず、嘴長く耳大いなる的は猪八戒、晦氣色臉なる的は沙悟淨なり、這兩個は尙苦しからず、其毛臉雷公の若き和尙は、名を孫悟空と呼び神通廣大なる事太甚し。是に仇を報せんと思はゞ、儞が手段に行くべからず。我親自去て他們を拿へ儞が恨を齋しめんと、頓て猛獅、雪獅、狻猊獅、白澤獅、伏狸獅、獛象獅の輩其外諸孫を不殘引き領し、個々兵器を挈提て一陣の狂風を發し、彼黃獅精を前に進め徑に豹頭山に到り見れば、洞府洞門皆一埋の灰燼と變じ、大小の群妖們盡く地上に橫倒て一個も息有的なし。妖王是を看て大いに驚き且つ怒り、他們怎生這般なる惡を作や。我今洞府を燒れ家子們を殺され、何れの處に身を倚んと涙を流して悲哭ければ、老妖是を諫勸て曰く、既に爰に到りて哭泣とも益なし。今より徑に玉華城に推倚、唐僧も國王も一齊に拿得て儞が仇を雪むべしと、亦一齊に引き領て玉華州にぞ飛び去りける。斯て翌旦玉華城裡の人大家起き出て看る處に、忽ち一群の妖精沙を飛し石を降し、城頭に向ひ推倚來る。國王衆官を首め城裡の老若男女の輩是を看て大いに驚き、打ち戰兢てぞ居たりける。行者

打ち笑ひ大家怕るゝ事なかれ、是彼黄獅精が祖翁九霊元聖を請て、昨日の仇を報はんとして來れるなり。我輩三個馳せ向ひて他們を拿得來るべしと、八戒悟淨を引領て、忽ち雲に飛び跨て城外に走り出て、半空に有て待ち受けたり。

四編卷之五

師獅授受同歸一
盗道纏禪靜二九靈

不多時一群の妖精城外に倚來れば、八戒當頭に上前出て罵て曰く、寶貝を偸る賊怪、這般に幾個の毛團と同く爰に來るは何幹ぞや。黄獅精牙を咬で怒て曰く、向日我一個儞們三個に敵し難く、儞們に勝を讓て退きしは儞們が僥倖なり。然るに儞們我洞府を燒我眷屬を殺し、十分の狠惡を做。此恨大海より深し。我今儞們を饒んやと、忽ち四明鏟を擧て跑り羅り、八戒を斬らんとす。八戒釘鈀を拿展て是に敵し、兩個陣前に在て大に戰ふ。彼猛獅、雪獅、狻猊獅們の六妖の輩、是を看て一齊に兵器を輪して跑來る。行者沙僧も鐵棒を振ひ寶杖を閃し、彼六妖に相敵し、七個の妖精三個の和尚力量を盡し勇を奮ひ沒命的戰ひけり。彼老妖は陣後に在て、他們が戰ひの透間を打探、遂に烏雲に打乘て城裡に飛入けるが、這老妖原九箇の頭有りけるが、唐僧と玉華王父子都て五個を五個の口に扯唧へ、城外に飛出、亦八戒が後身より一個の口を開き、他が襟を唧住め、餘りの口にて、大音に孫兒來れ、我は且洞中に歸るなりと云捨て、東南を指て飛去けり。行者是を看て偖は他が計策に中りけるよとて、急に

身外身の法を使ひ、一把の毛を拔把て數百の小行者と變じさせ、妖精們を取圍み遂に黃獅精を打殺し、六個の妖獅們を生捉て城中に牽入ければ、衆位の文武の官人、一齊に行者沙僧を拜して曰く、殿下父子双に唐僧都て皆妖精に拿得られ給ふ。萬望は神師快く是を救ひ給へ。行者曰く、列位官人憂給ふ事なかれ。我們今亦他が六個の妖精を捉得て質とす、他管ず殿下を傷事なし。明朝我們那里に到り、老大妖を拿得殿下父子を救ふべしと、且六個の妖獅們を鐵牢に推籠置けり。翌旦疾起いで行者沙僧と俱に雲に打駕、少時の間に竹節山に到り、雲を下りて尋行に、一個の小妖山下に在て兩個を看て大に驚き、後邊をも見ずして逃行ける。行者沙僧急ぎ後に着て追行けるに、直に一座の洞府に到りける。洞門上に萬靈竹節山九曲盤垣洞と云る十個の大字を彫住たり。小妖急に門內に逃入て、老妖に斯と報じければ、老妖問て曰く、我六個の兒孫們は來らざるや。小妖曰く、唯兩個の和尙のみ來れり。大王輩は見え給はず。老妖王是を聞て淚を灑の如く流し、偖は我兒孫們は都て他に捉得られたるなり。這恨怎生報せざらんやと、遂に洞門に跳り出る。行者沙僧是を看て一齊に打て罹る。老妖却て戰ふ事をせず、左右八個の頭を差伸し、大いなる口を張開き、難なく行者沙僧を嘲へ住め洞裡に飛歸り、許多の小妖們に命じ繩を取て兩個を堅く細縛させ、老妖頓て柳棍を取て、行者が頭を大太に打けれども、行者一向に疼む景色もなくて居たりけるにぞ、老妖驚き這猴が頭の堅き事抑怎麼なる事ならん。我且今日は捨置き明旦慢慢懲治すべしとて、兩三個の小妖們に行者們兩個を保守せおき、老妖は其身の臥房錦雲窩に入て安歇けり。其夜行者亦遁法の咒を念へ、身を些小なして繩を脫出て、衆人を扶け出さんと爲る處に、小妖們是を看着大いに叫びて逃迷ふ。行者鐵棒を把て走り廻りて打殺す。此物音に驚きて老妖臥房の裡より飛出ける。行者急に身を縱つて洞外に脫れ出、空中に飛昇りける時、忽ち看六甲揭帝們の神將一個の土地神を扯帶て雲頭に在つて行者を迎へて曰く、大聖是は竹節山の土地神なり。彼妖精が來歷を知らしめん爲に、今呼來つて大聖を拜せしむ。行者大いに懽喜則ち土地神に向ひ、妖精が來歷を尋ねければ、土地神答て曰く、彼妖精は這三年前より竹節山に來りぬ。彼九曲盤垣洞は原六個の妖獅の住處なれども、六獅却て老妖を拜して祖翁とし洞中の主と倣り。他は則ち九頭獅子の精名は九靈元聖と號す。若し他を降さんと思ひ給はゞ、東極妙巖宮に到り他が主公を請來らば、纔に降伏すべし。他の人は能く是を降す事能ふべからず。行者是を聞て曰く、東極妙巖宮は太乙救苦天尊の住する處なり。寔に座下に九頭獅在りしを看たり。偖は彼獅獸降つて斯る妖怪と成りしや。我快く去て天尊に是を告訴奉つらんと、且土地神を歸らしめ、乍ち觔斗雲を縱つて連夜に飛去、寅の刻計りに東天門に到り、直に妙巖宮の門に入り仙童を央み、具に事の動搖を通じ、天尊に見え奉つらん事を告しけり。仙童這由を報じければ、天尊則ち行者を宣入給ひ、蓮座を下りて相見え給ふ。行者謹しんで九頭獅下界に降りて妖怪と成り、唐僧及び玉華王父子を捉得て困苦しむる由を訴ければ、天尊是を聞頓て仙將に命じて獅房に往しめて、彼獅を尋ね給ふに、九頭獅果して房に在らず、獅奴は却て

前後も知らず睡り居たり。仙將是を看て且獅奴を打起し扯立て歸り、天尊の前に引居、獅は那里にか走りて房に在らず、却て獅奴は睡り居たる由を報じければ、獅奴は只管泪を流し、一命を饒し給へ饒給へと叫びけり。天尊曰く、今大聖爰に在るを以て我且儞を打ず。儞何故に獅を走らしめ、亦何の故に然樣に睡り居たるぞ。獅奴大に驚いて曰く、我前日甘露殿に在りて一瓶の酒を偸みて吃し、不期沈醉を做、獅房の鎖を忘却て熟睡致し候ひき。偖は其間に彼獅走り去りたると覺侍ふ。萬望は我過を饒し給へ。天尊曰く、彼酒は太上老君より贈り賜はりし處の名酒にして、輪廻瓊液と喚做。是を吃する時は三日醉醒ず。天宮の一日は下界の一年なれば、彼獅下界に在事已に三年成るべし。我今大聖と俱に下界竹節山に降り、他を降伏すべしと曰ひて、夫より彼獅奴を領跟へ、行者と俱に東天門を立出て、頓て下界に降り給ふ。不多時竹節山頭に到り、天尊祥雲を住め給へば、行者曰く、我且他を僞引出し來るべしと、急ぎ鐵棒を打振て盤垣洞門に到り、忽ち門を打破り潑怪的快く師父を返せ王子を還せと呼はりけり。老妖是を聞て大いに怒り、門外に跑り出、忽ち口を張り開き行者を喇んと爲處に、天尊聲を厲まし、元聖兒我來れるを知らずやと呼はり給へば、老妖是を看て驚き忽ち四足を屈め、地上に伏て立上らず。其時獅奴拳を揚て跑り罹り、這畜生怎麽して走り去り、我に罪を受けさしむるやと、他が額を連て打、頓て錦韉を他が背上に打掩ければ、天尊閃りと飛跨給ひ、亦彩雲を飜し大聖に別れを告げ、妙巖宮に還り去り給ふ。行者空に向ひて禮拜し頓て洞中に跑り入り、玉華王父子を首として三藏悟淨八戒們が細縛を脫助け出しければ、八戒沙僧駈廻つて小妖們を盡く打殺し、忽ち一把の火を放つて盤垣洞を燒盡し、八戒沙僧は二王子父子を背負、行者は師父を扶けて個々神通を使ひ、直に玉華州に飛歸り城裡に下りければ、城中大小の文武の官人們都て皆出迎へて禮拜し、且歡喜の筵宴を開き、皆萬歲を諷ひ唐僧師徒們を暴沙亭に安歇けり。次烏に至りて玉華王旨を傳へて盡く大小の官員を宣集め、大いに素筵を列ね、師徒四衆を上座に請じ、君臣個々恩を謝し萬般と管待けり。斯て行者が勸進に隨ひ、六個の獅の皮を剝、彼黃獅も俱に七個の肉を斬分て、王府の官員より城中の百姓に到るまで、盡く賦り與へければ、城中衆位の官士百姓們も其厚德を感せざるは無かりけり。是より三個の王子、悟空輩三個の兵器を借りて模樣と做、鐵匠を逼迫て鑄せける程に、幾日を經て三般の兵器全く成就しければ、行者頓て大王子に棒の術を傳へ、八戒二王子に釘鈀の術を傳へ、沙僧三王子に寶杖の術を傳へける。三個の王子一個には信心堅く、二個には行者が神力を受け、不日に個々精就せるを看て、三藏遂に老王父子に別れを告給へば、玉華王再三是を住めけれども三藏一向に承諾ず、徒弟們を催促て遂に別れて立出給ふ。玉華王父子は只管に別れを惜み、車駕を準備て遙に送る。滿城内外の衆人們這四位の聖僧は、實に活佛の下界し給ふ處なりとて、街に盈ひ路を塞ぎ盡く香を焚てぞ拜しける。玉華王父子は十四五里餘り送り行きて遂に袖をぞ別ちける。

金平府元夜觀レ燈

玄英洞唐僧供狀

話表三藏師徒は玉華州を離てより、亦五六日を經て一座の城地に至る。幾條の巷街を過行に、還て未だ城に到らず、忽看一座の山門有り。門上の額に慈雲寺の三字あり。三藏是を看て我們今這寺に入、少時馬を安歇て行くべしとて、四衆一齊に門に入りければ、裡より幾個の和尚出來る。三藏則ち東土より西方靈山に到り、佛を拜し經を要るの來由を仔細說話給へば、衆僧是を聞て或は三藏の威儀を懐慕、或は徒弟們三個が醜きを怕れつゝ、且方丈に請待し、寺中の衆僧都て出來りて相見え、急ぎ茶飯を備へ、三藏の說話を具に聞き、個々賞贊したりける。三藏則ち衆僧に對して、這地方の地名を問給へば、衆僧曰く、此地は金平府と呼て、則ち天竺の外郡なり。靈山の地は我們未だ赴ずと雖ども、思ふに路程甚だ遠からじ。僥倖に今元宵に近ければ、老師一兩日滯留し、這地の燈火を觀て去給へ。三藏驚いて曰く、貧僧路に在つて、大いに光陰を錯ち過せり。今已に元宵に近きや。衆僧曰く、今日は正月十三日なり。晚に到りて燈を試み、後日十五は卽ち上元十八日に到つて燈火を謝す。這地本府の大守民を愛し、人家都て善を好み今宵より燈を張り、終夜群集を做。また金燈橋といふ橋あり。往古より名を住め今に及んで盛んなり。老爺輩且荒山に住り、是を看て後西方に赴き給へと、懇懃に往めけるにぞ、三藏止事を得ず、遂に慈雲寺に宿し給ひけり。其夜早城中の衆人、都て燈を送り來りて佛に献じ、佛殿上に鐘鼓の聲喧しく、熱鬧なる光景は中華の元宵に異ならず。次の夜三藏亦街上の燈

火を看歩行、遂に十五夜の節に到り、本寺の衆僧に誘引れ、行者が輩三個も領列立て街上を遊覽し、彼金燈橋上に到れば、果して三盞の金燈あり。其燈籠の上を金絲を以て華麗に編、兩層の樓閣を罩ひ琉璃を以て裡を張り、其幌り月光の如く香氣有つて紛々と數里に散ず。三藏是を見て此燈火何の油を用ひて、這樣に香氣有るやと問給へば、衆僧答て曰く、老師父是を知り給はず。此油は尋常の油に有らず、是皆酥合香油なり。此金平府の後邊に昊天縣と云る處あり。此縣に二百四十家の燈油の大戸あり。此大戸一家毎に二百餘兩の銀子を費し大なる煩勞あり。此油一斤の價銀子三十二兩、三盞の燈火一釭毎に油五百斤三釭倶に合せて一千五百斤、銀子合せて四萬八千兩に該る。亦雜項の使用を加へて五萬餘兩を以て、唯三夜の燈火を照す。行者曰く、其許若の油怎生唯三夜に用ひ盡すや。衆僧曰く、一釭毎に四十九條の燈草を扎り的、絲棉に裹み用ゆるに、半夜の頃佛爺像を現はし給へば、則ち燈火闇くなり油都て乾き失ぬ。八戒笑つて曰く、偖は佛爺油を收め歸り給ふならん。衆僧曰く、實に長老の曰ふ如し。往古より佛爺油を收め給ふと云傳へたり。若し亦此燈籠を獻ざる年は、五栽實ず荒旱なり。這故に年々斯の如く燈籠を揚るなりと、未だ云も終らざるに、忽ち半空に一陣の風吹發り、物醜しき形勢なれば、數萬の觀燈的狼狽跑り、偖早佛爺の來り給ふなりと喚き騷ぎ、皆我前にと四方に逃散一個も在らず成りにけり。衆僧們も三藏を扯て、佛爺降り給ふ快く爰を避給へと諫勸ければ、三藏曰く、我は原來佛を拜せんと要る者なり。果して諸佛降臨あらば我は爰に在りて拜すべし。那ぞ佛爺

を看て逃走る事有らんやと云て、却て橋上に前み出給ふ時、風は增々盛んに吹き風の裡より三尊の佛體現はれ出給ふ。三藏尙も橋上に登りて是を拜し給ふを、行者身後より呼はつて、師父快く歸り給へ、他們は皆妖精なりと、急に師父を救はんと爲間に、三盞の燈火一時に暗くなり、空中より彼佛怪手を指延して三藏を扯掴み、雲を縱つて飛去けり。八戒悟淨大いに驚き、是怎麽と呆掙居を、行者曰く、儞輩且衆僧と俱に寺に歸り、行李と白馬を保守べし。我今這風に從ひて追去べしと云捨て、急ぎ觔斗雲に飛駕て、彼腥風を慕ひ東北を指て追往、天明に及んで一座の險山に下り、少時彷徨窺ふ處に、忽ち四値功曾像を現はし出來り、行者を迎へ拜し、大聖今妖怪を尋ね給ふに、路を覺給はざるを怕れ、我們來つて傳報すと呼はりければ、行者急ぎ問て曰く、這山は何と云る山ぞ。然而妖怪は那里に隱れ住や。功曾曰く、此山は青龍山と號して山中に一座の佫英洞あり。洞中に三個の妖怪あり。其大的を辟寒大王と呼ぶ、第二を辟暑大王と呼び、第三を辟塵大王と號く。他等爰に在事千年に及ぶ。常に酥合香油を食する事を愛し、假に佛像に粧て金平府の人民を欺惑し、毎年正月元宵那里に往て、若干の油を收めて歸り、一年の食に交ふ。今年唐師父を看に依て、遂に攝て洞中に歸り、今彼香油に煎じて吃んとす。大聖快く是を救ひ給へ。他が巢穴は是より五六里、這石崖を廻りて往き給へと敎けるに、是を聞て行者急ぎ石崖の下を廻りて五六里餘り過行、看ば果して一座の洞府有り。石門の一邊に一個の石碣あり。青龍山佫英洞の六字あり。行者門外に立つて、妖怪快く師父を返せと呼はれば、

門裡より幾個の牛頭の小妖精走り出、行者を看て詈て曰く、儞は是那里より來りたる的にて、怎麽門前を闖すや。行者曰く、我は大唐聖僧の徒弟なり。儞が家の魔頭昨宵金平府に來つて、我師父を拿歸れり。今快く師父を還さば、儞們が一命を助くべし。小妖們是を聞て急ぎ裡に入りて、三個の妖怪に斯と報じける。彼妖怪們は金平府より唐僧を拿へ歸り、油に煎んとして萬般商議して在りける處に、小妖が斯る事を告來るにぞ大いに驚き、且這和尙が姓名來歷を問べしと、三藏を前頭に扯居三妖怪異口同音に問て曰く、儞は那國より來れる者にて、奈何なれば佛像を看て避退かず、却つて我輩が前に進み出たるぞ。三藏答て曰く、貧道は東土大唐皇帝の勅を蒙りて、西方大雷音寺に到り、佛を拜し經を求るの僧なり。昨宵金燈橋に在て大王の佛像を現じ給ふを看に、貧僧肉眼凡胎なれば、只管佛爺を拜する事とのみ心得、却て大王を犯し奉つれり。萬望は這罪を饒し、雷音寺に到しめ給へ。老妖曰く、儞が東土より爰に到るは路大太遠し、儞尙同行あるや。亦儞が姓名は奈何。儞實を以て是を告ば性命を饒し歸すべし。三藏曰く、貧僧が法名は陳玄奘亦三藏と號す。尙三個の徒弟あり。一個は孫悟空行者、卽ち齊天大聖の歸正なり。三妖驚いて曰く、其齊天大聖は五百年前、大いに天宮を闖せし者に有らずや。三藏曰く、卽ち其天宮を闖せし的なり。亦第二個は猪悟能八戒、卽ち天蓬元帥の轉世、第三個は沙悟淨和尙則ち捲簾大將の臨凡なり。三個の妖怪是を聞て互に面を看合せ、我輩僥倖にいまだ他を吃はず、一且他を後園に綁め置き、彼三個の徒弟們を拿てのち、一齊に煎て是を喰ふべしと

云ける處に、亦一個の小妖走り來り、彼和尚當下門を破り侍ふと報じければ、三妖怪急ぎ一群の牛精小妖們を扯領て、個々器械を扯提つゝ門外に跳り出、行者を看て罵て曰く、儞は天宮を鬧せし孫悟空なるよな。元來這程の小猿却て此虚名あり。儞今爰に來り我輩を怎麽せんと思ふや。行者大に怒つて曰く、儞油を偸む大賊怪多言する事勿れ。快く我師父を送り來れ。然なくば儞們を塵に做べきなりと、鐵棒を把て打て罹る。三個の妖怪一個は越斧を使ひ、一個は大刀を閃し、一個は長鎗を打振て行者一個に相敵し、百四五十合戰ひけり。身後に控し若干の牛精の小妖們、一堆に跑集り行者を中に取圍み、一齊に責立る。行者多勢に敵し難く、遂に空中に飛昇り雲を縱つて脱れ去、急に慈雲寺に飛歸り、這動搖を仔細語り、八戒沙僧を引領て又一齊に雲に駕青龍山へぞ飛行ける。

四編卷之六

三僧大戰ニ青龍山一　四星挾捉ニ犀牛怪一

斯て三個の妖精行者を追退け、小妖們と俱に門裡に引入り、少時歇息て在りける處に、不多時行者八戒沙僧を從へ、亦門外に責來り、八戒且前に進み、釘鈀を擧て石門を突碎き、油を偸む大賊怪快く師父を返せと呼はりければ、三個の妖怪大いに怒り、亦小妖們を率領打て出、更に一言をも交へず、三妖怪と三僧と千變萬化の術を盡し、時移るまで戰ひける。數千の小妖前後より指挾み、主に力を添ける程に、八戒沙僧力疲へ、多勢に敵する事能はず。兩個とも遂に大勢の爲に生擒れける。行者是を見て斯ては不當と思ひければ、急に圍みを脱れ出で、空中に昇つて嘆息し、今は我一個にて救ひがたし、快く天上に去て加勢を請べしと、急に亦觔斗雲に打跨、少時の間に西天門に飛到る。此時太白金星那里に在て、行者が慌忙く來るを看て、迎住て曰く、大聖今何等の幹有て斯周章く來り給ふや。行者則ち昨日よりの光景を仔細と說話、萬望彼妖怪を亡し、師徒三個を救ひ出さんため、今天宮に來つて加勢を請はんと倣なりと云ければ、金星呵々と笑つて曰く、彼三妖は犀牛の精なり。累年修行

して能雲に駕霧に歩み、江海の中に在つて水道を開き、三個ともに大神通あり。若し他を捉んと思はば、四木禽星に請ひ給はゞ、忽ち他們を降伏すべし。行者問て曰く、四木禽星とは誰なるぞや、萬望はその在室を敎へ給へ。金星曰く、四木星官は斗牛宮外に在り。大聖快く玉帝に奏聞し給はゞ、分明に知り侍はん。行者則ち金星に拜謝し別れ、遥に通明殿に到り、四大天師に見えて央み、彼四木星官を央みて、三藏師徒を救はん事を奏聞しける。四大天師這由を奏しければ、玉帝此由を聞給ひ、遂に奏に准じて角木蛟、斗木獬、奎木狼、井木犴の四星を宣給ひ、行者に加勢すべき由を命給ひければ、四星官命を畏みて急ぎ准備を做、則ち行者と打列て頓て下界に降られけり。行者心裡に打笑ひ、四木星官を何人ぞと思ひしに、是原來二十八宿中の四木星にて在りけるなり。彼長庚老子明かに我に告ざりしは何事にやと獨言ながら、四星官を導引て遂に青龍山にぞ下りける。行者曰く、星官少時待給へ、我且他們を僞引出し候はんと、忽ち洞門に臨んで大音に呼はつて、大賊怪快く師父を出せと叫びければ、三個の妖怪此聲を聞着、彼猴亦來つて門外を鬧す、疾打拿よと呼はつて、亦許多の小妖を率領、門外に跑り出、行者に向ひて戰はんとして、後邊に立つたる四星官を看て大いに驚き、我輩が大敵來れりとて狼狽騷ぎ、衆妖個々本相を現はし、許多の小妖們は山牛、水牛、黃牛們の精となり、思ひ〳〵に逃去行。彼三個の妖怪は三隻の犀牛と現じ、東北に向ひて脫れけるを、行者是を見て井木犴角木蛟と諸俱に、彼三妖に從ひて追行ける。斗木獬と奎木狼は、小妖們を山谷の間に追入、許多の牛精を盡く打殺し、佉英洞に尋ね入り、三藏と八戒沙僧們が綁めを脫出せば、沙僧原來二星官を能認得たれば、再三恩を謝して曰く、二星官奈何して爰に來り、我輩を救ひ給はりしぞと問ければ、星官答て曰く、行者則ち玉帝に奏し、援兵を要し事を語り、今已に洞中の小妖は殘りなく亡びたり。捲簾大將と天蓬元帥と、且師父を守護して歸り給へ。大聖と井角二星は三妖怪を追行たり。我輩も亦那里に追行、大聖に力を合せて妖怪を拿來るべしと云畢りて、奎斗二星雲を縱つて東北を指て飛去給ふ。三藏は再三二星官に稱謝し給ふ。八戒沙僧は輪番師父を背負、互に神通を使ひ空中を走つて慈雲寺に歸りける。斗木獬奎木狼の二星官は雲に打乘て東北に往しが、亦西洋大海に轉じ、不多時海上に到り、行者が海上に在て叫び詈るを見着、大聖我輩來れりと呼はりければ、行者懽喜んで曰く、三個の妖精今這海中に潛り入り、井角二星是を跟て入り給へり。二星官少時爰に待給へ。我水中に入て打探來るべしと、頓て辟水訣の法を念へ、波濤を開き直に海底に分入ければ、彼三妖水底に在て井角二星を相敵とし、沒命的と戰ひ居たりしが、行者亦爰に赶來るを看て不當とや思ひけん、再般崖上に向ひ逃登りけるを、待設たる奎斗の二星、飛跑て遂に辟塵犀を打殺す。辟寒辟暑の二妖怪是を見て、亦水中に逃入んとする處を、井木犴跳り出て辟暑犀を打殺す。角木蛟飛羅て辟寒犀を打殺し、三個の妖怪皆一齊に亡びければ、行者大いに懽喜、則ち三個の犀牛を取集め、四星官と俱に皮を剝角を取り、また洞中に到りて師父を救ひ出さんと云けるを、奎斗二星是を住めて、我輩向に師徒三個を助け出し、慈

雲寺に歸し侍ひき。今の程は疾那里に到り著しならんと云ければ、行者愈懽び、遂に四星官を同伴雲を縱つて金平府に飛歸り、慈雲寺に到り、三藏首め衆僧們に此事を仔細說話聞かせければ、三藏深く感歎し、慈雲寺の衆僧們は一向驚き、此四個の和尙輩は俱に活佛の降臨し給へるなりと、個々香を焚華を備て禮拜す。行者此時四木星官に拜謝し、四隻の犀角を四星官に與へて、玉帝に奉上ん事を願ひければ、四星官大いに懽喜、遂に三藏師徒に辭し別れ、天上に還り給ひけり。行者亦一隻の犀角を慈雲寺に納め、一隻の犀角を本府の官府君に呈上し、彼假佛の妖怪を收めたれば、此後元宵金燈に許多の油、若干の黃金を費す事有るべからずと告觸しける程に、此事既に金平府中に隱れなく聞傳へ云傳へ、金平府の刺史佐貳郎官等の官員、盡く慈雲寺に詣來り、其外大小の人家の老若男女都て寺中に來り、唐僧師徒を拜し亦天を仰で四星を拜し、歡喜稱讃の聲天上地下に震ひけり。慈雲寺を首として、本府大小の官員輩個々感激に堪ず、師徒四衆を府正殿中に請じ、大いに素筵を安排し萬般と管待けり。亦昊天縣二百四十家の賣油大戸の輩は、我們活佛の力に依て數萬金の費を省き、這大恩怎麼して報じ奉つらんやと、一家毎に一席の宴を設けて、三藏師徒を請じて供養し、二百四十家の大戸毎日輪番供養すべしと誓住、三藏師徒を堅く住て放たざりければ、三藏沒奈何慈雲寺に滯留し、毎日一家の供養を受け給ひ、不期一月餘りを過しけるが、三藏一夜暗に行者を呼て、我輩樂を貪り無益の日數を費さば、何れの時か經求むるの業を果さんや、却て佛祖に罪せられて禍を生ずべし。

我思ふに賣油大戸の輩を欺き、今夜明ざる間に這寺を忍び出、急ぎ西方に向はんと思ふなり。此事奈何と曰へば、行者是を聞て點頭這事大いに好、我も疾より斯思ひ在りしなり。然らば私に准備を做べしと、半夜悄々と行李を整へ、五更の時刻八戒を呼て馬を準備せよと云ければ、八戒眼を摺て曰く、未だ夜の明けざるに、馬を准備して何に爲るや。行者曰く、儞疾く起來れ師父路に赴き給ふなり。八戒曰く、這那の事ぞ二百四十家の大戸の者ども、都て我輩を請待す。今纔に三十家ばかりの齋を受け、怎麼却て路に出て飢を忍ぶや。三藏是を聞て默子快く起來れ。若し再び亂說を吐ば悟空に棒を以て合爲打と罵り給へば、八戒慌忙驚き急ぎ起出來りて曰く、師父奈何なれば這樣に心を變じ給ふ。常には我を愛し給ふに、今日却て我を打たしめんと曰ふや。行者曰く、師父儞が嘴を貪り、路を誤過事を怪み給ふ。快く馬を備へて路に赴き打たるゝ事を脫れよと、亦沙僧を呼起し、行李を擔せ馬を牽せ、悄悄に山門を開き、遂に這寺を忍び出、師徒四個路を急ぎ暗きを厭ず走りけり。

給孤園問ㇾ古談ㇾ因
天竺國朝ㇾ王遇ㇾ仙

斯て唐僧四衆は慈雲寺を出てより、風に喰し水に宿し、路上平安に半月餘りを過ぎ、一座の高山に度り山の那邊に到れば、路傍に一宇の大寺あり。山門の額に布金禪寺と寫したり。三藏是を看て沈吟し、是舍衞國の界に有らずやと曰へば、八戒手を拍て驚いて曰く、我師父此幾年路を識給ふ事を見ず。今

日却て此地を識給ふや。三藏曰く、路を識たるに有らず。我曾て經典の中に於て見し事有り。佛舍衞國の祇樹給孤園に在せし時、給孤獨長者滿地に黃金を布滿して、太子の祇園を買得し事あり。想に這寺布金寺と號しは、這故事に因てならんか。然れば舍衞國の界に有らずやとは云しなり。我輩今此寺に入て一泊を央むべしと、遂に個々山門に前み入れば、金剛殿の後邊に一個の禪僧立出て、長老は那里より來り給ふぞと問。三藏答て曰く、貧僧は陳玄奘、則ち東土大唐皇帝の旨を奉じ、西天大雷音寺に到り佛を拜し經を求むるの僧なり。今日已に天晚に及ぶ。今寶刹を過るに依て、一宿を要ん事を思ふ。萬望は是を惠み給へ。禪僧の曰く、荒山は十方常住の寺にして個々便宜に隨て居住を做、況や長老は東土の神僧なり、我寺の供養を受け給はゞ、是荒山の僥倖なりと、遂に三藏四衆を方丈に導引入個〻座定まりける。此時東土大唐の聖僧來りし事を聞傳へ、常住掛榻を問はず、長老行童都て來り て相見え、個々三藏の威儀を羨み、亦徒弟們が異形なるを怪みけり。既にして行童膳を備來り、師徒個々齋を食し畢り、三藏寺僧に對ひ、布金寺の來因を問給へば、寺僧答て曰く、這寺は原舍衞國の界にして給孤獨園寺と云しなり。給孤獨長者佛を請て、經を講じ給はしめん爲に、若干の黃金を地に布滿して要め得たる地なる故に、布金寺と改めたり。此寺の前面は則ち舍衞國にして、此地は長者の祇園なり、寺の後邊は祇園の基趾なり。若し雨霧々に遇時は、或は金銀珠玉を淋ぎ出す、時々是を拾ふ者あり。三藏是を聞て佛經の言葉寔に僞りならずと、遂に行者を扯列て堂を下りて閑行し、爰那里と徘徊し看歩き給ふ處に、一個の老僧出來りて三藏に對ひ禮拜す。三藏急ぎ身を轉して彼老僧を看給ふに、年齡百歲に餘りたる光景にて、眉には八字の霜を双べ、手に竹杖を携へ、三藏と行者に相見え深く道心の堅きを稱贊し、彌多時說話を做、三藏を導引て祇園の基趾に到り、左右する間に既に初更の空近く、月明かに風淸く、三藏往時を思ひ今を憐み、座に感涙を催し給ふ處に、不思議や這時那里ともなく人の哭悲む聲、風に從ひて聞こえたり。三藏是を聞て更に哀歎に堪へず、他は那個にて何の故に哭にやと問給へば、彼老僧是を答ず。且一邊に在りし道人行童們に命じて、儞們快く茶を准備て來れと云て、大家寺に歸し遣、一邊に人無を看て、俄かに又三藏を拜しければ、三藏是を住めて曰く、老院主何の故に這禮を做給ふや。幹有らば速に語り給へ。老僧則ち三藏行者に對して曰く、弟子齡已に百餘歲、今まで無量の人物を見ると雖も、曾て兩長老の如きを見ず。弟子既に長老輩は尋常の凡僧に有らざる事を悟れり。當下の哭聲の事、長老師徒に有らずんば管ず辨明を得難し。今仔細に其故を語り侍はん。舊年の今日弟子月に對し心を澄し在りける時節、忽ち一陣の風响き人の哭聲有るを聞く。我這祇園の基趾に尋ね來れば、則ち一個の美貌女子爰に在り。何個ぞと尋ぬれば答ていふ、我は天竺國王の公主なり。今宵月下に有りて花を看として、風の爲に刮れて爰に來りしと云り。我則ち他を一箇の空房の裡に入れて堅く鎖し、門上に孔を穿ち其孔中より食を送り、衆僧們を瞞きて他は一個の妖邪なり、我法力を以て他を鎖し、毎日兩般の茶飯を與へて命を繫しむと云傳へ置き、彼女兒も亦

聰明て、衆僧們に汚されん事を怕れ、白晝には亂心の如く萬般の亂言を吐、夜靜り人無時は時々父母の事を思ひ出して、今の如く啼哭す。我また幾番か城中に進み入り、皇宮公主の消息を打探見に、城中の公主も亦更に恙なく御座在、些少の騷ぎもなし。亦還て彼女子を打探に、是亦何の怪氣もなく、皇宮に在りし時の事を問ば何事も速かに答をなす。我奈何しても此虛實を明白に做こと能はず。今僥倖に老師爰に來り給ふ。萬望は國中に法力を廣く施し、此虛實を辯明し、何れの公主が眞なるや妖なるや、一個には良善を救ひ、二個には神通を露し給へ。三藏行者是を聞いて、老僧の央み定耳に領諾したり、吾們不遠是を明白に爲すべきなりと、遂に老僧に別れ去りて、寺中に歸りて安歇けり。次の旦疾起出齋を吃し、頓て寺僧に辭し別れ、三藏師徒は大路に出、巳の刻頃に金城の中に前み入り、會同館に到り驛丞に相見え、東土大唐より來りし由を仔細說話ければ、驛丞驚き且正堂に請じければ、四衆一齊に館驛に前み入り、三藏亦驛丞に向ひ、本國の歷年を問給へば、驛丞曰く這地は則ち天竺國大祖太宗より今に至り五百餘年、當今皇帝山水花木を愛し給ひ、怡宗皇帝と號し奉つり、年號を靖安と改元あり。今已に二十八年なり。三藏曰く、今日貧僧入朝して關文を換ん事を願ふ。萬歲爺々今尙朝に在座候はんや。驛丞曰く、皇帝一位の公主娘々あり。年已に二十歲なり。今天婚に因りて十字街上に高綵樓を結び、綉毬を拋打つて駙馬を招き給ふ。今日正にその日に當る。思ふに我王此消息を聞かんために、未だ朝を罷き給ふべからず。關文を換んと思ひ給はゝ、快く入朝し給ふべし。

三藏曰く、天婚とは奈何なる事ぞ。驛丞曰く、公主娘々今年二十歲に成り給ふに因て、駙馬を要給へども未だ無、這故に十字街頭の賑しき地方に高樓を結び、公主此樓上より今日綉毬を投下し、其毬に中りたる人を昇て、駙馬と定め給はんとなり。是を名けて天婚とは號なり。長老今日朝に入り給はゝ、其處を通り給ふべし。宜く看住して去給へ。三藏是を聞き且午齋を吃し畢り、袈裟僧帽を更めて行者を列て立出給へば、八戒も同く去んと爲を、沙僧扯住めて二兄且住れ、儞の嘴臉を城中の人に看ば、管す許多の男女を驚かし、或は事を引出さん。長兄一個遣して、吾們二個は爰に在て待べしと云ければ、八戒も沒奈何遂に驛中に住りけり。三藏は行者を引領朝門に望んで急ぎけるに、果して前面の十字街上に一座の高綵樓あり。其四方に士農工商の輩都て街上に立集り、公主の毬に中りて己國王の駙馬と爲るべしと、數萬の若冠綵樓の下に集り、公主の毬を拋るを待居たり。三藏是を看て我輩が服色便ならず、這處を過るに宜しからじと曰へば、行者曰く、師父布金寺の老僧が央し事を忘れ給ふや。我們一個には綵樓を見、二個には若し公主を看ば、其虛實を辨ずべし。三藏是を聞て亦行者と俱に前み去給ふ。原來此公主一個の妖邪にて、前年本國の公主御花園に月を賞して居給ひしを、這妖邪攝拿て他處に移し、自己却て假に公主と變じ、唐僧の今年今月今日今時此處に到るを知り、他を招きて配合し、元阪の氣を取て太乙上仙と成らんと計り、綵樓を准備て待ちける處に、午の三刻に當り、果然唐僧綵樓の下に進み來る。公主は香を焚て天地を拜し、左右に七八十個の官女を從へ、手親綉毬を取

て樓上より抛下し給ふに、直に唐僧の毘盧帽子に打當たり。當下樓上樓下一齊に呼はり騷ぎ、採女宮娥大小の大監們都て樓を下りて三藏を拜し、貴人快く朝に入て賀し給へと騷ぎ台ば、三藏驚き慌忙、急ぎ行者を扯て此事怎麽すべきと曰へば、行者低語て曰く、憂給ふ事勿れ。我は今より驛館に返り、八戒沙僧と倶に萬般の準備を做て待ち候はん。師父且朝に入り若し公主師父を招かずんば、快く關文を倒換て出給へ。若し亦公主師父を招いて婚姻せんと要ば、國王に求めて快く我輩を朝中に呼給へ。其時我們入朝し彼公主の眞假を辨じ、計策を設けて師父を援て放ち出すべし。三藏是を聞て點頭、卽ち行者と引分れ宮女衆官輩に導引れ、綵樓の前に到り給へば、公主樓を下りて親く三藏の手を携へ、同く寶輦に登り儀從を廻轉て朝門に入り、公主三藏を相挽て金鑾殿に登り父君皇帝を拜し、則ち今日綉毬を一個の和尙に打當たる由を奏しければ、國王公主の和尙に毬を當たる由を聞て心中一向に愕ばず。且三藏を宣て問て曰く、儞が模樣此國の個に非らず。且儞那國の僧にて亦何の幹有て此處に來りたるや。三藏拜伏して曰く、貧僧は南贍部州大唐皇帝の旨を領し、西天大雷音寺に到り、佛を拜し經を求むるの僧なり。關文を倒換と欲して十字街綵樓の下を過り、不期も公主娘々の王綉毬、貧僧が頭上に當り候ふなり。然れども貧僧は出家と云亦異鄕の人、怎麽敢て玉葉金枝と配偶を做んや。萬望は貧僧が死罪を赦し、關文を倒換て快く靈山に赴かしめ給へ。國王曰く、儞は乃ち東土の聖僧、正に是千里婚姻使を牽と云ものなり。今日公主良辰を擇で佳偶を求め、綉毬を以て儞に中是天緣有るに似たり。

唯不知公主の意奈何。公主前み出て答て曰く、常言鷄に嫁すれば鷄を逐ひ、犬に嫁すれば犬を逐ふと云り。妾今天地に祈誓を做、今日僥倖に聖僧を得たるは是則ち前世の緣なり。萬望は他を招きて駙馬と做候はん。國王是を聞始めて歡喜の色を發し、急ぎ欽天監を宣て日を擇旨を傳へて天下に曉諭めける。三藏是を看て敢て恩を謝せず、一向哭きて赦し給へと計り云けるにぞ、國王大いに怒つて曰く、這和尙甚もつて理に通せず、朕一國の富貴を以て儞を招て駙馬と做、何の爲に同心せざるぞ。再び辭せば錦衣官を呼來り立地に儞を斬ん。三藏大いに驚き謊得魂一向に身に不附。戰ひ兢いて曰く、貧僧今天恩を蒙り那ぞ敢て否み奉つらんや。但貧僧に三個の徒弟あり。今驛館に居れり。萬望は他輩を朝中に宣給ひ、關文を換て靈山に遣し、佛を拜し經文を取らしめ給へ。國王是を聞て急ぎ官員を宣て旨を傳へ驛館に遣し、唐僧の徒弟們を呼しめ給ふ。却說行者は綵樓の下にて三藏と引別れ、一足步ては打笑ひ、二步去ては打笑ひ、口をも住ず笑ひながら驛中に歸りければ、八戒沙僧問て曰く、長兄何を然までに懽喜笑ふや。師父は怎麽して歸り給はざるぞ。行者曰く、師父は十字街綵樓の下にて、公主娘々の綉毬に打當られ、許多の官女大監們師父を圍繞、公主と同車にて朝に入り給ひ、頓て駙馬と成り給はんとす。這般の好笑事我曾て見たる事なし。八戒是を聞胸を拍て後悔して曰く、快く這般の事を知らば、我必ず往べきに却つて沙僧が阻し故、此好事を失ひたり。我若し綵樓の下に到り、綉毬を老豬が頭に打中られ、彼公主我を招いて駙馬と做ば、一對相應の夫婦世間更に比ひなく、當に儞輩

大家造化ならん。沙僧則ち八戒が臉を撫て曰く、儞が這嘴臉を以て綉毬に打中られなば、他輩驚き一齊に棒を以て追出さん。儞が公主の駙馬思ひも依らず。八戒曰く、此黑子更に趣きを知らず、我像は醜しと雖も却て大いに風味あり。行者曰く、獃子亂說を云事なかれ、快く行李を取收よ。師父我們を呼給はゞ快く朝に入つて守護すべし。八戒曰く、長兄尙誤てり。師父駙馬と成り給はゞ、皇帝の女兒と宮裡に在て歡樂給ふ。亦山水を渡り妖精に偶我輩が守護を要め給ふに非ず。師父已に四十餘歲公主も亦二十歲なり。俱に夫婦の事情を知ば、那ぞ我輩が幇扶を要給はんやと、這們三個同口哄喈居處へ、忽ち一備の官員子入來り、國王の旨を傳へ徒弟們を宣給ふなりと呼はりけるにぞ、行者們三個は宜に從ひ官員輩と打列立、遂に三個一齊に朝中に赴きけり。

四編卷之七

四僧宴二樂御花園一
一怪空懷二情慾喜一

話表行者が輩三個已に午門外に到れば、黃門官出來りて導引入斯と傳奏しければ、國王急ぎ三個を朝前に到しめ給ふ。悟空們三個階下に立定て敢て拜を爲ず。國王三個が異形なる像に驚き、心裡に恐怖を做し、且他們三個が姓名出生を問給へば、行者答て曰く、老孫は東勝神州傲來國華果山石中出生、名は孫行者悟空と呼び、齊天大聖の歸正なり。二徒弟は猪八戒、法名悟能、是天蓬元帥の轉世なり。三徒弟は沙和尙、法名悟淨、是捲簾大將の臨凡なり。個々昔は妖邪なり。當下佛門に歸依し唐僧の徒弟となり、都て法名法號を受、師父を守護して路上妖を降し魔を伏し、今日爰に到れるなりと述ければ、國王是を聞て或は公主の活佛三藏を招きたるを懽喜、或は行者が輩三個が妖相なるを驚き怕れ、默然として居給ふ處へ、忽ち正臺陰陽官上前出て、本月十二日壬子婚姻の良辰なりと奏聞す。國王大いに懽び今日已に初八日、然れば佳期近きに在。且駙馬と三位の高徒を休息せしむべしと、當駕官に命じ給ひ、師徒四衆を御花園の裡に於て、筵宴を催し萬般と管待けり。其夜深更に人靜り

て後三藏悄々に行者を呼、國王今我を招きて駙馬と做んとす。我奈何なる計策を以て爰を脱れ出んやと曰へば、行者曰く、我國王の面を看に些しの妖氣あり。布金寺の老僧の言を以て想合すれば、彼公主却て妖怪ならんも計り難し。十二日會親の時に至らば、公主極て出來りて父母を拜すべし。其時我們身邊に在て其眞假を辨ずべし。他果て眞の女人ならば、師父則ち駙馬となり一國の榮花を請給へ。三藏大いに怒て曰く、儞這猴頭尙我を嘲弄にするや。我們が功業已に七八分に到り、今更邪念を欲さんや。再び是を云ば我緊箍咒を念へて、儞に身の居處無しめん。行者驚き慌忙跪き、師父且念じ給ふ事なかれ。必す會親の時に至らば、我輩一齊に皇宮を鬧し、師父を領て脱れ出候ん。心を安んじて十二日を待給へとて和めけるにぞ、三藏も心を易め懽喜つゝ遂に其夜は安寢けり。明旦國王亦四衆を朝に宣、國王と三藏と鎭花閣に登りて飲宴し、師徒の座次は便宜からずとて、三個の徒弟は留春亭にて宴を給ひ、終日の歡樂を做しめ給ふ。天晚に及んで徒弟們師父を尋ねて鎭花閣の一邊に來り、師父と國王と閣中に座て在るを看て、八戒醉に乘じて今日終日の飽食をしながら、夜に入て尙睡らざるやと呼れば、沙僧笑て曰く、二兄儞養生を不知、這樣に飽食の後怎生急に睡るべけんや。八戒曰く我那ぞ養生不養を顧んや。唯飽て睡醒て飽ば那ぞ亦他に望あらんや。行者他輩が爭ひ騷ぐを看て、或は師父の怒給はん事を怕れ、且兩個を呼返し亦留春亭に入たりける。當下三藏少時國王に辭し退き、留春亭に入來りて八戒を呼で叱て曰く、儞這獸子爰を何處と思ひて嚮の如く鬧すや。若國王の怒に觸ば大いなる罪に遇ん事を知ずやと云給へば、八戒曰 苦からず。我們既に皇帝と一宗なれば、他決て我輩を怒らじ、我們大家這時心の儘に戲遊ずんば、更に亦何の時をか待べけんや。師父既に駙馬と成給ひながら、尙他を怕れ給ふは奈何。三藏是を聞いて大いに怒り、快く獸子を拿來れ。我自親二十禪杖駙馬爺々饒し給へ〳〵と泪を流して叫びけり。一邊に在し陪宴官是を看て、漸々に三藏を諫勸住め錫杖を扱取けり。八戒は這々起上り、師父國王の駙馬と成給ひ、未だ婚禮も不爲に快く皇帝の代を勤め、這般に人を刑するやと口裡に獨語けるを、行者他が背を侮へ、儞亦亂說して再び打るゝ事なかれ。大家快く睡るべしとて其夜は留春亭に安寢けり。是れより兩三日國王日々筵宴を安排て、師徒四個を只管管待、不期已に十二日の佳辰に到り、光錄寺大部等の官員會親筵席の準備盡く整備たりし由奏聞しける。國王滿心歡喜旨を傳へて駙馬を宣し、筵席に赴しめんと爲給ふ處に、忽ち內宮官國王の尊前に來り、正宮公主娘娘の請ありと奏しければ、國王遂に請に任せて內宮に入り、直ちに昭陽宮に到り、三五皇后六院の妃嬪都て公主に扶持、花を團ね錦を聚めたる如きを看、國王心裡歡喜に堪へず。公主に對ひて曰く、賢女今僥倖に聖僧と配偶を做す、思ふに心願足りぬべし。今萬般已に整備へり。今烏正に佳期に當れば快く合巹宴に赴き、親事を成就すべし。公主當下近く上前身を倒して父王を拜して曰く、父王萬望は小女が罪を赦し一言の啓奏を聽給へ。這幾日宮官輩が云傳ふるを聞くに、

唐聖僧に三個の徒弟ありて、甚だ獰猛像なりと云へり。萬望は父王且他輩を城外へ送り出し給らば、小女驚き怕の憂なく、安堵て宴に赴むき侍はん。國王の曰く、三個の徒弟們像醜惡こと類なし。他輩今御花園の裡に在り。朕已に他們を見る事を好まず。思ふに今日他が關文を換城外へ送り出し、大雷音寺に赴しめ、然して後會親の宴を做ん。公主是を聞いて大いに悦び、深く父王の恩を謝す。國王夫より亦殿上に立還り、急ぎ唐僧四衆を宣し入れ給ふ。三藏師徒は御花園の裡に在りて、今日正に十二日良辰なれば、管ず會親の宴を做ならん。快く計策を定て脱れ出べしとて、個々商議を做居る處へ、當駕官儀制司來り、國王唐僧四衆を請じ給ふなりと有けるにぞ、是を聞て師徒四個一齊に朝に入て、丹墀の下に立双びける時、國王三個の徒弟を呼で曰く、朕今關文に花押を用ひて儞們三個に遞與、今より儞們を送り出すべし。快く靈山に登りて佛を拜し、經を求て歸り來れ。然ば我重く恩賞を與ん。駙馬は住て爰に在り管ず放心事勿れ。行者們三個一齊に拜して曰く、萬望は萬歳爺々快く我們を送り給へ。國王頓て關文に寶印を居て行者に遞與、亦黄金十錠と白金十錠と贈りて路費と爲さしむ。行者們三個遂に國王に拜辭し、身を轉して出んと爲を、三藏驚き色を失ひ、儞們實に爰を去るやと扯住んと做給ふを、行者丟個眼色を做、師父心を安んじて住り給へ。我們管ず經を取り忽ち再び爰に來り候はんと云ければ、三藏行者が詞を悟り、唯點頭て在座ける。行者們三個は遂に殿を辭し下りて、一齊に朝門を出驛館に返り入、行者則ち八戒悟淨に向ひ低言て曰く、儞們兩個爰に座して少時待て。若し驛丞に對するとも唯能程に應を做し、我と說話爲る事なかれ。我は今より去て師父を保守べしと、一根の毛を拔て假りに行者の模樣と變じ做し、驛館に住置眞身は蜜蜂兒と變じ、直に朝中に飛び去り、師父の耳の一邊に住り、師父我來れり管ず放心し給ふべからずと云ひて、亦翅を展て簷の瓦上に住り、殿中の光景を私に打探居りける。

假合形骸撿玉兎、
眞陰歸正會靈元

却說、不多時內宮官殿上に來り、合巹の宴已に鳩鵲宮中に排せる由を奏聞す。國王三藏を同伴て後宮に入ければ、行者亦翅を展て師父に跟ひ後宮に入り、宮裡を打探見るに、鼓樂天に喧しく異香鼻を撲。兩班の綵女宮娥整々と排列し、寔に是蓬宮仙府を看如く、多時有りて皇后嬪妃公主を圍繞し、鵲鵲宮中に出來り、三藏を迎へ拜し、我王萬歳萬萬歳と一齊に唱へける。三藏は心裡驚き戰々兢々として魂一向に身に添ず、呆臉呆てぞ在ます。行者師父の富貴色慾に心を搖さゝるを見て心裡に賞贊し、亦公主の容貌を打探に、果而頭上に一點の妖氣有けるにぞ、偖はと思ひ急ぎ師父の耳根に飛行、悄悄に告て曰く、師父公主は果して妖精なり。我今他を捉へ候ん。管ず驚き給ふなと云置て、其儘公主の前に飛び到り、忽ち本相を現し公主を扯住て曰く、儞這妖精這裡に在て斯の如く榮花を受け、何の不足有てか亦我師父を哄き眞陽を奪んと爲や。快く正體を顯すべしと聲を勵して詈りけり。許多の后妃を首

として衆位の官員、是を看て膽を亡ひ魂を飛し、宮娥綵女の輩東西に逃迷ふ。國王も座を立て逃んと爲給ふを三藏抱き住め、君怕れ給ふ事なかれ。是我徒弟法力を以て妖怪を捉るなりと叫び給ひければ、國王愈驚きけり。彼妖精の公主は行者が手を振放ち、衣服首飾を解去て、御花園の土地廟の裡に跑入り、一條の短棍を取出し行者を中眼て打て擺る。行者同く御花園に追ひ至り鐵棒を掣出し、兩個叫び詈り合ひて相爭ひ、俱に神通を現はし空中に飛昇り、少時が間戰ひけるが、行者卽ち棒を空中に投げ揚げ變じよと呼りければ、忽ち百千の鐵棒と變じ、妖精が上に落蒐る。妖怪驚ろき慌忙急に身を閃して一道の清風と化し、正南に向ひて逃去けり。行者雲を縱て是を追行けるが、忽ち一座の大山に到りける時、妖精亦金光と變じ、山を下りて洞に入り寂然として消失けり。行者思ふやう、他若し潛に隱れて皇宮に還り、師父を害せんと爲も計り難しと疑ひ思ひ、立地に雲を轉して飛歸り皇宮に到りけり。當時國王君臣妃嬪宮女の輩、始て公主は眞の公主に非ず、妖精の變じたるを悟り個々怪み怕れて在ける處へ、行者雲を下りて歸り來り、鵁鶄宮外に立ければ、三藏急ぎ問て曰く、假公主の虛實奈何。行者曰く、彼公主は實に一個の妖邪にて、他一座の山中に逃歸り、我急に追至りしかども踪跡を知ず。彼亦暗に爰に歸りて師父を害せん事を怕れ一且歸り來りたり。國王是を聞て公主既に妖邪ならば、我眞の公主は那里にかあらんと哭給へば、行者曰く、我假公主を捉たらば、眞の公主は自然出來り給ふべし。宮娥妃嬪輩は且內宮に還り給へ。陛下と師父とは殿に歸り、我師弟八戒沙僧を宣給へ。我

再び去て妖精を拿へ候ん。當下皇后妃嬪輩都て恐懼の心を忘れ、個々行者が身近く上前來り、萬望は聖僧我眞公主を救ひ給はらば、永く大恩を忘れ侍はじとて幾番行者を拜し、遂に內宮に退きけり。國王は三藏を導引亦殿上に到り、急ぎ官員們に命じ驛館に使し、兩個の徒弟們を宣し給ふ。八戒沙僧是を聞て官員等と打列て、急ぎ殿中に來りければ、行者則ち八戒沙僧に有し事ども仔細語り、儞們兩個師父を保守て爰に在れ。我亦去て妖怪を捉へ來るべしと、忽ち觔斗雲を放つて正南に飛び行けり。斯て行者少時が間に彼の山上に飛び到り、雲を下りて尋ねけるに妖精が巢穴更に知ず。遂に唵字眞言を念へて當方の土地神山神を喚出し、我今一個の妖精を追て這山に來りぬれど、他が像を看失ひ奈何尋れども踪跡を知らず。儞們其巢穴を知らずやと問ひければ、二神答へて曰く、此山は毛顯山と號し山間に唯三個の兎穴あるのみ、往古より曾て妖精なし。大聖今妖精を失ひ給ひしならば、彼兎穴を打探給へとて行者を引いて山下に到り、坡下の兩固の窟を看るに、許多の兎兒裡に在り、人音に驚きて四方に散て逃去けり。二神亦行者を領て頂上の窟に到れば、果而彼妖怪這裏に在り。行者が來るを看るより乍ち短棍を取つて跳り出で大いに詈て曰く、儞は五百年前大いに天宮を鬧せし弼馬溫ならずや。怎生大膽にも皇宮に入り我親事を破りたるぞ。此恨世々忘れ難し我決して儞を饒じ。行者怒て曰く、儞已に我手段を知らば怎麼敢へて敵するや。快く一棒を領して儞が本相を現はせとて、兩個亦山頭に在つて相爭ひ、鐵棒と短棍と互ひに術を顯して、且戰ひ且走り遂に空中に昇ける處に、忽ち

碧漢の間より大陰皇君現はれ給ひ、後邊に嫦娥を隨從來たり、大聖少時手を住めよと嘱り給ふ。行者是れを聞いて頭を廻し、急ぎ棒を收めて禮を做ば、大陰曰く、今儞と對敵する妖精は、我廣寒宮にて仙藥を搗玉兎なり。他が持たる短棍は則ち其藥を搗處の杵なり。他私に金鎖を開きて宮を走り出て下界に下りて既に一年を經たり。我今他が傷命の災あるを知りて、特に來りて性命を救はんとす。萬望は大聖老身の面に愛て他が命を饒し給へ。行者曰く、老大陰の尊言誰か是れを許容せざらんや。然れども他天竺國王の公主を攝去、却つて其像に變じ我師父を哄きて配偶し元陽を破んとす。其の罪亦輕からず。大陰の曰く、儞未だ仔細を知ず。抑彼天竺國王の公主は凡人ならず、原蟾宮中の素娥なりしが、二十年前他曾て玉兎を拿て一拳を打ちたり。其罪に依りて遂に下界に下され、天竺國王の正宮皇后の腹を借りて、因て公主と生るゝ事を得たり。這玉兎も亦其の時一拳を打れし仇を含み、前年私に宮を出素娥を攝て山中に棄て仇を報じたり。唯他が唐僧に配偶せんと做し、其の罪實に饒し難し。併ながら儞の師父未だ其害を受けざれば、唯一發に他を饒し給へ。行者曰く、既に這般の因果あらば我れ那ぞ異議候んや。急ぎ他れを收め給へ。大陰皇君是れを聞て大いに懽喜、妖精に向ひて一喝し給へば、他れ直ちに原身を現はし、一個の白玉兎と成りにけり。嫦娥則ち索を取つて他れを繫ぎ住め、大陰皇君行者に謝し、遂に月宮に向ひて還り給ふ。行者大陰を見送り頓て轉迴して皇居に飛び歸り、國王首め三藏們に事の動靜を仔細語りければ、個々驚き且悦び只管賞贊したりけり。行者亦國

公主白兎
と変じて
月宮に
去る

王に對ひ、眞公主は布金寺に在て、彼の寺の老僧が養育し置る事を告ければ、國王滿心懷喜明旦急ぎ許多の內宮官女們に命じ、若干の官員輩を差添て布金寺に使し、彼の老僧に遇て事の動靜を具に說話、眞公主を請得て遂に皇宮に迎還しければ、國王君臣三宮六院の皇后妃嬪、都て神僧の恩を思ひ感謝する事際りなし。國王歡喜の餘りに堪へず、俄に丹青匠を宣して、師徒四個の像を畫しめ、鎭花閣の裡に收めて供養し、大いに筵宴を安排て師徒四衆を管待、强て五六日を住め遂に鑾駕を備へて三藏を座せしめ、君臣士民都べて城外へ送り出で、遙に遠く送り來り只管に餘浪を惜みて別れけり。

四編卷之八

寇員外喜待二高僧一
唐長老不レ貪二富貴一

斯て三藏師徒の輩、亦半月餘りを經て一座の城地に入、大路に添て急ぎ往處に、路の一邊に一個の樓門有。門の上に一面の大牌を掛て萬僧不阻と寫したり。三藏是を見て點頭嘆じて曰く、西方の佛地果して這般の善因ありとて、師徒四個、少時門前に彷徨ける處に、忽ち裡より一個の蒼頭門を出四個を看て大いに驚き慌得、鬧しく跑り入、主公門前に異形なる僧四個來れりと報じければ、是を聞て一個の老僧口に念佛を唱て、杖を携へて門外へ立ち出で、三藏師徒を見て禮を施し、却て他們が異形を怕れず、萬望は長老輩我家に入て少時休息し給へと云けるにぞ、三藏師徒答禮し、老者と俱に門裡へ前み入りければ、老者曰く、我家は佛堂も齋堂も有れども、且經堂に請じ候はんとて、遂に四個を經堂に導引入、大家座定まりて後老者三藏が來歴を訪問ける。三藏答て東土大唐より、西方靈山に到りて佛を拜し、經を求むるの由を說話ければ、老者大いに懽喜て曰く、這地は銅臺府中にて地靈縣と號す處なり。弟子は姓は寇、名は供、字は大寬、齡今六十四歲、這地の人都て弟子を呼で寇員外と稱す。

弟子四十歲の時より萬僧に齋を施さん事を誓ひ、今年に到りて二十四年、遂に九千九百九十六僧の齋を供へ、今四僧を得て滿願を做處に、今日僥倖天より四位の老師を降し給ひ、萬僧の數に圓滿す。萬望は老師輩爰に幾日を住りて、弟子が心願を滿め給へ。況んや是より靈山までは僅に八百里、圓滿の後に於て弟子轎馬を備へて老師を送り城を出し奉ん。三藏是を聞て拜謝し給ひける時、員外が老婆堂に出師徒四衆に相見ゆ。少時有て亦兩個の秀才堂に登り、三藏に對ひて拜しければ、三藏も急ぎ答禮し給ふを、員外住めて曰く、是れは我兩個の小兒にて寇梁、寇棟と號す者なり。他們老師の降臨を聞く、特に來りて拜を做、那ぞ答禮に及び候はんや。兩個の秀才當下父に向ひて問うて曰く、這老長老那國より來り給ふぞ。員外笑て曰く、來路甚だ遠し南贍部州東土大唐皇帝の旨を領し、靈山に登り佛爺を拜し經を求め給ふ長老なり。二秀才曰く、我曾て事林廣記を讀むに天下は唯四大部州あり。我這地は西牛賀州の中也。思ふに南贍部州より爰に到るに、不知多少の年代を歷給ふならん。三藏曰、貧僧路に有て若干の毒魔狼怪に出遇、千萬の辛苦を嘗む。故に住まる日多く去日少し。十四遍の寒暑を歷方て這寶國に到れるなり。寇梁兄弟是を聞て神僧々々と嘆息し母子俱に退きけり。員外亦四衆を齋堂に導引、且一齊に齋を侑め、懇懃に管待多日師徒を住めけるにぞ、三藏他が誠心を感じ沒奈何這家に滯留し、不期五七日を過し給ふ時、員外本處の僧家二十餘個を請て三晝夜の佛事を做、圓滿の道場を修行しける程に、是が爲に三藏亦五六日住められけるが、已に道場畢りて後三藏遂に員外に辭し

路に出んとし給へば、員外驚きて曰く、老師怎麽這般に急せ給ふや。這幾日佛事に因て鬧く多く長老に謝せん事を怠慢せり。是を怪み給ふに非ずや。三藏曰く、深く尊府の盛款を蒙る、何を以てか此恩を報んとす。然ば亦那ぞ別に怪む事有んや。唯前年貧僧唐王に別るゝ時、誤ちて三年に歸べしと云へり、今已に十四般の霜雪を經たり。經を求るも未だ有無を知ず、歸に及んで亦十二三紀を歴べし。是聖旨に違ふの罪大いなるに有ずや。萬望は員外曲て貧僧を去しめ給はらば、住るに增る功德ならん。八戒身邊に在て是を聞堪咤て上前出て曰く、師父も甚人情に疎し、老員外は富饒の大家萬僧齋の誓を做、今既に圓滿し亦況や誠心に住給ふ。假令半星一紀住るとも亦一向に苦しからじ。這般の好人の齋を食せず只管路に出、人家の門に立、半碗一鉢の冷飯を好給ふは何事ぞや。三藏怒て曰く、儞這獸子唯齋を吃事のみを知て、却て經を求るの遲きを顧ず、儞輩都て初て人と成の畜生、唯安樂にのみ食せん事を要む。儞門既に爰を去事を願ず、然ば明旦より我一個靈山に登るなり。儞輩何年までも爰に在て樂むべし。行者師父の怒給ふを看て八戒を扯退け、獃子無益の口を開き都て我輩まで師父に怪しむるやと詈りければ、八戒忿忿たる光景にて、一邊に身を退き獨何をか氣呼的居たり。員外卽ち三藏に向ひ、老師深く煩勞給ふ事勿れ。且强て今一日を住り給へ。我明旦幾個の親隣を請來り、旗鼓を備て遠く送り候はんと、只管勸め住めける處へ、員外が老婆出來りて曰く、這幾日師父を住め給ひしは都て皆員外の功德なり。老身も亦些少の釘線錢あり。萬望くは老師を幾日供養し、老身が功德と做候はん。當下亦寇梁兄弟も出來りて更に幾日を住んとす。三藏固く辭して敢て住り給はず。寇梁母子大いに色を變じ我們好意を以て住め侍ふに、這般に執性に去んとす。我輩も亦再び無益の口を開かじとて遂に身を裏面て退きけり。三藏甚心裡事憂思ひけれども、沒奈何亦一日を滯留し、翌日遂に辭し別れん事を告給ふ。員外果して許多の親隣を集め、盛宴を開いて餞別を做し、彩旗寶蓋を列ね鼓手樂人を呼、唐僧四衆を送りて路に出づ。鼓樂天に喧嘈しく旗旛日を蔽ひ、看的の男女街上に充滿し、都て寇員外が富貴を羨みけり。員外既に城門外に出で、十里に至りて亦一席の素筵を設け、萬般と管待遂に別て歸りけり。三藏は懇切を拜辭し員外に引別れ、西に向ひて只管急ぎ給ひけるが、亦四五十里經て天色既に晚ければ、八戒背を努着て好人の茶飯を喫す安樂の家に住す、只管路に急ぎ出日暮に到れども宿べき家もなし。況や亦雨を降さんとす這一夜を怎麽せんや。三藏罵つて曰く、薛畜また我を怨むるや。常言にも長安好しと雖も、久く戀の家に非ずと云り。我們果して經を求め得ば、大唐へ歸りて皇帝に奏し、御厨の酒飯を儞が心の儘に喫しめ、儞が肚を張破りて十個の飽鬼と做しむべし。八戒是を聞て不期吸々と打笑ひ、頭を低て居たりけり。行者則ち四方を望み、大路の一邊に一個の廟宇有を看着、師父且那里に往て安歇給へと、個々路を急ぎ彼古廟に到り見れば、上面に華光禪院の四字あり。墻壁破れ傾き倒れ蔓草地に遍く、一個の踪跡も無りければ、急ぎ立出んと爲る處に、忽ち大雨降下りければ、四個沒奈何彼の廟中に一宿したりけり。

金酬外護遭魔毒
聖顯幽魂救本原

原來這銅臺府地靈縣の間に許多の賊徒あり。今日寇員外が唐僧を送る、其富麗比ひ無を看て、個々俄に心を搖し、黨類の群偷三十餘個加交合せ、這夜大雨に乘じ鎗を提刀を把、寇員外が家の大門を打ち開き一齊に推入ければ、家裡大小の男女大いに驚き狼狽騷ぎ、盡く四方に散て逃げ隱れ、員外夫婦は床の下に屈潛敢て聲を發る的無りければ、偷賊們許多の火把を揚點し、心の儘に家裡を搜し、金銀衣服寶貝盡く奪ひ取り、既に去んと爲る處を、員外床の底より跑り出て、例位の大王萬望は些の衣服を殘し住め、我輩が形を掩はしめ給へと呼りけれども、偷賊輩耳にも一向聞容ず、員外を打倒し蹋翻し一齊に門を出て逃去けり。隱れ居たる家僕的偷賊已に退きたるを見て個々出來り、老員外を扶け起すと雖も、致命所を太く蹋れたりければ遂に魂退き息絶たり。老婆及び寇梁兄弟家裡の蒼頭們、大家聲を發つて哭悲しむ。中にも老婆は員外が唐僧を供養し、華麗を盡して他を送りし故、遂に偷賊們に窺著這の難に遇たるを悟り、只管唐僧を恨み忽ち妬害の心を生じ、寇梁兄弟を呼で曰く、儞們欺く事を止よ。儞が父を殺せしは別人ならず、都て彼賊僧們四個が所爲なり。兄弟曰く、母親賊僧とは那れの賊僧なるや。老婆が曰く、昨日まで供養したる唐僧輩四個が事なり。兄弟曰く、唐僧們が爲處なる事怎麼して知給ひたるや。老婆が曰く、我嚮に床の底に潛居て委く是を打窺得たり。火を點せるは唐僧、刀を持たるは猪八戒、金銀を搬たるは沙僧、儞が父を殺せしは孫行者なり。寇梁兄弟曰く、母親這樣に彼を親く看住め給ふ上は、些少も疑ひ有らじ、他輩久しく我家に住まり居て、家裡の路開は能く知りたり。財寶を看て心を動し、大雨に乘じて這の家に押入り、家財を奪ひ父親を殺せるなり。他們怎麼這般の惡事を做や。我們兄弟明旦急ぎ官府に訴へ、這の讐を報ずべしと、一家裡都て忿々然として夜の明るをぞ待居たる。頓て天明に到りければ、兄弟急ぎ一封の告文を認め、俄に府堂に到り彼告文を呈上ければ、銅臺府の刺史此の告文を看畢りて、寇梁兄弟を宣て逐一に仔細を問給ひ、遂に兵士百五十人を點じ出し、西に向はせ唐僧四衆を追しめけり。却つて說三藏師徒は是れを知らず、彼の華光禪院の破屋に一夜を明し、天明に及んで雨も降止みければ、急ぎ破屋を立出て路を要て急ぎける。豈計らんや彼の偷賊ども、夜間這の路上まで遁れ來り、華光院の破屋の邊は跑過ぎ、一堆の山の樹蔭に在て金銀衣服寶貝を配分して在りける處へ、忽ち三藏師徒の來るを看着け、他們尙慾の心火住まらず、忽ち謂て曰はく、那處に來る和尙們は、昨日員外が送りたる唐僧四衆に有らずや。他們久しく寇家に在て留住したれば、多少金銀の供養を請て所持するならん、我輩亦他們を捉て盤纏を奪はば、增々十分の利を得べしと、個々兵器を扯提て一齊に跳り出で、路を攔て大音揚げ、儞們唐僧命惜くば買路錢を殘らず我們に遞與。然なくば儞們を麼に做べきなりと同音に呼はりけり。三藏是を聞て怕れ戰き、地上に轉て落ちんと爲を、行者急に推し住め、師父怕れ給ふ事なかれ。

我今定身の法を行なひ、他們を盡く捉へ候んと、行者彼偷賊們に向ひ、口の裡に咒語を念へ定身の法を行ひければ、今まで兵器を振ひ詈り居たる偷賊ども、個々睜着眼眞直と站定に成て、動く事成ず言語ふ事能はず。當下行者一把の毛を拔き、變じて三十餘條の索と做し、沙僧を呼で盡く偷賊どもを細縛させ、再び咒語を念て定身の法を解ければ、偷賊們漸く本身には歸りたれども、手足を固く縛められたれば、一向に搖く事能はず。行者鐵棒を推把て偷賊們に打向ひ、儞們幾年か賊業を做し多少の人家を劫し、幾個の人を殺したるぞ、實々に自首せよと詈りければ、偷賊ども驚き怕れて曰く、我輩は原來久く偷業を做者に有らず。都て皆好き人家の子弟なり。不才にして先祖の家業を失なひ、黃白を花費盡し錢使用に迫りし儘に、不期寇員外が富饒なるに思ひ着、昨宵他が家に推入り金銀衣服寶貝を偷み來り、爰に有て配分候ふ處に、今亦長老輩の來り給ふを看て、又買路錢を要ん事を欲して、不期神僧の大法力に遇ひ、斯の如く細縛られ今一向に後悔するなり。萬望は神僧慈悲心を以て我輩を饒し給へ。三藏是を聞て驚て曰く、寇員外は一個の善人なるに、怎麽這の災害を得しならん。我輩已に他が厚情の恩を受く、今他們が偷み來りし財寶金銀等を取て、員外が家に送り返さば却て是一件の好事ならずや。行者是を聞て理なりと同じ、偷賊們に向ひ、儞們昨宵偷み取たる金銀衣服を、殘りなく返さば、儞們が性命を饒すべし。若是を否ば逐一に打殺さん。偷賊ども打泣て曰く、命だに饒し給はらば、員外が家の財寶は殘りなく返し奉らん。行者頓て八戒沙僧に云て、山の樹蔭なる寇員外が財寶金銀等を盡く搬ひ出させ、山の如く馬に馱せ、亦八戒に一担の金銀を擔せ、沙僧も又一荷を揵ぎ、行者身を搖ひて毛を收むれば、偷賊們が細の索忽然として消失たり。偷賊ども不思議に細縛を脫れ、且つ怪み且つ歡喜跡をも看ずして四散けり。是より三藏師徒は亦東に向ひ轉廻し、員外が家に往んとして立出給ふ處に、忽ち許多の人音して、百五十個餘の官兵一齊に揑と跑來り、三藏師徒を取り圍み、何の仔細も言ず八戒沙僧を上首として、三藏行者も諸俱に搦擒府城を指てぞ歸りける。三藏大いに驚き、我輩に何等の罪ありて斯く綁め給ふやとて哭給ふを、行者聲を勵して曰く、師父憂ひ給ふ事なかれ。是れ嚮に逃たる偷賊を捉へ爲の官兵なり。然れども過ちて我輩を捉ふ。我輩是を拒んで働かば眞の人間に傷着べし。不如是より官府に往て、詳かに說開んにはと云ひけるにぞ、三藏是を聞て打點頭、官兵輩に領れて急がれける。不多時府城に歸り入りければ、銅臺府の刺史堂上に端坐して、三藏師徒を廳前に引出ださせ、行李を開かせ見る處に、果て寇家の財寶盡く其裡に有りけるにぞ、刺史大いに罵て曰く、儞等和尙は東土大唐より西方靈山に登りて佛を拜し、經を取と稱して却て人の財寶を奪ひ、人の性命を傷たるは何の理ぞや。三藏曰く、貧僧が輩一向に是を知らず、原來賊を做したる事も無れば、人を殺したる事は愈覺え候はず。唯寇員外に別れてより西に向ひて急ぎ候ふに、不期も員外が家に入りたる偷賊に出遇たり。原來員外に恩を蒙りし我輩なれば、徒弟們偷賊ども追散し、財寶を盡く取返し員外に返し與へんとて轉回し來り候ふ處に、不期も官兵に擒られ、遂に爰に到り我們をして其偷賊と

爲し給ふ。且つ東土を出でし時より、長路の關文を持ち來れり。是れ證首と做すべきの一箇なり。乞ふ萬望は大人詳かに是を察し給へ。刺史是を聞て下官們に命じて、三藏の關文を出させ點檢し給ふに、果して唐朝よりの關文にて、個々諸國王の寶印あり。刺史看畢て謂て曰く、這關文儞輩が證見と爲すべきに似たり。然れども儞輩已に偷賊を追散し、財寶を取り返す程の勢ひ有ながら、一個なりとも搦め取て證見に扯來るべきを、其事なく財寶のみ持來りしは、分辨奈何とも信じ難し。且儞們を獄に下し置き、悠々究問すべきなりと、遂に刑部吏役に命じ三藏師徒を監せ、頓て獄室に下置けり。憐むべし三藏身に一點の過なく、異郷の獄室に繫がれけるにぞ、涙散々として住らず只管啼泣し給ひけり。行者身邊に在て笑て曰く、師父何を然樣に歎き給ふや。明日は管す爰を出し奉らん。但し這の牢裡雞犬の聲もなく幽靜なる處なれば、大家安寐には大いに好し、何を憂ひ給ふらんと諫勸けるにぞ、個々心を安んじて牢裡に在けるが、已に夜深て四更の頃に到り、三藏疲れ出でて睡り給ひける程に、行者身邊に在て是を見て暗に思ふやう、師父已に一夜牢居の災ひを受け給ふ。今四更の天に到れば、災星管す除きたらん。我快く是を救ふべしと、遂に身を小少變じ、一個の蠕虫兒と成て簷の瓦の綉裏より飛び出、東に向ひて飛び去り、員外が門前に一家の燈火の光り見えたりければ、這の家の簷に飛び着て裡の光景を打探看れば、是れ豆腐を製る家なり。主の老頭火を燒て一個の媽姉と倶に豆腐を造りながら、他老頭媽姉に語て曰く、寇員外は子有り財あれども却て壽命なし。我他が幼き時同學の友にして書を習ひしが、我は他より長ずる事五年の兄なり。當時他は家產とても甚饒ならず。他運强くして二十歳の時、一個の好妻を娶たり。彼老婆は張旺が女なり、小名を穿針兒と云ひ、父の張旺家最も富り。然るに張旺死して後家を繼べき子も亦死たり。遂に張旺が家產皆寇員外が物と成り。夫れより今の如く富榮るの家と成り。寇大官則ち萬僧に齋を施したるに、不期昨夜偷賊に殺されたり。善を做ば善報を得べきを、却て非命に死したるは抑奈何なる事ならん。不知前世に何等の罪を結びたるや、憐むべし〳〵と只管語り居りけり。行者是を遂一に聞濟し、亦翅を展て員外が家に飛び去、裡に入て看れば、這の家は尙許多の燈光を點じ、老婆と寇梁兄弟三個棺の前に香花を列ね、兩邊に座して哭居り。行者則ち棺の上に飛び行き悄々に住り、一聲の咳嗽を做しければ、母子三個大に驚き、寇梁兄弟は下に打伏戰兢怕る。老婆は却て大膽にして、老員外蘇生給ひたるや、怎麼聲を做給ふぞと云ひければ、行者寇員外が聲を似て曰く、我曾て活ず我は閻王の命を受け、儞們を責めに來りたり。儞穿針兒怎生謊りを設けて罪なき人を害するや。老婆他が小名を呼けるを聞怕れ、驚き跪下て曰く、老員外我輩已に這の老年なるに、却つて小名を呼給ふ。我那ぞ謊り人を害し候んや。行者曰く、彼唐僧四衆誰が命を害し誰が財寶を偷たるぞ。彼偷夫は三十個餘りなる事は、儞們も是程の事は窺着たる成べし。却て四個の聖僧は路頭にて偷賊を捉て財寶を奪ひ返し、我家に送り返さんと來り給ふを、却て儞等府堂に訴へ、聖僧を牢中に困苦しむ。是謊りて罪なき人を害するに有らずや。這の故に閻王大いに

怒らせ給ひ、今より儞們三個を冥府に誘引來れよとて、我今閻王の命を受けて、儞們を迎へに來れるなり。老婆を首め寇梁兄弟這の事を聞き、驚き悲み一向に言語事能はず、少時搖ひて居たりけり。

四編卷之九

前章之下

行者亦曰く、儞們若し冥府に赴く事を悲く思はゞ、快く官府に解狀を獻て、唐僧四衆を救ひ出すべし。然らば我閻王に請て、儞們が一命を救ふべし。若し些少にても遲滯ば忽ち儞們を帶去ん。當下老婆寇梁兄弟一齊に拜禮して曰く、唐僧師徒を偷賊と思ひ違へて官府に訴へしは、都て我輩が過罪なり。明旦越早官府に至り、解狀を獻りて聖僧四衆を救ひ出し候はん。願はくは老員外我們が命を饒し給へと、只管歎きて詫けるにぞ、行者他們が歸伏せるを看て、然らば我は歸るべし。一刻も快く聖僧們を救へよと云ひて、其後は寂として音もなし。斯て行者は暗に這家を飛び出て、夫より地靈縣の府堂に到りて打探看ば、當時正に東方發白個々官士廳前に列座す。不多時府刺史も堂上に出で給ふ。行者思ふやう、這處人多ければ蜈蚣兒の形にては好しからず。一且手段を變て他輩をも一嚇し驚ろかさんと思ひ、忽ち空中に飛び上り本相に歸し、亦變じて空中より大太なる片脚を堂前に差下し、怕氣なる聲音を發し、儞們衆官審に聞け、我は玉帝の差來的にて浪蕩游神なり。儞們經を求むる活佛を擒捉置きて牢中に困苦しむ。若し快く是を放ち出さずんば、我這一脚を以て衆官人どもを殘らず蹴

殺し、城郭房宇を一時に踏破り、灰燼と做べきなりと呼はりければ、這聲を聞て刺史を首として堂上堂下の衆官們個々身の毛を竪て驚き振ひ、一齊に地上に拜伏して曰く、上聖且歸り給へ。我們過て活佛聖僧を擒て大罪を犯したり。急ぎ活佛を扶け出し奉らん。萬望は尊足を動かし給ふ事なかれと、哀哭して詫けるにぞ行者亦曰く、儞們快く聖僧を助け出せ、若し些少にても遲滯らば、我再般來りて這城府を盡く踏破るべしと、云ひ畢りて頓て法身を收め、亦蚯蚓兒と變じ牢裡に飛び歸りけり。刺史を首め衆位の官士們、這奇怪に心膽を冷し色を失ひ、嘆息繼で在りける處に、忽ち寇梁兄弟一葉の解狀を捧げて廳前に來り、今朝父の魂を顯したる事を具に訴へ、萬望唐僧師徒を饒し給はらん事を願ひける。是を聞て刺史衆官亦更に恐懼を增、急ぎ刑房史役を呼び、唐僧們を獄中より放ち出し、四衆を堂上に請じ再三罪を謝し給ひけり。行者八戒廳前に在て、儞們昨日我們を捉へて偷賊の名を負しめたり。我輩這儘にては罷るべからずとて、三個とも同口に罵り騷ぎける。衆官們萬般と是れを詫けるを看て、三藏三個を諫勸て儞輩騷ぐ事勿れ、我れ再び寇家に到り、一個には員外を吊ひ、二個には何故我輩を指て偷賊と做たるや、審に是れを問糺すべしとて、遂に廳前を辭し去りて寇員外が家に到りければ、寇梁兄弟驚き怕れ再三再四陪禮し、急ぎ四衆を正堂に請じ入れ、只管向の罪を詫たりけり。行者老婆が無禮に爰に座して在るを看て、大音に呼で曰く、儞老賤婦謊りを設け我輩四個を害せんと欲したり。我今員外が魂を請來りて、他を打ち殺せる者を問ひ、這老賤婦を戒むべしとて、乍ち空中に飛び上り消が如くに見ず成りぬ。老婆を首め寇梁兄弟是れを看て驚き怕れ、戰ひ兢き居たりけり。行者は一旦空中に到り却つて轉回して、忽ち冥府に赴き閻王の廳前に到りて、今般の事を備細語り告て、員外が陽壽を延さん事を央み、他が魂を請求めける。閻王事の動靜を聞き、行者が願ひに任せ員外が魂を與へ給へば、行者懽喜員外が魂を請け領し、閻王に辭し別れて急ぎ地靈縣に飛び歸り、員外が家に走り入り、八戒を呼で棺を排せ、彼魂を員外が身に推入ければ、員外忽ち蘇生棺の裡より立ち出て、一邊に唐僧の座して在るを看て驚き拜を做、我今偷賊に踢られて死し、冥途に赴たりしを、孫老爺來りて閻王に我魂を請ひ給ふよと覺えしが、今忽ち蘇生する事を得たり。寇に再生の恩人なりとて、身を擲打て感謝しけり。行者則ち老婆が謊りて官府に訴へ、師徒四人を牢中に困苦しめし事を委しく語りければ、員外是を聞て大に怒り憤り、老婆を官府に訴へて頭を刻んと罵りけるを、老婆只管歎きて是を咤、寇梁兄弟も我身の過ちを悔み、父に歎きて咤にける。三藏も亦一向員外を勸め和め給へば、員外纔に心を定めけり。行者頓て官府に告て偷賊が偷し金銀衣服財寶を、殘りなく員外が家に送り返し與へければ、員外親子大いに懽喜、夫より亦大いに筵宴を按排し師徒四衆を管待けり。翌日亦鼓樂を奏し旗幢を備へ、前の若くに師徒四衆を送り出しければ、府縣の刺史官士們も俱に出で來りて、三藏師徒を拜し諸俱に送りける程に、初めに增して賑く二十里餘り送り行て遂に別れて歸りけり。

猿熟馬馴方脱レ殼
功成行滿見二眞如一

唐僧四衆は寇員外に別れてより、大路に上て只管路を急ぎ給ふに、西方の佛地果して他處と同じからす、花草清にして松栢綠深し。家々に僧を供養し戸々に齋を施し、山下の人皆道を修し、亦看林間讀經の聲絶ず。誠に六根清淨の境界なり。斯て五六日を過行處に、果して靈山の麓に到る。行者遙に靈鷲高峯を指差て、彼半天中に五色の祥光發する處、則ち佛祖の聖境なりと云ひければ、三藏急ぎ馬より下りて、峯山を拜せんと爲給ふを、行者笑て曰く、是より頂上まで尙許多の行程あり。且衣服を更め漫々と拜し給へとて、四衆個々路傍に休み、一處の澗水を尋ね水中に入て沐浴し、三藏毘盧帽を戴き錦襴の袈裟を着し、徒弟們馬を牽行李を擔ひ、山頭に向ひて七八里登り行く處に、忽ち一帶の流水八九里の寬濶あり。遠近に船も見えず唯一根の獨木橋あり。橋の一邊に一片の扁を掛て凌雲渡と寫着たり。三藏驚いて曰く、是人の涉べき處に非ず、我們路を過ちたる成ん。行者曰く、差ず差ず我且試に渡りて見んとて、忽ち橋に飛び登り飛ぶが如くに跑り渡り、向ひの崖に到り手を揚て指招くに、三藏手を搖て怕れを做、八戒沙僧も怎麼はせんと後邊へのみぞ退きける。行者沒奈何亦向ひの岸より跑り歸りて、師父快く我に跟ひて渡り給へ。八戒沙僧も疾渡れ此處佛界なり。此橋だに能く渡り得ば成佛すべし。我輩此橋より渡り過て佛と成るなり。八戒儞快く我に跟ひ來れと雖も、八戒怕れて我實に這橋を渡り得ず、但雲に駕て渡るべし。行者曰く、雲に駕て渡りては成佛し難し。八戒曰く、我は佛と成らずに歸るべし。行者笑て曰く、獸子怠慢の言を吐べからず。快く我と俱に來つて渡るべしと、兩個橋の一邊に在て扯つ引れつ迫合處に、忽ち下流より一艘の船を撐て來る船叟あり。師父快く此船に乘て渡り給へと呼はりけり。三藏是を看て大いに愴び、儞們快く是に乘よ渡し船爰に有りとて、急ぎ岸に臨みて船に下らんと爲處に、怪しむべし這船一艘の底無舟なり。三藏再般驚き這破船奈何して能く人を渡さんやと逡巡し給ふを、行者身後より師父快く船に乘給へと船中に推下せば、三藏狼狽撲的水中に落ち入りて、阿と一聲叫び給ふを、船叟快く手を指展して船の上に扯上げる。三個の徒弟們も連いて船に飛び乘ければ、船叟既に船を撐出しける時、船の一邊に一個の死骸浮み出て流れける。三藏是を見て驚き給ふを、行者笑て曰く、師父驚き給ふ事なかれ是師父の屍なり。今日肉身を脱し凡胎を棄給ふなり。八戒沙僧手を拍て驚き、寔に然なり實に是師父の屍なり。今日凡胎を脱れ給へりとて懽喜ければ、彼船叟も歡喜を做つゝ船を廻して不多時西の岸に到り、四衆馬を牽行李を取り向ひの岸の上に登りければ、船叟は船を回して中流に到ると見えしが、接引佛祖寶幢光王佛と現はれ給ひ、直ちに彩雲を縱つて飛び去り給ふ。三藏是を看て急に虛空を禮拜し、個々身輕く心快快として山上に登り行くに、不多時雷音寺の下に到り、着て其光景を眺むれば、高峯直に聳え樹木參差と排列し、瑤草琪花徑傍に彩を添へ、紫芝香き風を生じ、黃葉森々として上に珊瑚の甍を磨き、金

瓦整々として下に瑪瑙の磚を双べ、珠閣金殿雲外に彰れ、山門の一邊には瑞光朗々として立ち昇り、其光景耳目に觸る類に有ず。三藏滿心歡喜に堪ず、手の舞ひ足の踏地を忘れて立ち給ふ處に、快許多の比丘、比丘尼、優婆夷、優婆塞們出來りて、三藏に告て曰く、東土の聖僧快く入て牟尼尊を拜し給へと呼はりける。三藏是を聞て愷しく、手に錫杖を携へ靜々と上前雷音寺山門外に至る。當時快二大金剛出で迎へて、師徒四衆を導引入れ、二の門上の四大金剛に通じ、二の門より亦連々に報じて、遂に大雄殿下に通達す。佛祖如來大いに懽喜給ひ、且八菩薩、四大金剛、五百阿羅、三千揭諦、十一大曜、十八伽藍を宣聚め、兩行に排列しめ、如來旨を傳へて唐僧を宣給ふ。三藏則ち三個の徒弟を從へ徐々として大雄殿前に至り、四衆一齊に地上に拜し、且關文を出して捧げ奉りければ、如來之を取て披き看終り、亦三藏に返し給ふ時、三藏跪下拜して曰く、弟子玄奘東土大唐皇帝の旨を奉じ、寶山に登りて眞經を求め得て、衆生を濟度せん事を思ひ候ふ。萬望は佛祖恩を垂給ひ、快く經を贈り給はつて貧僧を歸らしめ給へ。當時如來曰く、儞が東土は南贍部州の一大地にして、天高く地厚く物廣く人稠く、不忠不孝不仁の輩許多、永世阿鼻地獄に落ちて生々世々浮み昇る事能はず。偶孔氏なる者在て仁義禮智の敎へを立て、帝王相繼で徒流絞斬の刑を製すと雖も、恐昧無智の輩を奈何とも爲る事能はず。我今經三藏有り、通計三十五部一萬五千一百四十四卷、全く儞に與へ去しむべし。是修眞の經正善の門痴愚の凡夫を化度して、其利益限りなし。三藏是を聞て懽喜に堪ず幾般拜しける。如來當下阿難迦葉を呼び給ひ、儞等唐僧們に齋を吃せしめよと命じ給ひければ、阿難們兩個唐僧輩四個を領て珍樓の下に導引入れ、齋を安排して管待ける。寔に是仙品にして仙肴、仙茶、仙果、都て凡世の物に非ず、皆是正壽長生換骨脫胎の珍羞なり。四個是を食する毎に、心裡忒だ爽かにして清々たり。遂に食し畢りければ、如來亦阿難迦葉に命じて經卷を出ださせ給ふ。二尊者命を受て亦三藏を導引、寶閣を排いて入りければ、霞光瑞氣千重に罩ひ、祥雲彩霧萬道に遮る。閣裡に金銀珠玉を鏤めたる經櫃寶篋若干あり。皆悉く眞紅の籤を貼着、楷書を以て經卷の名を寫したり。二尊者這經卷を指し示して因て三藏に對して曰く、聖僧東土より來る、何の人事をか我輩に送るや快く取り出し給へ。三藏曰く、弟子來路遙にして漸々爰に至る。因て曾て人事の準備を致し候らはず。二尊者笑て曰く、好々我輩白手の人に經を傳へば、後に管ず餓死すべきなり。行者是を聞て忍住兼て呼はつて曰く、師父我輩快く去て此由を告て、如來の手親經を接取べし。阿難曰く、悟空儞爰を何の處と思ひて這樣に嘆ぎ叫ぶや、快く來りて經を領せよ。八戒沙僧兩個急ぎ行者を請勸、遂に一件に經卷を接り、馬に馱せ肩に挑ひ、再び寶蓮座の前に到りて如來を拜し、幾般大恩を謝し奉り、頓て寶前を辭し退き幾重の門を出で、諸尊諸菩薩を盡く拜禮し、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷們にも別を告げ、山を下りて急ぎける。原來彼經卷を納め有りし寶閣の上に、一尊の燃燈古佛在しけるが、當下阿難迦葉輩が唐僧に與へたるは、都て皆無字の經卷なれば暗に打笑ひ、東土の衆僧愚昧にして無字の經卷なる事を識ず、遙々と

遠方の地を來りし苦辛を徒に做事の不便さよとて、急ぎ座邊に居在たる白雄尊者を呼びて、儞快く唐僧們に追及、彼無字の經卷を把捨て、他們に再般來りて、有字の經卷を取らしめよと命じ給へば、白雄尊者領承て急ぎ山門を立ち出で、一陣の狂風に駕し、少時の間に唐僧に趕上、空中より手を伸し、馬に駄せたる經卷を輕々と扯把、經包を扯破り地上に拗捨、風を轉じて雷音寺に飛び入り、寶閣に立ち歸り燃燈佛に這事を告て、唐僧の來るを待ち居たり。三藏師徒は是を見て大いに驚き、行者鐵棒を把て空中に飛び上りけれども、經卷已に地に落ちければ、且雲を下りて八戒沙僧と俱に經卷を拾ひ集めける。三藏は泪を流して、極樂世界にも這樣なる邪心なる者在るよとて、漸々徒弟們と卷數を查勘給ふに、是怎麼這經卷一字半點の跡もなく、皆白紙の經卷なりければ、四衆大いに驚き、再般打披き打排き點一卯看に、那個もいづれも皆無字の白本なり。三藏嘆息して曰く、這經卷都て皆無字白本にて不要の物なり。斯る物を遙々と東土に持ち歸りて何にかせん。唯這我身の沒福なりと、只管憂ひ歎き給へば、行者曰く、師父憂ひ給ふ事なかれ、我這仔細を知れり。彼阿難迦葉の潑禿子們、我輩が人事の贈り物なき故に、這白本を與へたるなり。我輩快く還りて如來に這由を奏して、人事を貪るの罪を糺すべし。八戒沙僧噪で曰く、長兄の言差じ我輩速く往て如來に告げ奉るべしと、四衆乍ちに身を轉じ亦山上へ跑登り、喘呼呼的山門に跑入りければ、衆聖者四大金剛們も疾已に是を悟り、唐僧輩經を換に來りたりとて、路を開いて避過しける。行者の輩忿氣然々として大雄殿前に到り、呼

白雄尊者
經巻を
破り棄る

はつて曰く、如來聽給へ、我輩師徒千萬の苦辛を凌ぎ、遙々と東土より來り如來を拜して經を求むるに、阿難迦葉我們が人事無に因て、故意無字の白本を與へしめたり。我輩是を取り歸りて何の要にかせん。如來快く兩個の和尚が罪を糺問し給へ。佛祖笑て曰く、儞們嘆事なかれ。阿難等が人事を要めんと云ひし事も、我能く是を知れり。但是れ此の經輕く傳ふべからず。亦空しく求むべからず。向年衆比丘等山を下りて、舍衞國趙長者が家に行きて、此經を一遍讀誦し、他は家を保ち生者は安全亡者は濟度したりと雖も、他們黃金、白銀、米粒三斗三升を討め得て還りしすら、我尙忒だ賣賤とす。是を以て他們が後代の兒孫、管ず沒錢使用かるべし。儞輩白手にて求むる故に、白本を與へたらん。然りと雖も白本は無字の眞經却つて尊しと雖も、但儞が東土の衆生性愚迷にして悟る事能はず。然らば今更めて有字の眞經を與ふべしとて、亦阿難迦葉を呼び此旨を命じ給へば、二尊者亦三藏四衆を領て珍樓寶閣に到り、因て亦人事を要むる事初めの如し。這時三藏沙僧に命じて、紫金鉢盂を取り出させ自親双手に棒げて曰く、弟子實に貧寒にして且つ遠路を來り、曾て人事の准備候はず。這鉢盂は唐王より親手賜はりたる處の器にして、弟子路上是を以て齋を化したり。今是を奉上して些少寸志を表せんと欲す。萬望は二尊者是を收め給ひて、有字の經卷を我輩に與へ給はるべし。二尊者是を看て三藏の經を求むる心の切なるを思ひ、是無上功德の和尚と成るべしと個々暗に感じつゝ、許多の經卷を取り出して與へければ、三藏は行者輩と件一に取り揚て卷を披き看に、正に是有字の經卷にて有ければ、

四衆皆大いに懽喜、盡く齊整て馬に馱せ其餘は一担と做て八戒に挑はせ、沙僧行李を擔ひ行者馬を牽三藏は錫杖を取り、如來の寶前に到りければ、如來則ち降龍伏虎の二大羅漢に命じ、雲磬を打ち响せ、諸天諸洞の諸菩薩、大小の尊者輩を呼び給へば、須臾天樂空間に响き、祥光四方に散亂し、遍く諸天の諸菩薩、三千諸佛、揭諦、金剛、五百羅漢、盡く集り來り個々如來に禮拜し、大雄殿上に排列す。如來諸佛諸菩薩に對ひ、東土に經卷を送る由を語り給ひ、然して後亦阿難迦葉に對ひ、東土に傳ふる經卷の數を問ひ給へば、二尊者謹敬で逐一に是を報じて曰く、

涅槃經四百卷
虛空藏經二十卷
恩意經大集四十卷
寶藏經二十卷
禮眞如經三十卷
大光明經五十卷
維摩經三十卷
金剛經一卷
佛本行經一百一十六卷
菩薩經三百六十卷
首楞嚴經三十卷
決定經四十卷
華嚴經八十一卷
大般若經六百卷
未曾有經五百三十卷
三論別經四十二卷
正法論經二十卷
五龍經二十卷
菩薩戒經六十卷
摩竭經一百四十卷
瑜伽經三十卷
西天論經三十卷
佛國雜經一千六百三十八卷
大智度經九十卷
本閣經五十六卷
大孔雀經十四卷
具舍論經十卷
大集經三十卷
法華經十卷
寶常經一百七十卷
僧祇經一百一十卷
起信論經五十卷
寶威經一百四十卷
正律文經十卷
維識論經十卷

都て是三十五部、通計五千四十八卷を與へたる旨を報じければ、如來則ち三藏を宣て曰く、這經功德無量なり。凡そ天下四大部洲の天文、地理、人物、鳥獸、花木、器用、人事とも這經に載ざるなし。儞們南瞻部洲に到らば、一切衆生に示し漫に是を輕んずべからず。沐浴齋戒せずんば容易卷を開くべからずと示し給ひければ、三藏謹で領掌し、頭を叩いて佛恩を謝し、幾回如來を禮拜し、徒弟們を從へ急ぎ山門を立ち出で給ふ。當下觀世音菩薩殿上に上前出て、佛祖に向ひ合掌して曰く、弟子當年金旨を領し東土に到りて經を取る人を尋ね、今已に功成れり。年を計るに都て是れ一十四年、日數五

千四十日、唯是れ八日少くして藏數に合ず。今聖僧を東に歸し東土に經を傳畢り、亦四個を西に向ひて歸らしめ、往來八日の間に有りて一藏の數に合しめ候はん。如來是を聞き給ひ特に歡喜給ひけるにぞ、菩薩急ぎ八大金剛を宣て、儞們快く唐僧に赶上、唯八日の內に有て東土に送り、亦這處まで轉廻し領來るべしと命じ給ひける。金剛是を承諾て、則時に唐僧に赶上菩薩の命を備細語り、八日の間に有て亦這處まで還るべき由を告げ、聖僧我と一齊に來り給へとて、雲を縱て飛び乘ける。行者が輩三個は原來飛行自在なり。白馬も同じく凡胎ならざれば個々雲に飛び駕ける。是を見て三藏這怎麼と躊躇給ふを、行者師父の手を取て雲の上に扯上ける。此時三藏既に凡胎を離れ、進退前と同じからず輕々と雲に飛び駕けるにぞ、滿心歡喜に堪ず。是より個々金剛に從ひ、東に向ひて空中を飛び去ける。

四編卷之十

九九數完魔刻盡
三三行滿道歸根

觀音菩薩亦唐僧を守護したる五方揭諦日値功曹六甲六丁護教伽藍の諸神を宣給ひ、唐僧今年までの苦辛、路上魔に遭難を受けし事、其數幾個なるぞと問給へば、揭諦們の諸神是を件一に奏上す。菩薩筆を採て逐一に寫し給ふ。首め金蟬長老の下界に貶られしを第一難として、胎を出江に拗られしより、或は魔に迺妖に捉れ、火に燒れ水に沈み、小雷音寺火焰山亦七情女松林女子銅臺府に獄せられ、凌雲河に胎を換るまで、幾個の難有りしを、盡く寫著し是を計給ふに、都て是八十度の難有けり。菩薩是を看畢りて曰く、佛門の中九九眞に歸すと云へば、唐僧既に八十難を過れども九九の數全からず。這數を成さんと爲に、亦更に一難を生ずべし。儞等今より唐僧に赶上快く一難を與へて、九九の數全からしめよと命じ給ひければ、諸神這旨を領承て、乍ち雲に打駕て空中を走り、漸々一晝夜を經て始て唐僧輩に追及、揭諦暗に八大金剛の耳に口を着て這旨を細語ければ、金剛打點頭忽ち乘たる雲を刷的扯取て、三藏四衆白馬も俱に一齊に拗落したり。四個は凡地に落され個々大いに驚き、這抑奈何な

る事ぞや。是我輩が走る事快きが故に、八大金剛少時歇んが爲に我輩を地に下し給ふならん。不知這地は那れの處ならんと、四方を遙に打探看に、東に一道の大河あり。則ち向年氷の中に陷入し通天河の西岸なり。四個直に河岸に走り出、三藏徒弟們に向ひ、舊年這河の東岸に至りし時は、儞輩陳家莊にて妖精を降し、他們が兒女を救ひ他們船を備て我輩を渡し、亦僥倖に白龜ありて我輩を渡したれども、這西岸は船を求むべき處なし。怎麽して是を渡るべきやと曰へば、徒弟輩商議を做て曰く、師父既に凡胎肉眼を離れ給へば、決して前の如く水に陷入給ふ事なし。我輩個々雲を使て師父を駕て渡るべし。然れども行者が觔斗雲は忒だ快くて、師父未だ雲に駕慣ひ給はざれば却て危からん。八戒沙僧が雲を一箇に合せて、是に駕て師父を渡すべしと、已に准備を做ける處に、忽ち水中に聲有つて唐聖僧這邊へ來り給へと呼る者あり。四個驚き是を看ば、彼前年の白龜なり。岸の一邊に浮み出て頭を探て曰く、我這幾年老師父の回給ふ日を待呟たり。今日僥倖に爰に來り給ふ、快く我背に座て渡り給へ。行者笑て曰く、向年已に儞老龜を勞したり。今年亦再會して儞を勞せしむる事よとて、四個懽喜笑ひつゝ馬を牽行李を取り、彼が背上に踏着三藏も徒弟們も皆背上に駕ければ、彼白龜四足を開きて水を踏平地を行が如くにて、少時の間に東岸に近き、忽ち頭を回して曰く、前年師父若し佛を拜し給はゞ、我何の時人身を得べきか是を問ひ給はんと曰へり。今這事を尋ね來り給ひたるやと問ひければ、原來三藏西天にて佛を拜せし時、唯經を得ん事にのみ心を蕩れ、他が事を問べきを不都に忘れ、曾て是を尋ねず。今他に問はるゝに及んで首て心着、返すべき言もなく、唯頭を低て在します。白龜則ち唐僧の是を問ひ來らざるを悟り、忽ち心裡怒を生じ撲生水底に沈みけり。這時三藏凡體に有らざれば漫に沈み給はず。徒弟們驚き急に師父を水面に救ひ揚、白馬は原來龍の化身同く水上に跳り出。經と衣服とことゝく水に濕ひければ、個々東岸に登り經包を開き、水を乾さんと做時、亦一陣の狂風颯的發り雷電天地を動かし、石を飛し砂を走らし、大雨車軸を轉す如し。行者鐵棒を輪し、是陰魔這經を奪んと爲なるべしと、經を廻りて守護しける。八戒は馬を牽住め、三藏沙僧は經を按へ、遂に東岸にて一夜を明し天明に及んで風定り雨止ければ、一邊なる石崖の上に到り、經包を開きて日に乾し個々守護して座居たり。這故に今に到りて彼處に經を晒たる石尙存せりとかや。當下快幾個の漁人河邊に出來りけるが、都て三藏師徒を認得、這老師父は前年此處の難を救ひ、陳家莊に留住し西天に赴き給ひたる聖僧なり。我們快く陳家莊官に告知すべしとて急ぎ跑り歸り、這由を陳家に報じければ、陳澄兄弟是を聞て物も取敢ず、幾個の漁夫佃戶們を隨帶て河岸に跑り來り、三藏們を看て禮拜し、老師爺々怎麽我家に來り給はざるぞ。這に在して何をか做て居給ふ。快く我家に來て歇給へとて只管に拜請しけるにぞ、三藏他們が誠心を感じ、遂に經卷を把收め陳家莊へ赴き給ひけるが、不期佛本行經石上に沾ひ破れ、幾卷を壞ね失ひけり。今に到りて本行經全からず哂せる石上に殘けり。三藏は是を看て這我輩が不德の致す處なりと歎き給ひければ、行者笑て曰く、天地の間都て全からず、今這經